大空異聞譚～魔法と少女とオレンジと。

沢藤 蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大空異聞譚～魔法と少女とオレンジと。

【Ｎコード】
Ｎ４８２０Ｒ

【作者名】
沢藤　蜜柑

【あらすじ】
いつも通りのはずだった日々。しかしそれは、突然現れた“ミュウツー”と名乗る生物によって崩れた・・・。
謎の術式をかけられて、ハイパー死ぬ気モード（頭の炎はない）から戻れなくなってしまったツナこと沢田綱吉。元に戻るため起き上ってみるとそこは・・・・・えっ、魔法少女のいる世界！？
「『大空異聞譚～魔法と少女とオレンジと。』、始まります。」
※のんびり更新になるかと思いますのでご了承ください。

第1話：それは旅の始まりなの？（前書き）

初めましての方もお久しぶりな方も、こんにちは！蜜柑です。
いらんことしぃな私が、またやらかしました・・・！

長い優しい目で見てくだされば幸いです。

第1話：それは旅の始まりなの？

日本・並盛町。
陽気な休日の昼下がり、そんなほのぼのとした雰囲気とはまるで違った少年がいた。

「リボーンのヤツ、なんで休日に修行なんか・・・！」

少年は、ひたすら木登りをしていた。
見た目高校生の少年が木に登ったり降りたりしている光景は、端から見ればなんともシュールである。

「ふう・・・終わった・・・！」

最後の木を登り終え、少年――沢田綱吉（さわだつなよし）はタオルで汗を拭った。

まさにその時だった。

（お前がボンゴレファミリー１０代目だな？）

ツナが振り向いた先には、見たことのない紫色の生物がいた。
少なくとも、ツナは目にした事がない生物であったことは間違いない。

「・・・何者だ。」

悪意を感じたツナは、素早くハイパー化した。
だが相手は、ツナの突然の変貌に少しも不思議がることなく淡々と話す。

（我が名はミュウツー。母の再生のため、お前とその守護者の魂をいただきに来た。）
「なっ・・・！！」

どうやら念話で話しているらしいこの生物。
いきなり現れて突拍子もない事を言い出した。

「・・・何故オレ達なんだ？」
（すでに、他の１４個のリングと１４人のその守護者はわが手に堕ちた。後は貴様らボンゴレだけだ。）
「なんだと・・・！？」

この生き物は７の３乗（トゥリニセッテ）とその守護者を狙っている？
堕ちたとはどういうことだ？
！！まさか・・・。

「・・・アルコバレーノもか。」
（無論。）

リボーン達――最強の赤ん坊でも敵わなかったということか？

「みんなをどこにやった！」
（・・・死んではいない。）

そう簡単に口を割ったりはしないか・・・。
だが、どうやらみんな無事らしい。嘘には感じられなかった。

「それはお前の持つべきものじゃない。」
（それは私のセリフだ。これは人間が持っていいものではなかった。）
「・・・おしゃぶりとマーレリング、それにユニ達は返してもらう！」

素早く後ろに回り込み、炎を灯した拳で全力でミュウツーを殴った・・・

・・・ハズだった。

「！？」
（・・・所詮お前もその程度か。）

拳は薄紫色のバリアの様なものに阻まれていた。
相手は振り向き、三本指（？）の腕をつきだした。

（サイコキネシス。）
「ぐぁ・・・ぅ、くっ・・・！？」

突然体の自由が利かなくなり、呼吸が苦しくなる。

（・・・。）

「うぅ・・・ぁっ・・・。」

だんだん目の前がかすみ始めた。

「が・・・ぁ・・・」

そしてツナは、ガクンと動かなくなった。

それを確認したミュウツーは、ツナの右手の中指にはまっていた大空のボンゴレリングに手を伸ばした。

（・・・このリング、抵抗している？この男何をした？）

リング自身が抵抗するなど、聞いたことも見たこともなかった。当たり前だが。

同時に、ツナをドサッと地面に落とした。

（リング自身が持ち主を選び、コイツは選ばれたということか。・・・面白い。）

地面に倒れたままピクリとも動かなくなったツナ。

彼を見下ろしてミュウツーは言った。

言った、とはいっても実際に口を開いて喋っているわけではないが。

（さっきは言わなかったが、ボンゴレの守護者もすでに我が手に堕ちている。そして、大空のボンゴレリングがなくとも、時間はかかるが、我が母は復活できる。）

そして、再びツナに向けて手をかざして語りかける。

（お前に興味がわいた。この術式を解除して欲しくば、私の所に来るがいい。そのリングに選ばれたお前ならばたどり着けるだろう・・・。）

そう残し、ミュウツーと名乗った生物は空間の隙間に姿を消した。

（今日は久々に笊蕎麦（ざるそば）でも作ってみよかな。）

いつもどおりに買い物を済ませて、いつもどおりに帰路につく。

（せっかく蕎麦が安かったんやからそうしよか。）

そう。

そこまでは、いつも通りやった。

そこまでは。

第1話：それは旅の始まりなの？（後書き）

文才の無い私にはこれが限界だったようです・・・。

拙すぎる文章ですが、こんな感じでよろしくお願いします！

第2話：回り始める歯車なの？（前書き）

はいどうも。昼より夜中の方がテンションの高い蜜柑です。

今回もプロローグ的な感じなのでゆったり呼んでいただければ（笑）

でわどうぞ♪

第２話：回り始める歯車なの？

太陽が落ち始めた林の中に、少女が３人。

「ど、どうしようって・・・とりあえず病院？」

「獣医さんだよ！」

「え、えっと・・・この近くに獣医さんなんてあったっけ？」

「ああっ、えーと・・・このあたりだと確か・・・」

「まって！家に電話してみる！！」

ツインテールの少女が抱いていたのは、傷ついたフェレットだった。

「・・・き！」

・・・誰かの声が聞こえる・・・？

「しっ・・・りし！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

再びオレの意識は闇に沈んでいった。

「しっかりし！」

スーパーからの帰り道。
後から思えば、その時がいつも通りだったはずの日常が変わった瞬間やった。

「そや、救急車呼ばな！・・・・・・もしもし！」

道端で倒れてる男の子を見つけたその瞬間が。

「怪我はそんなに深くないけど、ずいぶん衰弱してるしてるみたいねぇ。」

動物病院。
先程の少女3人がフェレットを運び込んだのだ。

「きっと、ずっと一人ぼっちだったんじゃないかな？」
「院長先生ありがとうございます！」
「「ありがとうございます！！」」
「いいえ、どういたしまして。」

ツインテールの少女に続き、後の少女達も元気にお礼を述べた。

「それにしても、本当にフェレットなのかな？」

「え？」

突然、院長先生がそういった。

「確かに変わった動物だけど・・・。それに、この首についてるのは宝石・・・なのかな？」

院長先生が、その生き物の首にぶら下がっていた赤い宝石を触ろうとしたその時。

「起きた！」

触られるのを拒むかのように、フェレットが起き上った。
そして一通り周りを見渡した後。

「なのは、みられてるよ！」
「えっ？え、えっと・・・。」

フェレットがじっと見つめていたのは、ツインテールの少女――高町なのはだった。

「・・・。」

最初にオレが見たのは、白い天井だった。

「ここは・・・。」
「あっ、気がついたんやね!よかったわ~。」
起き上って横を見ると、リンゴをむいている車いすの見たことのない少女がいた。
「・・・?」
「あ、急にごめんな。ついうれしくて・・・。わたしははやて、八神はやて言います。よろしゅうな。」
茶髪にボブカットに左の前髪をピン3つでとめた関西弁の少女はそう名乗った。
「オレは、沢田綱吉・・・。」
「綱吉君やな。どないしたん?道路の真ん中に倒れとったからびっくりしたんやで。」
道路の真ん中?
森で、ミュウツーと名乗った生物と戦っていたはずだ。
「・・・ここはどこだ。」
「えっ?ここは海鳴市の鳴子大学病院やけど・・・。」
海鳴市?並盛町じゃないのか・・・?
「並盛町というところをしらないか?」
「ナミモリチョウ?・・・さあ、聞いたことないなぁ・・・。もしかして綱吉君、そこから来たん?」
(コクリ)

まさか・・・。

「それにしても綱吉君の眼、きれいなオレンジ色しとるなぁ。まるで夕焼けの大空みたいやわ。」

「・・・え?」

オレンジ色の・・・眼?

!!まさか・・・?

いや、頭に炎も灯ってないしハイパーモードではないはずだ。

じゃあ、どういうことなんだ?

「あ、そうそう。綱吉君を見つけた時、こんなんが近くに落ちとったんや。キミのやおもて拾たんやけど・・・」

はやてがポケットから出したのは見覚えのない、チャームのついたネックレスと平たい板のようなもの。

それと、大空のボンゴレリング。

「こっちの綺麗な指輪は綱吉君のポケットに入っとって、検査の時に邪魔になるからいうてお医者様から預かったもん。拾ったんは、こっちのネックレスとケースや。ケースの方はなんか入っとったみたいでくぼみがあったんやで。まあ、実際指輪が入っとったんやけどな。」

はやては、平たい板のようなケースを開けて中を見せてくれた。

「!!」

くぼみの数は21個・・・入っているこの7つの指輪は間違いなく炎真達のシモンリング!

「あ！・・・ごめんな、勝手に中身見てしもて・・・。気分悪ぅした・・・？」
「いや、大丈夫だ。・・・ありがとう、はやて。」
「！！い、いや、ええんよ！うん、ええのよ！！」
「？」

急に下を向いてしまった。
・・・そんなに悪いことだと思ったのか？

ガラガラ――

「失礼します。はやてちゃん、彼気がついた・・・みたいね。」

突然入ってきたのは若そうな医者。

「あ、先生！彼、沢田綱吉君いうんです。並盛町言うとこから来たみたいなんですけど、先生何か知ってますか？」
「ナミモリ？・・・さあ・・・。先生も聞いたことないわね・・・。」

並盛町を誰も知らない・・・。
だとしたら、ここはオレがいた世界とは別の世界なのか？

「先生。彼、うちで預かってもええですか？」
「えっ？」

はやては突拍子もない事を言い始めた。
見ず知らずのオレを預かる?正気なのか。

「並盛町いうところを誰も知らんってことは、綱吉君行くところないゆうことです。」
「でもねはやてちゃん・・・。」
「綱吉君を見つけて病院に連絡したのは私なんです!だから、最初に綱吉君と関わった私が最後まで責任を持たなあかん、そう思うんです。人を助けるって、そう言うことやないんですか?」
「はやて・・・。」

何処までもまっすぐな、きれいな心。
足を患ってなお、真っ直ぐに育ったのか・・・。

「先生、お願いします!」
「・・・わかりました。今回は特別よ、はやてちゃん。」

瞬間、はやての顔が今まで以上に明るく輝いた。

「先生ありがとうございます!!綱吉君、今日から私の家族やで!よろしゅうな!」
「ああ。ありがとう・・・はやて。」
「!ええんよええんよ!大歓迎やで!!」

優しく強い、車いすの少女――八神はやて。

これが、彼女との出会いだった。

そしてオレは、まだ気づいていなかった。

――あのチャーム付きのネックレスがなにか。

第2話：回り始める歯車なの？（後書き）

山本「よっ！これから後書きを担当するオレ、山本武と。」

ヴィータ「ヴィータだ！よろしくな。」

山本「そのまえにさ、ここのコーナー名どうすっか？」

ヴィータ「うーん・・・・・次回までの宿題にするんならあたしが考えてやってもいいぞ！」

山本「そっか！じゃあ、まかせるぜ！」

ヴィータ「よっしゃ、まかせろ！」

山本「あ、そうだそうだ♪質問があったら遠慮なくオレ達に聞いてくれな♪」

ヴィータ「まってるぜ！」

山本「じゃあ次回もよろしくな！」

第3話：真夜中の序章なの！（前書き）

どんなの（SM診断のこと）をしても診断結果が『S・ドS』とでるんですがこれなんてイジメ？

蜜柑です。

相変わらずgdgdです。

第3話：真夜中の序章なの！

「ハッ・・・ハッ・・・」

すっかり日も落ちた静かな夜。
そんな中、“槙原動物病院”と書かれた建物の前にこんな時間には似つかわしくない、少女の姿があった。
急いで走ってきたのか、少し呼吸が乱れている。

「！っ・・・また、この音・・・！」

木々がざわざわとゆれ出したかと思うと、彼女が部屋で聞いた音と同じ音が聞こえてきた。
頭に直接流れるような不可解なその音に耐えきれず、耳を塞いでぎゅっと目をつむった。
・・・少女だけに聞こえる謎の音。
その音と声に導かれるように、彼女はここに来たのだ。

「はっ・・・。」
「・・・グオォォ・・・・・・」
「・・・！？」

音がやんで目を開けると、どこからともなく唸り声のようなものが聞こえてきた。
しかも、なんだか全体的におかしい。
なにかバリアの中にいるような・・・そんな感じ・・・

「!?あっ、あれは!」

数分前。

「!」

病院内で、寝ていたフェレットが素早く起きあがった。

「グアアァァァ!!」

そして、何処からともなく襲ってきた真っ黒い、生き物と呼べるのかよく分からないものを避けた。
フェレットは素早くあたりを見回し・・・。

「・・・。」

開いていた窓から外に脱出した。

「あれは!」

今走っていたのは、夕方のフェレット!?
どういうことなの?

「！！あっ！」

目の前に突如現れたのは、真っ黒いカタマリ。
それはフェレットを追いかけていた。そして、その子がいた木に真っ直ぐ衝突した。
すごい量の砂煙が目の前で巻きあがる。
そしてその子は、木にすごい勢いでぶつかったそれをかわしてこっちに向かってジャンプしてきた。

「わあっ！？」

気がつくと私は手を伸ばしていて・・・尻もちをついてしまった私の腕の中にはフェレットがいた。

「なになに！？一体何！？」

それは、その後の私――高町なのはの人生を３６０度変えることになる出来事の始まりでした。

数時間前、海鳴大学病院。

「今日はおとなしく入院やって。明日のお昼に迎えに来るな。」

「ああ。」
「じゃあまた明日！」

検査したいからと、明日の昼までは入院しなければならなくなった。
だが今はそんなこと、どうでもいい。

「・・・。」

オレのベッドで寝ているこの青い生き物はなんだ。

「おい。」
「・・・。」

起きる気ゼロか。
よだれまで垂れてるぞ。

「・・・今すぐ起きないと燃やすぞ。」
「（バッ）始めましてだな。私の名はスイクンという。ミュウツー様が興味をもった人間であるお前の案内役として来た。」
「・・・。」

かっこよく自己紹介したつもりかもしれないが、すでに色々と手遅れだ。
・・・口の端から垂れたままのよだれとか。
しかも、いつの間に巨大化した。

「まずは口元を拭け。・・・で、なんなんだ貴様は。」

オレは青い喋る犬というものを見たことがないんだが。
その前に犬なのか、コイツは？（※全く違います）

「私たちの住む世界に辿り着く為に、お前にはそれなりに力をつけてもらう。」

つまりこういう事だった。

まずオレがハイパーモード時のから戻れないのは、ミュウツーのかけた術式のせいである。そしてそれを解くにはミュウツー本人に解いてもらうしかない。
そのためにはミュウツー本人の住む世界にたどり着かなくてはならず、辿り着くにはミュウツーがあらゆる次元世界にばらまいたリングとその守護者の魂が必要になる。
そしてその間オレのいた世界の時は止まったままなのだという・・・なんとも便利なことだ。
また、無闇に死ぬ気の炎を使ってはいけないと忠告された。
ちなみにオレがリング等を集めてその世界にたどり着かなくては、スイクンも戻れないらしい。

「魂・・・！？」
「別にヤツラを殺したわけではない、本体はお前の元いた世界で眠っている。・・・安心しろ、眠っている本体への手出しは一切していない。」
よかった・・・。
「・・・つまり魂を見つけ出せばみんなが目を醒ますんだな？」
「うむ。魂無き肉体は死んだも同然・・・と言うが、だからと言って焦っても見つからないぞ。焦らずとも、お前の世界の時は止まったままなのだということを忘れるな。私はお前に全面協力する。そうしないと私も帰れないからな。」
気長にやることが大事らしい。
「それと、くれぐれも死ぬ気の炎だけは気をつけろ。」
「・・・わかった。」
郷にいては郷に従えということか。
「それと、これはわたしからだ。この世界で、いつか何かの役にたつかもしれぬ。」
「？・・・ありがとう。」
渡されたのはオレンジのキレイな石がついた指輪と、銃を模したデザインのチャームのついたネックレス。
「それと・・・ああ、このケースは未完成のまま届いていたのか。」
「未完成・・・？」

スイクンが言ったのは、はやてが拾ってくれていたらしい薄い銀色のケースのことだ。シモンリングだけが入っていたあのケースと言えば分かりやすいか。

「・・・。」
「！！」

スイクンが手（というか前足）をかざすと、ケースが輝き始めた。

「・・・これで完成だ。本を開く要領で開けてみろ。」
「えっ・・・。」

見た目あまり変わっていないケースを言われた通りの開け方で開くと。

「！これは・・・。」

左右とも真っ黒な画面（？）に変わっており、そのうちの右側に『Ｓｉｍｏｎ＊Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』と書かれていた。

「リング等を見つけた場合、このケースを開いて近づければ回収できる。回収状況は右画面で確認できるぞ。」

画面なのか、これは・・・。

「そうだ・・・言い忘れていたが、リング等もこのケースも他の時空から持ち込まれた力を宿した道具で、この世界の一部の者たちからロスト・ロギアと呼ばれている。」
「ロスト・ロギア？」

聞き慣れない単語だ。

「うむ。ロスト・ロギアは、この世界に存在する『時空管理局』が名付けた。もしヤツラにこれが見つかれば、他のロスト・ロギア同様に没収され封印にかけられてしまう。」

「！」

「そして、それを持っていたお前も重罪人としてつかまり・・・悪ければお前のいうみんなを助けられなくなるだろう。」

・・・ようは時空管理局とやらにケースと大空のリングを捕られなければいいんだな。

「そういうことだ。さて、最後になったが・・・この二枚貝のチャームの話をしよう。」

「？これがどうかしたのか？」

オレにはただのネックレスに見えるが・・・

「完結に言おう。それはこの世界の武器兼パートナー・・・即ちお前のデバイスだ。」

第3話：真夜中の序章なの！（後書き）

山本「ヴィータ、コーナー名思いついたか？」

ヴィータ「おう！『山本＆ヴィータのキャラクター図鑑☆』でどうだ？（ー＋ー）」

山本「おっ、いいなそれ♪じゃっ、次回からこれでいくのな。」

ヴィータ「次回からよろしくな。」

第４話：それは不思議な力なの？（前書き）

こんばんわ！あ、こんにちはでしたでしょうか？
蜜柑です。

後書きでちょっとだけ説明（？）を入れております。
気が向いたらどうぞ（笑）

第4話：それは不思議な力なの？

「来て、くれたの？」
「・・・。」
え？
「しゃ、しゃべったぁ！！」
フェレットが喋ったぁぁ！？
え、ええと・・・とりあえずこの子は無事みたい。よかった。

「え、えーっと、何がなんだかよく分かんないけど・・・なんなの！？なにがおきてるの？」
とりあえず、わたしは病院から離れて逃げた。
もちろん、フェレットをつれて。
「キミには、資質がある。お願い、ボクに少しだけ力を貸して！」
「資質ぅ！？」
喋るフェレットが突然そう言った。
「ボクは、ある探し物のためにここではない世界から来ました。でも、ボク一人の力では思いを遂げられないかもしれない・・・だか

ら・・・迷惑だと分かってはいるんですが・・・資質を持った人に協力してほしくて・・・。」

突然地面に降り立ったその子は礼儀正しく座った。
どうやらこの子、根は真面目みたい。

「お礼はします！必ずします！ボクの持っている力を、あなたに使ってほしいんです。ボクの力を・・・魔法の力を！！」
「・・・まほー？」

何言ってるんだろう。
魔法って。

「ぐあおぉぉ！！」
「！きゃっ！」

その時、背後からさっきの黒い塊が襲ってきた。
私はこの子を抱えて急いで電柱の陰に隠れたけど、そう長くは持たないかも・・・。

「お礼は必ずしますから！」
「お、お礼とか、そんな場合じゃないでしょ！？」

勢いよく道路に突っ込んだらしく、黒い塊はめり込んだ状態でバタバタしている。

「どうすればいいのよぉ！」

わたしじゃどうしようもないじゃない！

「・・・でばいす？」

電子機器と言う意味ではなかったか？

・・・そうは見えないんだが。

「この世界――厳密に言うと違うんだが――の武器の総称だ。簡単に言えば魔法が使える。まあ、そのままでも使えないことはないが。」

どこのアニメのまわし者だ、お前は。

魔法って・・・。

「ぶっちゃけると、さっきの保存ケースとその管理をしているのも一種のデバイスだ。」

「は？」

気がつくと、ケースの上に何かが乗っかっている。

「がる♪」

「ナッツ！？」

え、アニマルリングはないのに何でこんなところに・・・。

「このケースを制御する為のユニゾンデバイスとして、新たに超高度な演算機能を組み込ませてもらった。お前の世界でそんじょそこ

らの人間達が作ったスパコンより何倍も有能だぞ。」
「がる！」

そんじょそこらの人間にスパコン作れないだろ。
しかもユニゾンデバイスってなんだ。

「ユニゾンデバイス？」
「うむ。デバイスにもいくつか種類がある。」

このあと長々と説明されたが簡単にまとめると、つまりはこういう事だった。

『インテリジェントデバイス』
人工知能を有した上級者向けのデバイス

『ストレージデバイス』
人工知能を有していない初心者向けの量産型デバイス

『ユニゾンデバイス』
融合することで真の力を発揮する数少ない自立型のデバイス

『アームドデバイス』
道具そのものを模したデザインで造られたベルカ式のデバイス

『ブーストデバイス』
魔力射出・射出魔力制御の補助という特性を持つデバイス。

・・・大体こんな感じの説明だった。・・・・・・たぶん。

「このケースもインテリジェントデバイスだ。ただし、まだ起動していない。」
「起動してない？だが、すでに動いて・・・」
表示も出ていたぞ？
「いや、それは単にそういう道具なのだ。デバイスは起動していない。」
そういうものなのか。
「まずはこの２つのデバイスを起動してもらう。起動コードは彼らの名前だ。あ、ナッツじゃなくデバイスとしての名前だ。起動してみるがいい。」
名前なんて知るか。
どうやったら分かるんだ？
「目を瞑って、心で聴くんだ。」
心で・・・？
「・・・・・・・・オーロ、ボルサ・ヴィオーラ・・・セットアップ。」
「「Ｓｔｉａ　ｉｎ　ｐｉｅｄｉ　ｄａ，　ｐｒｏｎｔｏ．　Ｍｅｔｔａ　ｓｕ！「＝Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，ｒｅａｄｙ．　Ｓｅｔｕｐ！」」」
目を開けると、７つのシモンリングと大空のボンゴレリング・・・

そして、スイクンに渡された指輪とチャームが光の塊となって、ケース――ヴィオーラの上に浮いている。

「Ｉｏ　ｌｏ　ｒａｃｃｏｌｇｏ．［回収します。］」

「！」

そして、シモンリングとボンゴレリングは吸い込まれるようにしてヴィオーラに回収された。

「Ｉｏ　ｉｍｍａｇａｚｚｉｎｏ　ｑｕｅｓｔｉ　ｄｕｅ．？　ｔｕｔｔｏ　ｒａｄｄｒｉｚｚｉ？［この二つは保存します。よろしいですか？］」

「えっ・・・あ、ああ。」

「Ｃｏｒｒｅｔｔｏ．Ｐｏｉ　ｓｐｉｅｇａ　ｅｄ　ｉｍｍａｇａｚｚｉｎａ　ｕｎａ　ｆｕｎｚｉｏｎｅ　ｄｉ　ｃｏｎｓｅｒｖａｚｉｏｎｅ．［ＯＫ。では、保存機能を展開し保存します。］」

よく分からないが、指輪とチャームは保存されたらしい。

というか、一つ聞く。

何故イタリア語？

これ、オレは読めても読者が読めてないぞ・・・おそらく。

「普通は英語を話すが、変わったデバイスだな。」

お前が言うか？

「まあ、これでオーロの演算機能を使ってしっかりと回収できたな。ちなみに起動できるのはお前だけのはずだから注意しろ。」

「・・・わかった。」

オレは結構初期の段階から訳が分からないんだが。
お前が寝てたあたりからすでに。

「で、話を戻すが・・・これについてだ。」

スイクンのいうこれとは、先ほどの二枚貝の石だ。

「？回収しなかったのか、ヴィオーラ？」

「Il padrone che non vive. Dal momento che non giudizio, io giudicai, che era necessario per il padrone presente.［すみません、主人（マスター）。私の判断で、今の主人（マスター）にはそれが必要だと判断しました。］」

「がる♪」

必要？

「お前より優秀なデバイスだな。よく分かっている。」

「馬鹿で悪かったな。」

生まれつき（？）だから治らないな、こればっかりは。

「Per favore non fatecia un sciocco del padrone.［主人（マスター）を馬鹿にしないでください。］」

「がるるる・・・」

「私に牙をむけるとは命知らずだな。」

ケンカはよそでやってくれ。

と言うか俺はもう寝たいんだ。
今１０時２０分だぞ。病院の消灯時間のはずだろ。

「・・・？」

まて・・・消灯時間は１０時じゃなかったか。
どうして誰も電気を消しに来ないんだ？

「・・・おかしくないか。」
「うむ。生物の気配がしなくなっているな・・・。」

外でなにかあったのか？

「お前のデバイスの件は明日にしよう。嫌な予感がする。」

オレもだ。
むしろ嫌な予感しかしないんだが。

「？ ｃｈｅ Ｌｅｉ ｌｏ ｓａｌｖａ ｉｌ ｐａｄｒｏｎｅ？［それも保存しますか、主人（マスター）？］」
「・・・そうしてくれ、ナッツにヴィオーラ。」
「Ｒｏｇｅｒ．［了解。］」
「がるっ！」

ナッツは、保存中のヴィオーラに姿を消した。

そして、オレとスイクンは、勘を頼りに病院を飛び出した。

相変わらず、それはうねうねとうごめいている。
・・・こんなの、私にどうしろって言うのよぉ！！

「これを！」
「！？・・・あたたかい？」

その子に渡されたのは、赤く輝く丸い小さな石だった。
えっと、親指の爪くらいの大きさかな？
あ、さすがにそれよりはおっきいか。

「それを手に、目を閉じて心を澄ませて！そして、ボクの言ったことを繰り返して。」

とりあえず他にできる事もなさそうだから、言う通りしてみよう。
石をギュッと握って・・・と。

「いい？いくよ！」
「・・・うん。」

ちょっと怖いけど、目をつむって。

「！なんだこれは？」

病院から数十メートル進んだ所で、オレはそれを簡単に見つけられた。

明らかに怪しい真っ黒い塊が、誰もいないはずの公園でうねうねとうごめいていたからだ。

「ふむ・・・魂までの手掛かりかもしれんな。」

「手掛かり？」

と、そのときだった。

「！？」

「・・・ひげが光ってる。」

スイクンのひげ（？）が空色に輝き始めた。

「私のひげが光っているのではないな。なにかがついているようだ。」

よく見ると、星型で空色の石が輝いていた。

どこかで引っ掛けてきたらしい。

「おそらくどこかの時空を通る時に引っ掛かったのだろう。」

「・・・。」

なぜこれは急に光りはじめた。

何かと連動しているのか？

だとしたら一体なんだ。

「・・・・・・。」

「？どうした？」

その石をギュッと握ると、頭の中に何かが流れてきた。

「・・・我・・・指名を受けし者なり・・・契約の元・・・その力を解き放て・・・・」

「！！まさか、デバイス！？」

「我、使命を受けし者なり。」

「我・・・使命を受けし者なり・・・・」

落ち着いて、この子の言ったことを復唱。

「契約の元、その力を解き放て。」

「えと・・・契約の元・・・その力を解き放て・・・・」

「風は空に、星は天に。」

「「風は空に・・・星は天に・・・・」」

「そして、不屈の心は」
「「そして、不屈の心は・・・」」

「「「この胸に！」」」

「「「この手に魔法を！」」」

「「レイジングハート！」」
「ローザ！」

「「「セットアップ！！」」」

「「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，ｒｅａｄｙ．　Ｓｅｔ　ｕｐ！」」

柔らかな桃色と空色の光が、それぞれ別の場所にいる少年少女を包み込んだ。

第４話：それは不思議な力なの？（後書き）

山本「おっす！オレとヴィータのキャラ図鑑☆始まるぜ！」

ヴィータ「今回はちょっとしたデバイス紹介だ。そのうち本格的に説明してやるぜ！」

【ローザ】
部品のミスか何かで不良品扱いされ捨てられてしまったストレージデバイス。なのはのデバイス・レイジングハートと起動の際の詠唱が全く同じである。何か関係があるらしい。

山本「ははっ、伏線なのな♪」

ヴィータ「分かりやすい伏線だぜ。じゃあ、質問コーナー行くぜっ！」

山本「『紅葉ｏｒ紅蓮』さんとこのツナからだぜ。サンキューな！『山本とナントカって子のコーナー名がどうなったらそうなったのかとてつもなく知りたいんだけど』。って、コーナー名考えたのヴィータだからヴィータが答えた方がいいのな。」

ヴィータ「え～と・・・後書きが始まる１０分前に即興で、その場のノリで決めた！文句あるかよ！？」

山本「急いで考えた割にはおもしれータイトルだよな！」

ヴィーダ「そ、そうか？」

山本「おう♪んじゃ、今回はここまで！」

ヴィータ「次回も楽しみにしとけよな！」

※ツッコミはいません

第5話：唱えるは魔法の呪文なの？（前書き）

ツナの呪文考えるのに3日ぐらいかけてました・・・。
蜜柑です。

結局、どっかの宝石の名前をイタリア語にしてまるまる持ってきただけです。
ひねりもくそもありません。ストレートです。

でわ、よろしければどうぞ♪

第5話：唱えるは魔法の呪文なの？

「ローザ」
「レイジングハート」

「「セットアップ！！」」

「「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ！！」」

２人を、それぞれ空色と桃色の光が包み込んだ。

「えっ、ほえぇ！？」
「なんて魔力だ・・・」

石がピンクに光り始めた！？
もう、一体どうなってるの！

「落ち着いてイメージして！キミの魔法を制御する魔法の杖の姿、
そしてキミの身を守る強い衣服の姿を！」

そんな、急に言われても！

「えっと、えっと・・・・・・とりあえずこれで！」

レイジングハートが一際輝き始めた。

「なっ・・・」

気がつくと服が、クリーム色のブレザーと黒色のズボン――というか、つまりは並中の制服を模した服装に変わっていて手には蒼い杖？のようなものが握られていた。

「バリアジャケットとデバイスだ。蒼い星形の石はデバイスだったのだな。」

のんきに考察してる場合か。

あの化け物がいつこっちに気づくか分からな――

「がぐぁぁぁ・・・」

「・・・。」

・・・あの黒いヤツ、今こっちに気づいた。確実に。

「とりあえずアイツを・・・。」

「まあまて。」

この期に及んでなんだ。

明らかに向こうは殺す気満々だぞ。
トロトロしてたらこっちがやられる！

「試しにアイツを封印してみろ。」

・・・は。

「もしかしたら、なにかの力によってあんな姿にされた生き物かもしれない。」

その根拠はどこからくるんだ。
しかもこのデバイスってどうやって使うんだ。

「！！」
「がぁぁぁっ！！」

ドガアンッ！！

「！」

こいつ滅茶苦茶速い！
長い四本の足がそれを可能にしてるのか。
ということは、スイクンの仮説が正しければ間違いなくこいつは狼辺りの生き物だな。

「ともかく、そのデバイスに聞いてみろ！」

さっきから、何で命令口調だ。

何様だコノヤロウ。

「・・・わかった。ローザ！」

「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，Ｍａｓｔｅｒ．」

避け続けるのにも限界がある。

どうすればいい？

「・・・成功だ！」

「ふえ、え、えーっ！？ウソ！」

私が想像したのとまったく同じ服と杖。

えーっと、なにがなにやら。

「な、何なのコレ・・・？」

しかしそんなことを考えている時間はなかった。

「！！」

瞬間、黒いのが再び襲いかかってきた。

触手の様なものが、周りでうねうねと動いていて気味が悪い。

（えーっ！？）

「これなに！？」

「封印！？」

「ガガア〝・・・」

今はなんとか防御魔法を張り攻撃をしのいでいる。

「S？．Ｐｅｒ　ｌａ　ｍａｇｉａ　ｆｏｒｔｅ，　ｕｎ　ｉｎｃａｎｔｅｓｉｍｏ　？　ｎｅｃｅｓｓａｒｉｏ．［はい。強力な魔法のため、呪文が必要ですが。］」

「自分の心に浮かぶはずだ。」

呪文？

『テ●マ●●ヤ●ン、●ク●クマ●コ●』的なあれか？（※たとえが古すぎます）

「ギャオ〝ァ〝！！」

「！（しまった！）」

こっちの隙をついて、相手がこっちに突っ込んでくる。

これはまずい。

「くっ・・・」

そのとき、突然黒い塊が横に飛ばされた。

（オーロラビーム！）

「ギャア〝・・・グァ〝ッ！」

スイクンがやったのか！？

意外と強いんだな。

「私があやつの足止めをしておく！今のうちに呪文を！」

「たのんだ。」

コイツを封印するために必要な呪文・・・それは・・・

同時刻、なのはサイド。

なのはは、喋るフェレットを抱えて必死に走っていた。

というのも、一度はあの化け物を防御魔法ではじいてバラバラにしたのだが、再生し始めたため距離を取っていたのだ。

「ぼくらの魔法は、発動体に組み込まれたプログラム、という方式です。そして、その魔法を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです。そして、あれは忌まわしい力のもとに生み出さ

れてしまった思念体・・・。あれを停止させるにはその杖で封印して元の姿に戻さなくちゃいけないんです！」
「よく分かんないけど・・・どうすれば？」

フェレットが説明してくれている間も、化け物は徐々に再生していく。
なのはは、走った先にあった十字路でとりあえず歩を休める。

「さっきみたいに、攻撃や防御などの基本魔法は心に願うだけで発動しますが・・・より大きな力を必要とする魔法には呪文が必要なんです。」
「呪文？」

このときなのはが心の中で、
（呪文って、あの『ピ～●●ピリラ●ポ●リナ●～ペ●ト～♪』みたいな感じなの？何のアニメだったかな、これ。）
・・・などと考えたことは秘密である。
それにしてもツナとなのは、二人揃って呪文のたとえが古すぎである。
もっと他にいいのはなかったのかお前ら。

・・・まあ、それは置いておくとして。

「心を澄ませて。心の中に、あなたの呪文が浮かぶはずです。」

フェレットの言うことに従い、なのはは目をつぶって静かに集中した。
沈黙があたりを支配する。

「・・・。」

しかし、それを黙って見ているほど化け物も甘くはなかった。

「ぐわあぁぁ・・・！」

動かないなのはめがけて、完全に再生した黒い塊が突進してくる。
そしてあと少しと言う所で飛びあがり、触手の様なものを４本伸ばして攻撃してきた。

「！」

当たる直前という所でなのははカッと目を開き、レイジングハートを相手に向けてかまえた。

「Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．」

レイジングハートの先に防御魔法が展開され、それに触れた触手が跡形もなく消滅する。
（いまだ！）と感じたなのはは、素早く呪文を唱えた。

「リリカル、マジカル！」
「封印すべきは忌まわしき器・・・ジュエルシード！」

なのははレイジングハートを真上に振りあげ、高らかに叫んだ。

「ジュエルシード、封印！！」

「Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ．Ｓｅｔ　ｕｐ．」

瞬間レイジングハートは羽のような形の光を、吹き出すようにして纏った。
同時に、いくつもの光の帯が化け物向けて伸ばされる。
光の帯が化け物をがっちり固定すると、化け物の額に“？？？”と浮かび上がった。
これはローマ数字で、アラビア数字で言う所の“２１”である。

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ.」

そして、別々の場所にいる少年少女の声が再び重なった。

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル２１・・・」
「アクアマリーノ、ジュエルシードシリアル１４・・・」

「「封印!!」」

「「Ｓｅａｌｉｎｇ.」」

第5話：唱えるは魔法の呪文なの？（後書き）

ヴィータ「んじゃ、キャラ図鑑☆始めるぜ！」

山本「今回は、本編で出てきたイタリア語の単語を日本語にしてみたぜ。」

――――――

ローザ・・・ピンク色

アクアマリーノ・・・アクアマリン（宝石）

ボルサ・・・鞄

ヴィオーラ・・・紫色

オーロ・・・金色

――――――

山本「こんな感じだな。」

ヴィータ「へ～え。英語に似てるやつもあるんだな。」

山本「アクアマリンとかほとんどそのまんまだよな！」

ヴィータ「そのままではないと思う・・・」

山本「まーまー、いーじゃねーか。今回はこのへんで！じゃーな！」

ヴィータ「いいのか・・・？」

第6話：それは不思議な出会いなの？（前書き）

私に純粋なキャラは書けません、はい。
蜜柑です。

やっと序章が終わりました！
な、なげぇ・・・。

第6話：それは不思議な出会いなの？

「・・・あっ。」

封印した生き物のいた場所に、何か光るものが見えた。

「これがジュエルシードです。レイジングハートで触れて。」

言われた通りにすると、ジュエルシードがレイジングハートの石の部分に吸い込まれていった。

「Ｒｅｃｅｉｐｔ　ｎｕｍｂｅｒ　？？？．」

同時に杖が消え、服装ももとの黄色のセーターとオレンジのミニスカートに戻った。
レイジングハートも小さい石に戻ってなのはの手の中にすっぽり収まっている。

「あ、あれ？終わったの・・・？」
「はい、あなたのおかげで。ありがとう・・・。」

言うと、フェレットはその場に倒れこんでしまった。
どうやら、傷がまだ完治していなかったようだ。

「！ちょっと、大丈夫！？ねえ！」

すると、どこか遠くからパトカーのサイレンらしき音が聞こえてきた。
改めてなのはが辺りを見回してみると、道路はアスファルトが粉々

で周りの電柱がボロボロになっており・・・

「も、もしかしたら・・・私、ここにいると大変あれなのでは・・・」

もしかしなくてもアレである。

「えっと、とりあえず・・・」

なのはは素早くフェレットを抱えあげ。

「ごめんなさ～い！」

全速力で走り、その場から姿を消した。

「・・・終わったか。」

「うむ。」

その場に残された光るもの・・・どうやらこれがジュエルシードと呼ばれるもののようだ。

それにしても、なぜローザはこれを知っていたんだろう。

服装も知らない間にもとに戻っている。

「帰るか。」
「うむ・・・・・・んっ？」

突然スイクンが小型犬ぐらいの大きさになり、物陰に身を潜めた。

「スイクン・・・？」
「静かにしろ。早くヴィオーラでそれを回収してこっちに来い！」

だから何でそんなに偉そうなんだ、お前は。
・・・回収はするが。

「ヴィオーラ・・ジュエルシードシリアル??、回収。」
「Ｉｏ　ｌｏ　ｃａｐｉｉ．［わかりました。］」

回収後急いでスイクンの横にしゃがむと、そこにはひとりの小学生くらいの少女がいた。
・・・。

「・・・・・お前そんな趣味があったんだな。」

思いっきり冷ややかな目で見てやった。
どこぞのナッポーか、お前は。

「いいから見ていろ。」
「・・・・。」

このまま言い合いしていても仕方ないので、とりあえず観察に付き合うことにした。
言っておくが、オレにそんな趣味はない。

断じて、ない。

「はぁ、はぁ・・・・・ふぅ。」

全力疾走で公園まで逃げてきた。
これならお巡りさん達も気づかないよね・・・。

「すみません。」

あ、起しちゃったかな?

「ごめんね、乱暴で・・・。ケガ、痛くない?」
「ケガは平気です。もうほとんど治っているから。」

ほんとだー。ケガの跡がほとんど消えてる。
すごい・・・。

「助けてくれたおかげです。おかげで残った魔力を治療にまわせました。」

よく分かんないけど・・・そうなんだ。
あ、そうだ。

「ねえ、自己紹介していい?」
「あ、うん。」

これはきちんとしておかなくっちゃ。
この子の事も知りたいし・・・。

「こほん・・・私、高町なのは。小学3年生！家族とか仲良しの友達は、なのは、って呼ぶよ。」
「ボクはユーノ・スクライア。スクライアは家族名だから・・・ユーノが名前です。」

ユーノ君か。
ふふっ。

「可愛い名前だね！」

すると突然、ユーノ君が頭を下げて申し訳なさそうに言った。

「すみません・・・あなたを・・・」
「なのはだよ。」

せっかく自己紹介したんだから、名前で呼んで貰わなくちゃ。
自己紹介の意味、ないでしょ？

「なのはさんを巻き込んでしまいました・・・」
「あ、そんな・・・」

そんなこと思ってないのに・・・。
・・・・・そうだ、こんな時こそ笑顔じゃなきゃ！

「えっと、多分・・・私平気！あ、そうだ。ユーノ君ケガしてるんだし、ここじゃ落ち着かないよね。とりあえず私の家に行きましょ

！」

後のことはそれから！ねっ、ユーノ君。

スパーン！！

「ん？」

「どうかしましたか？なのはさん。」

今の何の音？

なんか、モノをたたくような音がしたんだけど・・・？

「・・・。」

「ふむ、なかなか興味深いな。」

・・・・・・・・。

「幼女とフェレットか・・・うむ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・。

「少し話を伺おうではないか！」

待てコラ。

「なんだ、何故とm」

スパーン！！

「・・・。」

「いっ・・・！い、いきなりハリセンで思いっきりぶったたく奴があるか！！」

叩くだろ。ツッコミとして。

「目の前に怪しげなフェレットと幼女が話しているのだぞ？しかも、確実に意味ありげな話だった。お前も聞いていただろう？」

「それはわかってる。何か意味深な話をしてたのも聞いてた。だが・・・」

それだけは訂正してもらう。

というか訂正してくれないとオレが困る。

「“幼女”と言う言い方だけはやめろ。それだけで一緒にいるオレまで変態扱いされる。」

「なにっ！？なら幼子だ！！」

お前のキャラがどこに向かっているのか、オレには全く分からない。

「・・・それもアウトだ。」

もう一度ハリセンを振り下ろすと、今回はスパコーンという軽快な音がした。

「・・・まったk」

「あの～・・・なにしてるんですか？」

「・・・。」

横を見ると、先程までスイクンが観察していた少女が目の前にいた。いつの間に。

「お前たち、ジュエルシードという言葉を聞いたことがあるか？」

復活が早い、早すぎるだろ。しかも単刀直入だな、オイ。
それにしても何でたんこぶ一つないんだ。
あれだけハリセンで思いっきりしばいたのに・・・。

「え！？犬が・・・喋った・・・」

「あなた達は何者なんですか！？まさか・・・時空管理局！？」

全く違う。

「いや、我々はただの旅人だ。」
「・・・。」

あながち嘘でもない・・・が・・・
正しくもない、といったところか。

「どうして旅人さんがジュエルシードのことを知ってるんですか？」
「一体何者なんですか！？」

どうするんだ、スイクン・・・。
オレは知らないからな。

「ふむ・・・。今はもう夜遅いからな。まあ、心配しなくとも我々はしばらくこの世界に滞在している。また明日、というのはどうだ？」
「明日は学校があるので、夕方なら。」
「では、明日の夕方にまたここで逢おうではないか。」

だから何でお前は上から物を言うんだ。
しかもオレの意見はまるっきり無視か。聞きもしないのか。

「どうする、ユーノ君？」
「・・・明日、必ずあなた達のことを教えてください。それが約束できるのなら、僕たちも来ます。」
「わかった。」
「・・・。」

――――今まさに、運命の歯車が噛みあった。

「あ。」
「？どうしたの？」

フェ・・・

「フェレットが・・・喋ってる・・・！」
「「「・・・。」」」

（（（すっごい今更！つか、鈍っ！！）））

第6話：それは不思議な出会いなの？（後書き）

山本「ん？ヴィータがいないな。やることもねーし、終わりにすっか♪」

山本「次回もよろしくなのな！」

第7話：それは私の覚悟なの！（前書き）

朝が弱いのが治りません・・・。
蜜柑です。

長くなった気がしますが、とりあえずどうぞ！

第7話：それは私の覚悟なの！

「う～っ・・・・・・・・おはよう、ユーノ君！」
「あ、うん。おはよう、なのは。」
「昨夜はお疲れ様っ！！」

こんにちは！
私、高町なのは、小学3年生。
昨日までごくごく普通の女の子でした。

海鳴病院のツナの病室。

「ところで、ひとつ聞くぞ。」
「・・・なんだ。」

わざわざ人が顔を洗っている時を見計らって質問するな。

「お前、名はなんという。」
「・・・・・・・・・は？」

今なんて言った、コイツ。

「私しか名乗っていないだろう。お前も名のｒ（スパーン！）・・・いっ～～・・・！！」

「何で最初に聞かない？なぜ今さら聞く？知らないなら知らないで最初っからそうしろ。」

何なんだこいつは。
オレに突っ込ませるためにわざとしてるのか？

「だ、だからといって・・・お、おもいっきり、ハリセン、で、なぐるなと・・・！」

ハリセンで殴るとは言わない。“しばく”というんだ。・・・もしくは叩く。

「っ～～！・・・で、名前、は？」
「・・・はぁ・・・・・・沢田綱吉。ツナでいい。」

・・・どこにいってもオレの周りはこんなやつばっかりか。

その日、私は空いている時間（主に授業中）念話を使ってユーノ君から色々な事を聞きました。
ジュエルシードのこと、ユーノ君のこと・・・。

（でも、話を聞く限りジュエルシードが散らばったのはユーノ君のせいじゃないと・・・）
（いいえ、ボクに責任があるんです。あれを掘り出してしまったの

は、ボクです。だから、ボクが全部集めて元の場所に戻さなくっちゃいけないんです。）

ユーノ君て、遺跡発掘なんて仕事にに関わってたからかな？とっても真面目だよね。

「ねえなのは、昨夜の話聞いた？」

「へ？昨夜・・・？」

昨夜と言えば、ユーノ君と・・・

あ、紹介します！

こちらの紫の髪にカチューシャをつけている子が月村すずかちゃん。

そして、さっき私に話しかけてきた金髪の子がアリサ・バニングスちゃん。

二人とも私の大切な親友なの！

「昨日行った病院で車の事故か何かあったらしくて・・・壁が壊れちゃったんだって。」

「あのフェレットが無事か、心配で・・・」

「うん・・・」

あ、えーとね・・・

「その件はそのう・・・」

まさかそのまま話すのはまずいよね・・・あはは。

～少女説明中～

「へぇ～、無事でなのはん家いるんだー！」

「でも、すごい偶然だったね。たまたま逃げてきたあの子と道でばったり会うなんて！」

「「ねぇっ！」」

「はは・・・」

ウソはついてない！ウソはついてない！

ちょっと、ちょこーっと真実をぼかしただけ！！

「あはは、はは・・・」

「「？」」

二人が不思議そうにしてるけどこれでいいんだよ、うん！

「あはは、はは、あははは・・・」

「・・・なのは？」

「大丈夫・・・？」

そのころの海鳴病院。

「それじゃ、気をつけてね。あ、そうそう、しばらくは安静にしていること！わかった？」
「はい。」

昨夜はどっかの馬鹿のせいで全然安静に出来てなかった気がする。

「はやてちゃんも！明後日の診察に遅れないようにね！」
「わかってますって！私、遅れたことや忘れたこと一回もないですやろ？」
「ふふっ、じゃあまたね。」
「先生も風邪引かんようにな。」
「はいはい。」

はやては足を悪くしていて、定期的に検診を受けている。
それも原因不明の難病・・・らしい。

「・・・。」

「じゃあ、ちょっとスーパーに寄り道して帰ろか！今日は豆腐が安いから、夕飯は湯豆腐にしよ思うんや。」
「わかった。」

スイクンは子犬ぐらいの大きさになってオレの肩に乗っている。ハッキリ言って重い。

当たり前だが、病院の中ではかくれていた。
はやてには・・・まあ、後からでいいと思う。

「あれから調べてみたんやけど・・・結局、ツナがいたっていう“並盛町”ゆう町は、日本のどこにもなかったわ・・・。」
「・・・そうか。」

やっぱりここは別世界なんだな。
それにしても同名の町ぐらいありそうだと思うんだが。

「まあ、そんなにしょんぼりせんでもいつか必ず帰れると思うで。しっかりしぃや！」
「・・・ありがとう。」

「・・・。」

上の方の髪だけを二つに括った金髪に全身黒の服をまとった少女。
彼女がいたのは、町を見下ろせる高い高いビルの一番上。

「・・・・・・・・・。」

少女の体はビルを離れ、下へ向かって真っ逆さまに落ちて行った。

「ここがマイハウスや。両親を亡くしてからはひとりで、ひとり暮らしにはちょっと広いかな～おもてたんやけど、そんなことなくて住みやすい家やで。自分の家や思て使ってくれたらええからな。あ、ツナの部屋は2階なんやけど・・・ちょっと散らかってるんは勘弁してな。」

「別にかまわない。ありがとう、はやて。」

「えーのえーの。困った時はみーんなお互いさまやで！」

あっ。そういえば、男の子って何がすきなんやろ？
さすがに部屋が殺伐としとんも考えものやしなぁ・・・・・・はて。

「なあツナ、部屋にほしいもんとかある？あったら遠慮なくゆってくれたら探しとくけど・・・」

「・・・いや、とくには。」

「そっか。なんかあったらゆうてや。」

今度クッションでも見にホームセンター行ってみよか。
なんかええのがあるかも。

「ほんだら、私今からお夕飯の準備とかするわ。ツナは町の散策でもしてき。ちょっとでもここのこと知っときたいやろ？私のことは気にせんでええから。」

「・・・わかった。6時までには帰ってくる。」

「よっしゃ、今日はちょっと豪華な夕食にするから期待しとき！」

ガチャ、バタン。

今は3時やな。
ということは・・・4時から作り始めれば十分間にあうな。

「・・・その前に、もっかいツナの部屋掃除しとこ。」

「えええ!あんな長いの覚えてないよぉ!」

学校が終わって、約束の公園に向かっていた矢先。
突然、ジュエルシードの一つが神社で発動してしまったみたいで。
で、来たのはいいんだけど・・・レイジングハートの起動パスワードを忘れちゃって・・・。
しかも目の前には、こっちに向かってくる犬みたいな姿の化け物がいるわけで・・・

「グアァァァッ!!!」

まあ、つまりは。

「もっかい言うから繰り返して!」
「う、うん!」
「ギャア゛ァァッ!!」

高町なのは8歳、絶賛絶体絶命中。

「きゃあっ！」

よけきれないっ・・・！

「ぐあぉぉおっ！！」

！？

い、今のなに！？

「ギャアァァッ！？」

「よく分かりませんが、相手がひるみました（相手の足元が凍っている・・・？）。今です、なのは！」

「う、うん！レイジングハートっ！」

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ！」

あれ？

・・・えっと、パスワードなくても起動したんですが。

ユーノ君・・・？

「！パスワードなしでレイジングハートを起動させた・・・！？あ

っ、なのは！防護服を！」
「えっ！？はっ、はい！！」

とっ、とにかく！
今はそれどころじゃないよね。
目の前の子を封印しなきゃだよね！

「Ｂａｒｒｉｅｒ　ｊａｃｋｅｔ．」

瞬間、辺りが砂ぼこりで覆われて何も見えなくなった。
相手が突進してきたみたい！
レイジングハート！！

「なのは！」

「ふぅ・・・。」

相手の攻撃は、なんとかレイジングハートのおかげで防御に成功。
服もちゃんと着れたみたい！

「ガアァァァッ！！」
「Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ：Ａｌｌ　ｇｒｅｅｎ．」
「っ・・・。」

何とか攻撃は防げてる・・・みたい。

（衝撃をノーダメージで・・・！？）

やっぱりだ。
この子、すごい才能を持ってる！

「いった・・・っていうほど、痛くもないかな。えっと、封印ってのをすればいいんだよね。」

ボクの目に狂いはなかった。
この子の力を借りれば、予定より早くジュエルシードを集められそうだ！
・・・周りに大きな被害が及ぶ前に。

（それにしても・・・）

昨日の人は何者だったんだろう。
どうしてジュエルシードのことを知ってたんだろう。

（会って、ちゃんと聞き出さないと・・・）

「レイジングハート、お願いね。」
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ．　Ｓｅｔ　ｕｐ．」

昨日の夜とおんなじように、レイジングハートが変形して相手をヒ

モの様なものでぐるぐる巻きにする。
今回浮かび上がったのは“？？”。つまり“１６”。

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ．　Ｒｅａｄｙ．」
「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル１６・・・封印！！」
「Ｓｅａｌｉｎｇ．」

化け物は光りながらだんだん小さくなって・・・消えた。
後に残ったのは、小さな子犬と昨日と同じ形の宝石――ジュエルシード。

「Ｒｅｃｅｉｐｔ　ｎｕｍｂｅｒ　？？．」

これも、昨日と同じようにレイジングハートで、回収・・・っていうのかな？した。

「ふぅ・・・これでいいん、だよね。」
「うん。これ以上、ないくらい。」

よかった！

「結局高みの見物決めこんだな。」
「うるさい。」

神社にいくつも生えている木のうちのひとつ。
その枝の上にて。

「・・・お前だって何もしなかっただろ。」
「私はれいとうビームでひるませた。（どや」
「・・・。（いらっ」

いたのは、ツナとスイクン。
実は、なのは達が神社に来る少し前からここにいたのだ。

「せっかく私がジュエルシードを嗅ぎつけてやったと言うのに・・・
それをみすみす小娘に譲るとはな。なんのためにわざわざここまで
来たんだ、お前は。」
「・・・。」

というかお前ら公園行かなくていいのか。
約束してただろ、なのは達と。
なのは達はもう向かったけど・・・？

「分かっている。作者が話に入ってくるな、分かりにくい。」

いいからさっさと行けよ。

「ほう。この私に向かって命令するとはな・・・命知らずめが。」

作者権限で消してやろうか？

（他でやってくれ。）

一方、公園では一足先になのは達が到着していた。

「う～ん、まだ来てないみたいだね。座って待ってようか。」
「あ、うん。」

ちょうどいいかな・・・。
うん、いまのうちに。

「さっきと昨日はお疲れ様・・・かな？」
「うん。ごめんね・・・キミを2度も巻き込んで・・・」

やっぱリそんな風に考えてるんだ。
・・・うん！これだけはユーノ君に言っておかないと！

「ユーノ君、これからどうするつもりなの？」
「うん。1週間・・・いや、5日も休めばボクの魔力は戻ります。
そしたらまた一人でジュエルシードを・・・」

やっぱり・・・。
でも、それはだーめ♪

「私、学校と塾の時間は無理だけどそれ以外の時間なら手伝えるから。」
「！・・・だけど、昨日やさっきみたいに危ない事だってあるんだよ？」
そんなの百も承知。でも。
「もう知り合っちゃったし、話も聞いたもの。ほっとけないよ。」
それに、昨夜みたいなことがご近所でたびたびあったりしたら、皆さんのご迷惑なっちゃうし・・・ねっ？
「ユーノ君、一人ぼっちで助けてくれる人いないんでしょ？一人ぼっちはさみしいよ。私にもお手伝いさせて！」
「・・・。」
《困っている人が近くにいて、それを助けてあげられる力が自分にあるなら・・・その時は迷っちゃいけない》って。
これ、うちのお父さんの教え。
「ユーノ君は困ってて、私はそれを助けてあげられるんだよね。」
「・・・うん。」
魔法の力で・・・
「わたし、ちゃんとした魔法使いになれるか自信ないんだけど・・・」
「なのははもう立派な魔法使いだよ。たぶん、ボクなんかよりずっと才能がある。」

そ、そうなの？
自分ではよく分からないんだけど・・・

「とりあえずいろいろ教えて？」
「うん・・・・・・ありがとう。」

わたし・・・がんばるから！！

高町なのは、８歳。
――――魔法少女、始めました。

「う～ん。それにしても旅人さん達、遅いなぁ。」
「あ、うん。」

第7話：それは私の覚悟なの！（後書き）

山本「ははっ、キャラ図鑑★はじまるのな。」

ヴィータ「なんか☆が黒くなってる・・・ぜ？」

山本「気にすんなって！あはははははっ！」

ヴィータ「・・・ツッコミって大変なんだな。今やっと分かった気がする。」

山本「ん？なんかいったか？」

ヴィータ「いんや、なんでもないぜ。」

山本「そっか。んじゃまた次回な！」

ヴィータ「次回もよろしく！」

キャラクターステージ０１（前書き）

何が楽しいって、設定を考える事。
蜜柑です。

簡易キャラ紹介です！
本当は後書きのもっちゃん達の仕事ですが。

キャラクターステージ０１

○沢田綱吉

作品：家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！
持ち物：ヴィオーラ（デバイス）、ツッコミ用殺傷力１０倍ハリセン
魔光色：空色（？）

『一応主人公。基本的になんか色々と鈍い。超直感ある筈なのに変な話だよね。フラグというフラグを鮮やかにかつことごとくへし折ってくれる素敵（？）な人。常識人なので必然的にツッコミ、というか周りはボケるような奴しかいない。それなりに努力家らしく影で魔法を使う修行してるとか何とか。原作キラーもいいとこである（原作のツナは自分からめったにそんなことしない）。』

○高町なのは

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ
持ち物：レイジングハート、勇気
魔光色：桃色

『多分メインヒロイン。英語が１００％分かる天才小学生。実家はカフェだが、だからと言って特別料理が得意だと言うことはない・・・はず。でも魔法の才能は天下一品でおまけに魔力量も人一倍。お前の魔力に限界はないのか？というくらいのバカ魔力。』

○スイクン

作品：ポケットモンスターシリーズ
肩書き：ツナの使い魔（仮）
魔光色：水色

『マスコットキャラ？的存在。ただのペットと言うのは嫌だったのか、魔法関係者に名乗る際はツナの使い魔と言うことにしている。本人曰く、その方が色々と都合がいいらしい。お前どうしたと言うほどのボケ。わざとなのかどうかは不明。原作のお前はそんなキャラじゃないはずだ。』

○ユーノ・スクライア

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ
職業：遺跡発掘

『サブキャラという名のレギュラー。いうなればマスコット。ただ、同じマスコットのスイクンの方が出番が多い。おまけに彼の方が社会的にも知られているためどうしても影が薄くなる、可哀想な子。作者はこういう子好きだよ。↑と言うことで原作よりは活躍できるように（？）頑張ってください。』

○八神はやて

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ
持ち物：高い料理スキル

『ヒロイン、だと思う。高い料理スキルと高いつっこみスキルを合わせ持つ。また、高いスキンシップスキルも持っている、通称『揉み魔』。誰が呼んだかは定かではない。小学生でヒロインなのにね。』

キャラクターステージ０１（後書き）

こんな感じでどうでしょう？

デバイス云々はまた後日と言うことで・・・。

第8話：お友達ゲットなの！（前書き）

こんにちは！
蜜柑です。

なんだかよく分からなくなってしまいました。
つまりｇｄｇｄですが、よろしければどうぞ♪

第8話：お友達ゲットなの！

「あ、来た来た！おーい、旅人さーん！」
「・・・遅れてすまなかった。」
ほえ～、クールな人・・・。
「なのは、どうしたの？」
「ゆ、ユーノ君！？びっくりした・・・何でもないよ。」
「？そう。」

今日は、昨日の旅人さんとお話しするんです。

「えーっと、何からお話すればいいのかな？私も、ちゃんと知ったのは今日だからよく分かんなくて。」
「どこでジュエルシードを知ったんですか！？」

あれ、ユーノ君？
ちょっと単刀直入すぎやしない？

「こ奴がいったのだ。」

差し出されたのは、星型の蒼い石。

空色、っていうのかな？とにかくきれい。

「？石・・・？」

「！！まさか、デバイス！？」

「えっ？」

へぇ、デバイスってそれぞれ形が違うんだぁ。

あ、全部おんなじだって思ってたわけじゃないよ！

「うむ。たまたま偶然私のひげに引っ掛かっていたのだ。」

「そんなことってあるんですね。」

「へぇ～っ。」

そーなのかー。（↑

「あの！まず教えてください！あなたたちは何者なんですか！？」

うん、それが一番聞きたかったことだよね。

旅人さんって事しか分かんなかったし・・・。

「そうだな・・・簡単に言うと、色んな異世界を渡り歩いている旅人だ。」

色んな異世界？

「とはいえ、始めたばかりだが。な？」

「・・・。」

ほぇー、すごいなぁ。

色んな世界かぁ～・・・。

「あの、ミッドチルダには行きましたか？」
「ミッドチルダ？」

ユーノ君の故郷だね。

「はい。実はボクも他の世界から来ていて・・・ミッドチルダというところがある世界なんです。ご存じないですか？」
「ないな。そこが、魔法の世界なのだな？大方、その世界からジュエルシードをこの世界に落としてしまい貴様が1人で拾いにきた、といったところではないか？で、たまたま出会ったそこの少女に協力を仰いだ・・・もしくは、巻き込んでしまったその少女が協力したいと言ってきたか。どうだ、違うか？」
「えっ？あ、はい。」

このワンちゃんすごーい！
大当たりだよ！
ユーノ君まだ何も言ってないのに、なんでこのワンちゃん分かったんだろ？

「なんでわかったんですか！？」
「長年の勘。（キリッ」

あ、あはは・・・
そうなんだ・・・・・・

「あっ、まだ自己紹介してませんよね。」
「む。確かに・・・」

こういうことはちゃんとやっておかないと！

・・・あれ？なんかこの前も似たようなこと言った気がする・・・？・・・まあいっか。

「じゃあ私からするの。私、高町なのは。小学3年生！よろしくなの！」

こんなのでいいよね。

「ユーノ・スクライアです。よろしくお願いします！」

「・・・沢田綱吉。ツナでいい。」

「スイクンだ。コイツの使い魔という認識で結構だ。」

「にゃはは・・・よろしくお願いします。」

主人をこいつ呼ばわりって・・・。

普通、使い魔って主人を敬うもんなんじゃないのかな。

違ったのかな？

「とまあ、そういうわけでこの世界にたどり着いたんだが、その時に遭遇したのがジュエルシードなるものだったわけだ。」

「そうだったんですか。すいません、ボクのせいで迷惑をかけてしまったみたいで・・・。」

ユーノ君、また言ってるなぁ。

真面目すぎるのも考えものだよね。

「いや、そのジュエルシードが次の世界へのヒントになったのだ。」

「えっ？」

ヒントになったって？

どういうことなの？

「いや、まだはっきりとは分かっていないがな。」

～少年少女意見交換中～

「じゃあ、ジュエルシード集めに手伝ってくれるんですか！？」

よかったね、ユーノ君。
早く集まる気がするよ。

「うむ。ここまで教えてもらったからには、手伝わないわけにはいかないだろう。」
「でも、迷惑が・・・」

もう、ユーノ君また！

「ユーノ君！」
「なのは？」

さっき私が言ったのに、伝わらなかったのかな。

「私言ったよね？私がしたいと思ったから手伝ってあげるんだって。私は、迷惑だなんてちっとも思ってないんだって。それはこの人達もおんなじだよ。嫌だと思ってるなら、私もこの人達もこんなことしないよ。困ってるなら、理由を知ってる人に頼っちゃおうよ。全部自分で抱えてたらパンクしちゃうよ。」

手伝ってもらえたら、ユーノ君も早く自分のお家に帰れるよね。早く帰らないとご家族の方が心配しちゃうよ。

「・・・じゃあ、お願いします。」
「うむ。」
「・・・。」

ツナ君とスイクンさんがしっかりうなずいてくれた。
よかったね、ユーノ君。
・・・あれ？よかったね、ってさっきも言ったのかな。

「ま、いっか。」
「なのは？どうしたの？」
「ううん、なんでもないの！」

お友だちが増えてよかったなーって、思っただけなの。

「あ。」
「・・・なんだ。」

突然、スイクンが声をあげた。
忘れ物でもしたのか。

「ひとつ、お前に言い忘れていたことがある。まあ、もう気付いていると思うが念のためだ。」
「・・・・。」

またか。
今度はなにを忘れていたんだ。

「この世界でのお前の見た目は小3ぐらいだから。たのむぞ。」
「・・・・。」

・・・えっ？（。д。）

「言わずともよかったか？簡単に言うならば、見た目は子供頭脳は大人、だな（笑）」

「・・・。」

だからやけに目線が低かったのか・・・。

気がつかなかった・・・。

「ん？どうした？」

「・・・。」

何でニヤニヤ笑ってるんだ。
気味が悪いやつだな・・・。

「まさかとは思うが・・・気がつかなかったのではあるまいな?」
「・・・うるさい。」
「お前・・・どれだけ鈍感だ。(笑」
「・・・。」

すっかり日も暮れた真夜中の公園に、ボロボロの蒼い犬がいたとか
そうでないとか・・・。

第8話：お友達ゲットなの！（後書き）

ヴィータ「キャラ図鑑☆はじまるぜ！」

山本「今回は、謎のポケモン“ミュウツー”についてちみっとだけ解説するぜ！」

ヴィータ「ちょっとまてよ、今ページ探してるから・・・。」

山本「おう。」

ヴィータ「あったあった！ええとだな・・・ミュウツーは人工的に遺伝子操作されて出来たポケモンで、“母”の復活のためと遺伝子操作を行った人間たちに復讐するためにツナ達のいる世界のリングを狙ったらしい。」

山本「ボンゴレリングってスゲーもんだったんだな～。」

ヴィータ「お前の持ちもんだろ。把握しろっつーの！」

山本「まーまー。いーじゃねーか。」

ヴィータ「ったく。終わるぜ！」

山本「質問なんかがあったら遠慮なく聞いてくれな♪」

ヴィータ「感想も随時受け付けてるぜ。」

山本「んじゃ、これからもよろしく！」

ヴィータ「またな！」

第9話：それはただの偶然なの？（前書き）

オレはスイクンをどうしたい。
こんにちは、蜜柑です。

気が付いたら4月が終わりかけていて焦りました！
そろそろフェイトを本格的に出したいな～・・・（遠い目

第9話：それはただの偶然なの？

こんばんは！高町なのはです。
いつもは平凡な小学3年生なのですが、最近はこう・・・色々ありまして・・・

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，ｒｅａｄｙ.」
「リリカルマジカル、ジュエルシード・シリアル？？！封印！」
「Ｓｅａｌｉｎｇ.」

・・・。

「なのは、お疲れ様。」

え～と・・・魔法少女とか、やってるんですが・・・。

「はぁ・・・はぁ・・・」
「なのは、大丈夫？」
「うん、大丈夫・・・なんだけど・・・ちょっと疲れちゃった・・・・・」
「！！な、なのは、しっかり！！」

道の真ん中で力尽きちゃいました・・・・・・。

「なのは、起きて！」
「ユーノ君・・・おはよう。」
「おはよう、なのは。」

今日は学校がお休みなので、久々にお家でのんびり過ごす予定です。

「ふぁぁ・・・」

今集まっているジュエルシードはまだ3つ。
全部で21個あるんだよね、頑張らなくちゃ！

「うーん、今日はやることないんだよね～。」

お父さんとお母さんはお店でいないし、お兄ちゃんとお姉ちゃんも出かけちゃったし。

「友達は？遊ばないの？」
「二人とも塾の補習なの。」
「そっか。」

でも、一日家にいるっていうのも・・・なんだかつまんないなぁ。

「そうだ！ツナ君に、今日お暇かどうか聞いてみよーっと。」
「えっ、電話番号知ってるの？」

この間、ユーノ君がスイクンさんとお話している間に聞いたの！
ご協力してもらうなら、連絡取れた方がいいよね？

「っというわけでさっそく！」
「遊ぶために連絡先を教えてくれたわけじゃないと思うけど・・・」

「いいのいいの♪」

何コールで出てくれるかな～？

「・・・・・あっ、もしもし、なのはです！」

3コール！

思ったより早かったかな。

『・・・何か用か。』

「あの～、今日って1日ヒマかな？」

『・・・・・・一応。』

やった！

あ、でも、どうやって誘おうか。

えっと、えーっと・・・。

・・・よし、これで行こう！

「一緒に遊びに行かない？ほら、鳴海市も案内したいし！」

『・・・。』

あれ？

反応・・・なし・・・何かまずいことでも言ったかな？

そんなことはないと思うんだけど。

もしかして、普通すぎちゃったのかな？

「えーっと・・・」

『わかった。』

「え？」

『そっちにむかえに行く。家で待ってろ。』

「あ、う、うん！」

ほえ～・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「なのは、どうだった？」

「・・・。」

「なのは？なのはっ！！」

「へ、え？！」

ゆ、ユーノ君！？

びっくりした・・・

「どうだったの？」

「う、うん！家までむかえに来てくれるって！」

「ふーん。」

あ、準備しなきゃ！

えーっと・・・とりあえずレイジングハートも連れてった方がいいよね。

「ところでなのは。」

「うん？」

「綱吉さんってなのはんち知ってるの？」

ほえ？

「えっ？知ってるから来るんじゃないの？」

「・・・教えてないのに何で知ってるんだろう。」

「さあ？」

市役所で聞けば分かるんじゃないのかな？
あれ？

「まあ、難しいことは置いといて準備しようよユーノ君！」
「でも・・・」
「そんなに気になるんなら、ツナ君が来てから聞けばいいでしょ？」

考えたってよく分かんないし。

「・・・そうだね。」
「準備完了！・・・そうだ！昨日焼いたクッキーが余ってるから、ツナ君にもあげちゃおう♪いくよ、ユーノ君！」
「あ、待ってよなのは！」

お母さん達にも手伝ってもらって作ったやつだから、きっと気に入ってもらえるはず！
仲良くなるにはこういう事も必要だと思うの。

「ユーノ君、はやくっ！」
「あ、うん。」

「連絡が遅くなり申し訳ありませんでした、ミュウツー様。」
「かまわん。」

主人不在のツナの部屋。

いたのはスイクンただ一人。
・・・いや、一匹と言った方が正しいのか。

「ところで、お前そんなはっちゃけた性格だったか？」

どうやら、別世界のミュウツーと何らかの方法で交信しているらしい。
見ている限りでは、方法は分からないが。

「いえ、空間移動のはずみでこうなったようです。もとの世界に戻れば・・・」
「そうか。・・・ところで、ヤツのケースからシモンリングを抜いて来たか？」
「はい。ここに。」

スイクンの前足には、７つの指輪が輝いている。

「・・・こ奴らの魂も我が母復活の糧となっている。無条件で差し出すわけにはいかぬ。」
「？ではどうするおつもりで？」
「こうするのだ。」

瞬間、前足に乗っかっていた指輪が跡形もなく消え去った。

「！」
「探したくば探せ。・・・大空の子にそう伝えろ。」
「分かりました。」

そこまでで交信は途切れたらしく、スイクンはほっと一息ついた。

「・・・私が助けてやれるのはこの世界だけだ。あとはお前の力で探さねばならなくなるだろう。」

「お財布よし、ハンカチよし、ティッシュよし、カバンよし、帽子よし！後はツナ君が来るのを待つだけだね、ユーノ君♪」

「あ、うん。」

そろそろ来るかな～。

・・・ん？

「あっ・・・？」

「どうしたの、なのは？」

今なにか・・・

誰かの気配を感じたような・・・？

「う、ううん！なんでもないよ！」

「そう？」

女の子がそこにいて私を見てたような・・・気がしたんだけど・・・

「なんでもない、よ。」

「？」

きっと気のせいだよね。

「・・・。」

このあたりで魔力を感じた気がした・・・でもなにもない？

「なあフェイト、今ジュエルシードは何個集まってるんだっけ？」

「・・・４つ。」

ノルマは９つだったかな。

「あと５つか・・・間にあうか？」

「間にあわせるしかないよ。」

お母さまのために。

「え～っと・・・じゃあまずは私の通っている学校、私立聖祥学園にご案内しまーす。」

スイクンさんは来てないんだね。

まーいっか。

「なのは、なんだかテンション高いね？」
「そうかな？」

いつもとおんなじだと思うんだけどなー。
う～ん・・・。愛されてる自覚はとってもあるけど、高町一家の中ではなのははもしかして、微妙に浮いているかもしれないって常日頃思ってるからかも。

「・・・あれ？」
「どうしたの？」

「そいつを捕まえろ！」

逃げる獣、追う人間。

「ハァ、ハァ・・・。」

獣は、何かの入った袋を加えて逃げていた。

「いたぞ、こっちだ！」
「！キャンッ！」

獣が逃げた先にあったのは・・・階段。
しかし、気付かずに獣は走り続ける。

「！！ブイっ！？」

そして、足を踏み外した獣は真っ逆さまに階段を転げ落ちて行った。

「ははっ、落ちやがった。ざまあねえな。」
「さて、さっさと回収し・・・なっ！？」
「？どうした。」

獣が落ちたはずの階段。
この階段は結構高めで、あの獣ではタダでは済まされない傷をおっただろう。
そう思った人間たちは階段の下を覗き込んだ。

「・・・いねぇ。」
「なに！？」

しかし、その先に獣の姿はなかった。
袋を加えた獣は、忽然と姿をくらました・・・・・・・・・・・・・・・

「う～ん？」

ヘンだな・・・いつもなら、とっくに学校についてるはずなのに・・・。

「ここの商店街を抜けて真っ直ぐ歩いたはずなんだけど・・・。」
「・・・いつの間にか人気もなくなってるな。」

うん。そうなんだよね。

・・・あれ？

「えっ！？」

ここってもしかして・・・翠屋・・・？
お母さんのお店！？

「なんで、こんなところに翠屋があるの！？」

おかしい。
学校目指して歩いてたはずなのに、翠屋に着くなんてことあるはずないの！！

「ユーノ君、ツナ君！どうなってるの！？」
「ボクにも分からない・・・ただ。」

ただ？

「ただ・・・この街全体の地形がめちゃくちゃになってるみたいだよ。」
「！」

はっと周りを見渡すと、ありえない場所に病院があったりあるハズの無い場所に公園が見えている。
ここは、私の知ってる海鳴市じゃない！

「おそらく・・・」
「え？」

何か分かったの！？

私はなにがなにやらぱにっくなのに・・・ツナ君って落ち着いてて
すごいなぁ。

「おそらくどこかでジュエルシードが発動したんだ。」
「で、でも、こんな無茶苦茶な鳴海市でどうやってみつけ出すの？」
なんか地形が常に変動しちゃってるみたいで、もう右も左もわかん
ないよ。

「・・・ローザ、セットアップ。」
「Ｙｅｓ，ｂｏｓｓ．Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕ
ｐ！」
直後、ツナ君の手に現れたのは・・・

「色違いの・・・レイジングハート！？」

そう、空色？水色？まあ、そのような色のレイジングハートそっく
りさんだったわけでして・・・。
なんていうか・・・うん。

「私より似合ってない？もう、ツナ君でいいんじゃないかな？」
「ちょ、なのは！？なにがもういいの！？」

ユーノ君、冗談だよ。ちゃんと、私最後まで手伝うから！
そんなことより。

ええと、ツナ君はお構いなし・・・みたいだね。

「・・・いけるか？」

「Ｏｆｆ　ｃｏｕｒｓｅ．Ｔｈｕｓ，　ｔｈｅ　ｓｅａｒｃｈ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｊｅｗｅｌ　ｓｅｅｄ　ｂｅｇｉｎｓ．」

ツナ君が杖を前に突き出すのと同時に、空色の丸い宝石の部分が輝き始めた。

ちなみにさっきあのデバイスさんは、これよりサーチを始めます、的なことを言ってたよ。

「ど、どうですか？」

「え～っと。」

なんて聞いていいか分かんないな・・・。

「・・・見つけた。」

「え、ちょ、ちょっと待って！レイジングハート、セットアップ！」

わたしも、レイジングハートを起動させておいた方がいいよね。

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ．」

こうして、私の長い休日が始まりました。

第9話：それはただの偶然なの？（後書き）

山本「キャラ図鑑☆はじまるのな！」

ヴィータ「今回はスイクンについて触れとくぜ。」

山本「あいつおもしれーよな！」

ヴィータ「そ、そうか・・・？むちゃくちゃウザイと思うんだけど・・・。」

山本「ツナも楽しそうにしてるしな♪」

ヴィータ「・・・沢田は楽しんでないと思うぜ・・・。」

山本「まーまー。じゃ、終わりにすっか！」

ヴィータ「お、おう。次回もよろしくな。」

第１０話：歪んだ街で鬼ごっこなの？（前書き）

はやてがおかしな子に・・・！
こんにちわ、蜜柑です。

だんだんクオリティが落ちてきた気がします。
いや、もとから落ちきったクオリティの文章でしたけども。

第１０話：歪んだ街で鬼ごっこなの？

「なんだか気持ち悪いの・・・。」

こころなしか、空や海まで歪んでいるように見える。
魔法の結界とは違うみたいだけど、一体何なんだろう？

「今回はなんの心に反応したのかな。」
「おそらく人間です。」

ユーノ君曰く、強い心を持った人間に反応したジュエルシードが暴走しちゃったみたい。

「急がないと、他の街にまで影響が及ぶ可能性があります。」
「そんな！海鳴市って結構広いよ！？」

なんでもありだね、魔法って・・・。

「・・・あれだ。」

ツナ君が見つめる先にいたのは、人間の形をした真っ黒い生物。
私が最初に見たのの人型バージョン・・・って言えば伝わるかな？

「リリカルマジカル！ジュエルシードしりあｒ」
「なのは！」
「なに・・・ってえええぇぇ！？」

いつもは襲ってくるのに、今回のは逃げてしまった。
しかも、ものすごい速さで！

「あんなに素早いと、呪文唱えるの間に合わないよぉ～！」
「・・・弱らせるしかないな。」
追いつくのも一苦労なのに、そのうえ弱らせるなんて・・・なのは
には難しいの・・・。
「なのはしっかり！」
「う、うん。」
大丈夫、私ならできる私ならできる私ならできるっ！
これはただの鬼ごっこ！鬼ごっこなの！
よしっ！！
「絶対逃がさないんだから！」
「・・・そのいきだ。いくぞ。」
つ、つつツナ君が笑った・・・気がした！
・・・って、今はそんな場合じゃないよ私！
「とりあえず、どこかに追い込んだ方がやりやすいと思います。」
「ああ。」
「で、でも、地形が変動してどこがどこだか・・・」
あ、でも真上からなら分かるよね？
「一人が真上から位置を確認してた方がいいかも。」
「会話は念話で十分できるし、それが一番手っ取り早いですね。」
でも・・・

「・・・誰が上から見てようか。」

ユーノ君って、飛べるのかな。
一番いいのはユーノ君だよね。

「じゃあ、ボクが行きます。大丈夫、魔法陣を張ってその上に立っていれば空中でも平気です。」

さっすがユーノ君!
自分から立候補してくれたの。

「たのんだ。」
「気をつけてね!」
「はいっ!」

さあ・・・ゲームスタートなの!!

「ここは・・・?」

ちょっとお散歩に出かけてたら、急に人がおらんよなって・・・
気が付いたら全然訳分からん場所におるし・・・

「どうなってるんや?ツナは・・・無事やろうか。」

とりあえず、もうちょい散策してみよか。

何か分かるかもしれんしな。

「ん？・・・黒い、人間・・・？」

あれ、こっちに向かって来とらん？なんや？
人間やないんか・・・？
とりあえず、よけなな。
・・・あれ？

「よ、よけれへん！？何で動かんのや！」

こんな時にこの車いす、パンクでもしたんか！？
あかん、ぶつかる！

「きゃあぁぁぁっ！！」

・・・私、こんな所で死ぬんやろか。
こんなわけのわからんとこで・・・。

「ん？」

はやての家のはやての部屋。
そこにいたのはスイクン。

「・・・この本は、なんだ？」

本が鎖で固定されているなんて聞いたことがない。
おまけに、ご丁寧に鍵まで付いているとは。

「不思議な本だな。」

だが、まあ・・・今気にかけるものでもないだろう。

「・・・。」

あれ？何も衝撃を感じひん・・・？
そう思ってこわごわ目を開いてみた。そしたら。

「ツナ！？」
「大丈夫かはやて。」

ええと。
ツナの前にはさっきの黒い人間みたいなのがおって・・・
で、それをツナが棒（？）の先から出よる膜（？）で防いどって・・・
な、なんやようわからんけどこれだけは分かる。

「おおきに、ツナ！」

「ああ。元気そうでよかった。」

私はいつでも元気やで・・・って、ちゃうわ！

「これはどないしたん!?」

私がそういうてる間に、黒い人間はまた素早く逃げた。

「後で話す。」

「あ、ちょっ！」

それを追いかけて、ツナも姿を消した。

「行ってしもた・・・。それにしても、クリーム色のブレザー着とるツナ、めっちゃ可愛かったな・・・！今度他の色のブレザー買って来て、ツナに着せたろ♪あ、学ランとかも似合いそうやなー♪」

はやて・・・。

ツナ、どんまい。

「あ～もう！何であんなに素早いの!?」

「・・・落ち着け。」

そのころツナは、この後はやてにたっぷり遊ばれるとはつゆ知らず、

再びなのはと共に黒い物体を追っていた。

『なのは・・・うしろっ！！』

「ほえ？」

突然頭の中にユーノ君の声が響き渡ったかと思うと、目の前に何かが立ちふさがった。
そして、それは私に当たるハズだった攻撃をまともに受けて真っ逆さまに落ちていった。

「つ、ツナ君！？」

ここは空中だ。しかも結構高い。
こんな場所から落下したら・・・！

「・・・。」
『なのは・・・？』

私のお友達をこんなにして・・・許せない。

「シューティングモード、セットアップ。」
「Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｍｏｄｅ.　Ｓｅｔ　ｕｐ.」
『なのは！？なにを・・・』

捕まえられないなら・・・逃げる範囲の無いくらいの攻撃をすればいい。
当たらないなら・・・当たるまで攻撃すればいい。

「行くよ、レイジングハート！」
「Ａｌｌ，ｒｉｇｈｔ．」

ここは海鳴市じゃない。
ちょっとぐらいぶっ飛ばしちゃっても大丈夫だよね？

「スタァライトォォォ・・・」

これなら、どこに逃げようともどこに隠れようとも関係ない！！

「ブレイカアアアアアアア！！！！」

「すごい。ボクでも使えない砲撃魔法を・・・。」

一体この子にはどのくらい魔法の才能があるんだろう。
しかも、こんな威力のを・・・・・・って。

「あれ？」

そういえば綱吉さんが下に落ちて・・・落ちて？

「ちょ、なのはっ！？」

海鳴市（？）がけし飛んじゃったら綱吉さん即死だよ！？

い、急いで探さなきゃ！！

この時、のちの魔王の片鱗が見えたとかそうでないとか。

第１０話：歪んだ街で鬼ごっこなの？（後書き）

ヴィータ「キャラ図鑑☆はじまるぜ！」

山本「今回は紹介するような新しいキャラがいねーのな～。」

ヴィータ「う～ん・・・。しりとりでもするか？」

山本「おっ、いいなそれ！じゃあオレからな！いぬ。」

ヴィータ「ぬれネズミ」

山本「ミトコンドリア（カッ」

ヴィータ「な、なんだそりゃ・・・。アリ」

山本「リング」

ヴィータ「グミ」

山本「ミント」

ヴィータ「トランセル」

山本「ルビー」

ヴィータ「ビール（にやり」

山本「う～ん・・・。ルイージ」

ヴィータ「Σなっ！ジャガイモ」

山本「モンブラン。・・・あ。」

ヴィータ「勝ったっ！よっしゃあぁぁ！！」

山本「あー、負けちゃったのな・・・。」

ヴィータ「じゃあ、今回はこの辺でお別れだぜ。」

山本「またやりてーな。」

第１１話：謎の魔法少女なの（前書き）

お久しぶりです、蜜柑です。
こんにちは！

今回は、やっとあの子の出番です！

第１１話：謎の魔法少女なの

「スタァライトオォォブレイカアァァァァ！！！」
『ちょ、なのはっ！？ストーップ！！』
ユーノの念話での叫びも空しく、ニセ海鳴市はなのはの砲撃魔法の光に包まれた。

「なんの音やろ？」
何処からか地鳴りのような音がしたかと思うと、向こうで何かが光っている。
あれ？
「なんか、こっちにまで広がって来とる・・・？」
これは、あかんのやないん？
「いやあぁぁぁ！！」
今日は徹底的についとらん日や・・・
そう思たそのとき。
「伏せろ、はやて！」

「えっ、ツナ！？」

さっきどっか行ってたんやないん？
どーゆーことや。
というか、車いす乗っとるけん伏せれんのやけど！

「ナッツ、形態変化（カンビオ・フォルマ）・防衛モード（モード・ディフェーザ）！」
「ＧＡＵＵＵＵ！！！」

何か声がした後、私の視界は黒い物で覆われた。

「！」
「どうしたんだい、フェイト？」

なにか・・・この町で何か起こっている？
起こっているとしたら、間違いなくジュエルシード・・・！

「・・・アルフ。」
「あいよ！」

私は、気配を感じた方へアルフと共に向かった。

ふと気がつくと、辺り一面が焼け野原になってました。

「ご、ごめんなさい・・・。」

目の前にいるのは、車いすの少女でツナ君の妹さんのはやてちゃん。
実は、わたしの砲撃魔法であやうく死にかけるところだった女の子なんです。
えっと、その・・・わ、わたしが、偽海鳴市消し飛ばしちゃって・・・あはは。

「妹じゃない。」
「ええんよ、なのはちゃん。ツナのおかげで無事やったし。」

そう、ツナ君!

「ツナ君、ごめんなさい。私が鈍くさいばっかりに・・・」
「大丈夫だ、問題ない。」

あれ?どっかで聞いた事あるようなフレーズ?
・・・・・・・思い出せないや。

「なのは。魔法の威力とかはすごかったけど、今度からはもっと慎重に使おうね。」

「ごめんなさいユーノ君・・・。」

私、もっとちゃんとしなきゃダメだよね。
こんなことじゃ、いつまでたっても足引っ張っちゃう・・・。

「とりあえず、どうやってここから出るか考えなな・・・」
「そうだね。」

ジュエルシードは回収したはずなのに、まだ結界らしきものが解けていない。
一体どうなってるの？

「・・・なにかくる。」
「えっ。」

ツナ君って感がいいよね。
それに比べて私なんて・・・

「・・・。」

ガキィン！

「きゃあっ!?」

突然、目の前に金髪の女の子がいて。
しかも・・・

「なのは!」
「なのはちゃん!?」
(魔導師・・・!)

そう、魔法少女みたいなんです。
わたしは、なんとかレイジングハートで相手の子の攻撃を防げたから無事。

「あなたはだれ?どうしてこんなことするの?」

綺麗な人、綺麗な髪。
でも、この子・・・

「渡して。」
「へ?」

その子は、素早く私達との距離を取って武器を構えた。
そしてそのまま、衝撃的なことを口にした。

「・・・ロストロギア、ジュエルシードを。」
「どうしてそれを!?」
「あなたはだれなの?」

この子ジュエルシードを知ってるの?

って、ろすとなんとかって？

「あれは・・・あなたが持つべきものじゃない。」
（この子、ジュエルシードの正体を知っている・・・？）
「どういうこと！？」

いきなり襲いかかって来られても、全然分かんないよ！

「とりあえずお話しあいを・・・」
「バルディッシュ、フォトンランサー・連撃。」

・・・してくれる気はないみたい。

「っ！」
「Ｗｉｄｅ　Ａｒｅａ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ.」

カキンコキンという音を立てながら、防御魔法であの子の攻撃をなんとかはじききった。
と、急にその子を見失った。

「ど、どこ行ったの！？」
「・・・おとなしく、あなたの持っているロストロギア・ジュエルシードを渡してください。」

後ろから声がして、見てみると。

「つ、ツナ・・・なのはちゃん・・・！」
「はやてちゃん！？」

金髪の子とはやてちゃんがいた。

あと数ミリではやてちゃんの喉に刺さりそうなぐらいの近さに、武器を構えたその子が・・・。

「はやては関係ない、その手をどけろ。」
「そうだよ。関係ない子を巻き込まないで！」

どうしてそんなことするの！

「高町なのは。あなたがロストロギア――ジュエルシードを渡しさえしてくれれば、この子には何の危害も与えない。」
「！どうして、私の名前まで・・・！」

一体何がどうなってるの！？

「・・・。」
「ユーノ君・・・ジュエルシード渡しちゃったら・・・！」

せっかく集めたのに、私のせいで。

『大丈夫だよ、なのは。今はあの子の命の方が大切だから。』

・・・うん、そうだよね。
また集め直せばいいよね。

「本当に、はやてちゃんには何もしない？」
「しない。・・・無関係の子を、傷つけたくはないから・・・。」
「！」

この子、やっぱり・・・

「わかりました。・・・受け取って。」

哀しい目をしてる。

「・・・。」

はやてちゃんの命には代えられない。
ツナ君だって妹さんを失うのは悲しいと思うし、何よりそんなことは私が耐えきれない。

「えっと、あなたの名前・・・」

「・・・。」

問いかけてみたけど、その子は私の3つのジュエルシードを受け取ってすぐに姿を消してしまった。
・・・また、会えるかな?
その時は、必ずお話しなきゃ。

「あ、はやてちゃん!大丈夫!?」

「目立った外傷はないみたいだね。」

私は、慌ててはやてちゃんのもとへ駆け寄った。
すでにツナ君がはやてちゃんとお話していた。

「なのはちゃん、ありがとうな。私は大丈夫やで。」

「う、うん。よかった。」

と。

「あのな、なのはちゃん。私、あの子ほんまはええ子やと思うんや。

」
「えっ？」
はやてちゃん、あの子に殺されかけたんだよ？
どうして？
「・・・『関係ない人を巻き込みたくはないから』。そういってた。」
「そういえば・・・」
じゃあ、どうしてあの子はあんな事を？
とても悲しい目をしていたのもそれと関係があるのかな。
「それにな。あの子、去り際に『ごめんね、怖かったよね』って。
確かにそう言ってたんよ。」

第１１話：謎の魔法少女なの（後書き）

山本「キャラ図鑑☆始まるのな！」

ヴィータ「今回紹介するのは、山本らしいぜ。」

山本「ん？オレか？」

ヴィータ「え～っと？得意なことは野球、宝物は友達、好きな食べ物は寿司？・・・って、全部お前のパーソナルデータじゃねーか！何で本編に出ないヤツの紹介するんだよ！ここで、ネタ・・・じゃねぇや話に持っていけるもっと奇抜な趣味とかないのかよ！！」

山本「急にキレられてもな・・・」

ヴィータ「うるせぇ！グラーフアイゼン、シュワルベフリーゲン！！」

ドドドドドーン！！！

山本「あっぶねぇっ！ま、また次回会おうな！」

ヴィータ「まてぇっ、逃げんな！」

第１２話：みんなで脱出なの！（前書き）

こんばんは！
気が付いたら６月に１回も投稿してなくてめちゃくちゃ焦った蜜柑です。

だいぶキャラ崩壊しました。
だいじょーぶ（キラッ☆）な人はどうぞごゆっくり。

第１２話：みんなで脱出なの！

これはどうしたものだろうか。

「・・・。」

皆さんお久しぶりです。
目立たないフェレット、ユーノ・スクライアです。
自覚はありますが、地味さは直しようがありません。
ところで今、僕たちは大変な状況にあるんですが――

「で、でられない・・・！」

そうなんです。
謎の結界に阻まれて外に出られなくなってしまったんです。

「なのはちゃんが吹っ飛ばしたらええんとちゃう？」

あの、ええっと・・・はやて、さん？
さすがになのははそこまで便利じゃないです。

「さっきので力使いきっちゃったから、さすがにちょっと・・・。」
「そ、そっか。ごめんな。」

僕の魔法も通じないし、一体どうすれば？

「このままでられないのかな・・・・・・」
「うぅん・・・・・ぐすっ・・・・」

あああ、ど、どうしよう！？
こんな所で泣かれても困りま――

「泣くな、はやて、なのは。」

ええっと・・・。

「せっかくの綺麗な顔が、泣いてしまったら台無しだぞ。大丈夫。必ずオレがここから出してやる。」
「ツナくぅん！」
「ツナぁ！」

とりあえず、いたいけな小学生をこの状況で口説かないでください！！
あれ？
この人こんなキャラでしたっけ。

「（はっ）しょ、小学生を口説いちゃダメですよ綱吉さん！？」
「？・・・何の話だ。」

この人、まさか・・・・・・・・・・・・・・・・・・天然タラシですか。
そうなんですか！？
こ、子供に懐かれやすいだけだと思いたい・・・です、ね・・・。

「い、今のは忘れてください！」
「？わかった。」

もうこのことについて考えるのやめます。
他に考える事ありますし・・・。

「でも、どうやってでるんや？」
「・・・。」

なんでそこで黙るんですか。

「・・・いまから・・・」
「はい？」
「今からオレがすることは、誰にも言わないでもらいたいんだ。」

ボクはもう十分隠し事だらけだし、なのはも大丈夫。
車いすの彼女も綱吉さんが信用してるなら問題ないと思います。

「それと、詮索もしないでほしい。」
「わかった。」
「了解や。」
「わかりました。」

・・・一体何をする気なんでしょう。
しかも・・・せ、詮索されるなといわれるとしたくなりません？

「ダメだよ、ユーノ君！」

いつから僕の心を読めるようになったの、なのは。

「約束は破らないよ、なのは。」
「本当？」
そんなに疑われると、さすがの僕でも傷つきます。
もっと信用してほしいな。
「みんな、さがれ。」
急に綱吉さんがそう言った。
・・・えっ？
炎の逆噴射？
しかも手から直接出てる？
「あば・・・ば・・・・・・・・・ばば・・・・・（ぶくぶく」
「ちょっ、ユーノ君！？しっかり！」
「気を確かに持ちや！」
なのは達の声援（？）も空しく、驚きすぎた僕の意識は謎の爆破音と共に持っていかれてしまった。
イヤホンがあって正解、か。
「・・・オペレーション、？。」

『了解シマシタ、ボス。コレヨリ発射シークエンスヲ開始シマス。』

こんなところで、と思ったが・・・
仕方がない。
二人を泣かせられない。

『ゲージシンメトリー、発射スタンバイ！』

いくぞ。

（？―ＢＵＲＮＥＲ！！）

ドッゴオォォォォォォン！！！！！

辺り一面が美しいオレンジ色に染まった。

第13話：散らばった探し物なの？

「ユーノ君、大丈夫？」

気がつくと僕は、なのはの腕に抱かれていた。
どうやら気絶しちゃったらしい。

「うん大丈夫。それより・・・結界は？」
「あ、うん。それなんだけどね。」

なのははさっきのことを話し始めた。

「きゃあぁぁっ！？」

ツナ君が放った一撃で辺りは眩しい光に包まれた。
思わず私は、気絶したユーノ君を抱えたままぎゅっと目をつぶった。
――気がつくとそこは、なのはにとっては見覚えのある場所だった。

「ここはどこなの？・・・あ。もしかして、うちの学校の運動場？」
「広いな～。」

ツナ君すっごい魔力秘めてたんだ。
だって、結界ごと好き飛ばしちゃったんだよ？

ニセ海鳴市をだよ?

「あ、ツナ君!」
「ツナ大丈夫なん?」

少し離れたところに、ツナ君がいた。
なんだか大丈夫そう。

「ああ、オレは大丈夫だ。二人は怪我してないか?」

優しいな。
ツナ君って。

「このとおり、元気やで!」
「ユーノ君も無事だよ。」
「そうか、よかった。」

するとそのとき、ツナ君の後ろに何か赤い物が輝いていた。
なんだろう?

「ツナ君、後ろ!これなにかな?」
「!!これ、は・・・・・・!」

指輪、みたいなの。
私とはやてちゃんは不思議だなくらいにしか思わなかった。
でも、それを見たツナ君の顔色が変わった。

「・・・。」

ツナ君がその指輪に触れると、ふわっとそれがツナ君の手の平にの

った。
まるで、指輪が“ただいま”って言ってるみたい。
とっても不思議なの。

「・・・おそらく、ジュエルシードがこれに反応してあの結界を作りあげたんだ。」
「そうだったんだ。」

その証拠に、横にはジュエルシード“？”が浮かんでる。
ツナ君が杖をかざすと封印された。

「なぁ、ツナ。この指輪なんなん？」
「・・・。」

はやてちゃんが何気なくそう聞いただけだったのに、ツナ君は押し黙ってしまった。
聞いちゃいけないことだったのかな・・・？

「こんなかんじかな。」
「そうだったんだ。」

とりあえず気になるのは指輪、かな。

「綱吉さんに聞いてみる必要があるかもしれない。」

リングを手に取った瞬間、白い小さな光が空の彼方へ消えて行った。
あれは、おそらく――獄寺。

（嵐のボンゴレリング・・・。これで、獄寺は無事なわけか。）

リングをヴィオーラに保管してもらいジュエルシードは素早く封印した。
ジュエルシードというのは、リングにも反応するのか。
ということは、ジュエルシードを探していればリングも見つかるかもしれない。

（・・・だが、まずいな。ローザはこれ以上ジュエルシードを取り込めそうにない。）

もともと不良品として捨てられていたんだ。
あまり無理はさせられない。

「Ｓｏｒｒｙ，Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ・・・」
「大丈夫だ。お前があやまることじゃない。」

「Ｂｕｔ・・・」
「心配するな。」

今オレが持っているジュエルシードは８つ。
まだ見つかっていないのは６つ・・・というのはオレの勘。
なんとなくそのぐらいだと思った。

（・・・困ったな。）

「ツ～ナ～くん？」
「・・・。」

反応なし。
何か考え事でもしてるみたい。

「ツナ？どしたん？」
「・・・。」

はやてちゃんでも反応なし。

「綱吉さーん？」
「・・・。」

ユーノ君でも反応なし。
どうしたのかな。
ツナ君の周りだけ時間が止まったようになっている。
すると突然、ツナ君がピクッと動いた。

「わぁっ!?」
「び、ビックリさせんといて!」
「・・・どうしたんだ?」

突然動くからびっくりしたの!

「どうしたの?何か考え事?」
「いや・・・なんでもない。それより、帰らなくていいのか。」

なんかツナ君に流された気がするけど、まあいっか。
・・・・・って、えええええ!?

「ゆ、ユーノ君!今何時!?」

ハッと気がつくと、空が夕焼け色に輝いていた。
家に帰る間に日が沈んじゃうかも!?
お兄ちゃんに怒られちゃう・・・。

「5時46分だけど・・・」
「うわあぁぁぁっ!!!」

急がないと!!

「ツナ君、クッキー作ったんだけど、よかったらはやてちゃんと食べてね!じゃあまた!バイバイ!!」

「あ、ああ。ありがとう。」
「ほなまたな！」
慌てて走り帰る私の後ろでは、はやてちゃんとツナ君がいつまでも手を振ってくれていた。

第１３話：散らばった探し物なの？（後書き）

なんでツナが８つもジュエルシードを抜け駆けしてるかについてはおいおい出てくるかと思います（笑）

第１４話：石の秘密と歪んだ心なの？

「・・・。」

なのはを見送ったその日の夜。
お風呂上がりのツナは、嵐のボンゴレリングとにらめっこをしていた。

「・・・本当に獄寺はこれで無事なんだな？」
「無事だ。間違いない。」

目の前には、スイクン。

「ならいい。」

スイクンにそれだけ確認すると、ツナはすぐにリングをしまおうとした。
しかし、それは止められてしまった。

「まあまて。リングは集めるだけではだめだ。あー・・・ダメ、というわけでもないか。」
「どっちだ。」

するとスイクンは、ヴィオーラからあの二枚貝の形をしたオレンジの石を出すように言った。
逆らってもしょうがないしそうする意味もなかったツナは、素直にだした。

その時、彼はある異変に気がついた。

「シモンリングが・・・ない・・・？」
「ないなら探せ。いずれ見つかるだろう。」
「くっ・・・炎真達まで・・・！」

リングの紛失。
この状況でそれはその持ち主たちの危機を示す。
ツナは知らないが、これもまたミュウツーの仕業なのだから。

「心配するな。それより、その石――いや、デバイスについておかしいと感じたことはなかったか？」

おかしい所。
そう聞いたツナには、心当たりがあった。

「・・・ローザたちの時の様なものを、何も感じなかった。」
「そうか。」

デバイスだと言われたため、ツナは名前ぐらい知っておきたいと試した事があった。
しかし、その時何の反応も感じなかったどころかただの石にしか見えなかったのだ。

「どういうことだ？」
「このデバイスはなんのプログラムも組み込まれていない、いわば赤ん坊だ。名前すらない。」
「・・・。」

名前がないというのなら、聞いたって分かる筈がなかったのだ。

それに何もプログラムされていないのだから何も感じなくて当然だ。

「そこで、このデバイスが使い物になるようにするためにそのボンゴレリングを使ってアップデートしてもらう。」

「・・・オレのリングじゃダメなのか。」

ツナは最初から大空のボンゴレリングを持っていた。

ならば、さっさとアップデートなりなんなりしてしまえばよかったのだ。

そうすればすぐにでも起動できたはず。

――ツナはそう考えた。

だが、そんな簡単な話ではなかった。

「いきなり大空のリングを読みこませたのでは、確実にこのデバイスがパンクしてしまう。大空のリングはもっと他のリングを集めてからだ。」

「・・・わかった。」

スイクンにも詳しいことは分からないらしいが、海の大空然り虹の大空然り、大空のリングは特別なのだと言う。

それはともかく、とにかくそのアップデートとやらをやってみるしかなさそうだ。

「さっき何もプログラムされていないと言ったが、厳密に言うと間違いだ。基本的な動作スペック程度ならばすでに組み込まれている。無論、このままでは起動しないがな。」

「じゃあどうすればいいんだ。」

スイクン曰く、その石にアップデート素材を近づければ自動的に処理してくれるらしい。

起動してないのに何でそんなことが出来るのかまでは、さすがのスイクンにも分からないようだが。

「・・・。」

言われた通りツナは嵐のボンゴレリングを石に近づけてみた。
するとそのとき、突然リングが赤い光を放ちはじめた。
しばらくするとその光は、すべて石に吸い込まれてしまった。

「・・・。」

今突然起きた出来事を、ツナは眉一つ動かさずに見ていた。

「ここまで無反応なお前が怖い。」
「・・・結構驚いたつもりだが。」
「ウソつけ!?息してるのかどうかも怪しいぐらい動かなかっただろう!!」

もうどっちが苦労人なんだかわかりゃしない。
ぶっちゃけどっちでもいいけど。

「人を蝋人形みたいに言うな。」
「そう言われたくないのならば、もっと喜怒哀楽をはっきりさせろ!!」

つまり、もちっと笑えと。
怒ってるのに無表情なのは怖いからやめろと。
そういうことである。

「リボーンより分かりやすい。」

「どっちも分かりにくいしまだリボーンの方がなんとなく分かるわ！」

ところでお前らなんか忘れてるだろ。

「「・・・あ。」」

布団の上には、オレンジの石がぽつんとさびしげに放置されていた。
完全に2人に忘れ去られてしまっていたようだ。

「・・・。」
「・・・寝るか。」

どうしてそうなった。

「たったこれだけ？」

ここは次元の狭間にある、とある場所。

「これだけ待たせておいて、たったの7つ？ノルマにすら届いていないじゃないッ！！」
「・・・ごめんなさい・・・・・・お母様・・・」

女はすでにボロボロの少女に鞭を振るう。
何度も、何度も。

「うぁ・・・っ・・・!!」
「これ以上私を失望させないでちょうだい。」

再び女は鞭を振るう。
情けなど微塵も感じられなかった。

「わかったらさっさと行きなさい、可愛い可愛い私のフェイト。」
「はい・・・お母様・・・・・・」

これだけやられても、少女――フェイトはうれしそうに母親を見上げた。
こんな母親でもフェイトは彼女の事が好きなのだ。
彼女はすでに歪んでいた。

「そんな・・・あんまりじゃないか、あの女!!」

フェイトのいる部屋の前に、彼女の使い魔であるアルフが頭を抱えて辛そうにしゃがみこんでいた。
バックには鞭の音と、フェイトの悲痛な悲鳴。

「あの女がフェイトに当たるのはいつものことだけど・・・それにしたって今回はひどすぎる！フェイトがあいつのためにあんなに頑張ってたってのに！！」

アルフの中には怒りがこみ上げて来ていた。
もともと最初からあの女のことは気にくわなかった。
フェイトが言うから今まで我慢してきたが、今回ばかりは限界だった。

「なんだってんだよ！！」

とうとう耐えきれなくなったアルフは、そう吐き捨てどこかへ走って行った。

第１５話：迫る危機と少女なの？

ボロボロになったフェイトとアルフが去っていくらか経った頃、テスタロッサの居城にここにいるはずの無い者の姿があった。
沢田綱吉とその使い魔（仮）スイクンである。

「いいのかコレ。」

今オレの目の前には、液体に入れられた裸の少女がいる。
正直目のやり場にものすごく困る。
オレは出来るだけ少女を視界に入れない様にしながら周りを観察してみた。どうやらここでこの少女にまつわる実験をしていたらしい。
・・・個人的にこんな実験許せない・・・が・・・・・・今はおいておく。

「かまわん。腐れババアの分際で私の機嫌を損ねたのが悪いのだ。しったことか！」

・・・やれやれ。

――数十分前のこと。

「・・・。」

オレが買いものを済ませて部屋に戻ると、珍しく黙ったままのスイクンがいた。
話しかけるのも面倒だったから無視したら腕に噛みつかれた。正直うっとおしい。
甘噛だったからハリセンでしばいてはがしたが。

「なんなんだ。」

部屋に入ったときから思っていたが、何故かスイクンが怒っていた。
犬って案外簡単に怒るんだな。

「私は犬ではない!!」
「・・・叫ぶな、煩い。」

あと心を読むな。
ところでなんで怒ってるんだ?

「これからド腐れ低能ババアを奈落の底に沈めてやろうと思う。」
「・・・・・・・・・・・・は?」

だれだそれ。

それと、何があったかは知らないが言い過ぎだ。

「そういうわけだからついてこい。ノーは聞かん。」

「わけがわからな・・・！？」

そして冒頭に至る。

「この少女を連れ帰る。というわけで運べ。」

「・・・なぜ命令形なんだ。」

「この娘はあの低脳ババアにとって大切な存在なのだ。あのババアが慌てる様を想像してみろ。楽しいだろう？」

「・・・・・・そうだな。」

オレの質問は無視か。

逆らうのも面倒になったオレは近くに置いてあった布を2枚ほど拝借し、その布で水から引きずり出した少女をくるんだ。

「！？」

「どうした、何かあったか？」

「・・・息、してないぞ。」

最初からおかしいとは思っていた。

水に頭の先までつかっているのに、空気を送るためのマスクもボン

べも見当たらなかったから。
呼吸していないのだからどうりで必要ないはずだ。

「大丈夫だ、その女の魂はまだ存在している。肉体さえ回復させることが出来れば、生き返るだろう。」

もう、よくわからない。
誰かこの世の仕組みを教えてくれないか。

「お前の炎をその少女に注いでやれ。大空の特性である“調和”の力でそ奴は目を覚ますだろう。あ、仕組みなど聞かれても私は知らんぞ。」
「・・・・・・・・・・・・わかった。」

自分で言うのもあれだが・・・。
大空の炎ずいぶんと便利だなオイ。

ツナがスイクンに呆れていた頃。

「私がただの甘ったれた子じゃないって分かってくれたら、お話・・・聞いてくれる?」
「・・・。」

フェイトとなのはのデバイスがぶつかりそうになる。
近くにはジュエルシードが一つ浮かんでいる。
二人が全力で互いの武器を振り下ろそうとした・・・そのときだった。

「ストップだ!ここでの戦闘行為は危険すぎる!!」
「「!」」

突然、白い魔法陣と共に二人の間に割り込むように現れた少年が、レイジングハートをつかみバルディッシュ――フェイトの鎌型のデバイスだ――を自身の杖で防いで、止めた。

「時空管理局執務管、クロノ・ハラオウンだ。・・・詳しい事情を聞かせてもらおうか。」

なのはと対照的な黒い衣服――おそらくバリアジャケットであろう――に身を包んだ少年、クロノはそう言って二人と目の前のジュエルシードをキッとにらんだ。

「おかえり!いつもより遅かったなあ。なんかあったん?」
「ただいま。いや・・・この子以外はとくになにもなかった。」
「?ならええんやけど。」

・・・・・・・・なにもないわけがない。

「ツナどないしたん？ほんで、その子だれなん？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・それより・・・これはなんだ？」

色々あってすうすうとオレの腕の中で眠っている少女はこの際無視してほしい。

それよりももっと気になることがある。

「え？ああ、この子犬？実は図書館の帰りに見つけたんやけど、えらい衰弱しとって可哀想やって・・・連れかえってきたんや！今はもうすっかり元気やで！！な？」

「ブイっ！」

「・・・そうか。」

オレの足元にいる小型化したスイクンが訝しげな顔してるとか、全く子犬に見えないとか、そもそも子犬は「ブイ！」って鳴かないだろとか言いたいことはいっぱいあったが――やめた。

言うだけ無駄だとオレの勘が叫んでいるし、なにより面倒だ。

「それよりこの子が重傷だ。はやて、すまないがはやての服をこの子に貸してあげてくれないか？」

「どないしたん！？この子服ないん？」

「・・・理由は分からないが、服には見えないほどボロボロだったから捨てた。おそらく彼女は身寄りもなくフラフラとしていたんだろう。」

ウソだ。
もともと着ていなかった、何て言えばあらぬ誤解を生む気がした。
我ながら、テストが赤点だらけのオレにしては短時間でよくこんな出来のいい嘘が思い浮かんだなと思う。

「わかったわ！ちょっと待っとき！」

車いすとは思えないほどの早いスピードで、はやては部屋を出て自室へ向かった。

第16話：気高き犬と少女なの？

「うぅ・・・」
「あ、起きたん？」
ここは・・・？
「大丈夫？体、なんともない？」
「・・・は、はい・・・」
この人だれだろう・・・？
・・・見たことない所。どこだろう・・・
「ツナ～。この子起きたでー！」
・・・？
なにが何だか分からない。
「何があったか知らんけど、もう心配ないけんな。車椅子の女王（あくまで自称）ことはやてちゃんが守ったる。」
「え・・・」
だれなの？
それに、体が動かない・・・
！だれか・・・来た・・・？
「・・・はやて。」
「あ、ツナ。と、スイクンちゃんにイーブイちゃん。おはよう。」
「ブイっ！」

「おはよう、はやて。」

・・・？

変わった犬・・・。

「目が覚めたのか。よかった。」

「・・・だれ・・・？」

茶髪にキレイな目をした男の子が話しかけてきた。

・・・優しい感じがする。

「・・・オレは、沢田綱吉。ツナでいい。」

「ツナ・・・さん？」

いい名前。

「彼女が、この家の主人・・・」

「八神はやていいます。好きなだけゆっくりしていきや。」

はやてさん・・・。

そこまで聞いた私は、いつまでも寝てちゃいけないと思ってその場に体を起こした。

ツナさんが優しく手伝ってくれて、最終的にソファーに座らせてくれた。

「わっ・・・！」

「ブイブイっ！！」

急に何かが私のほっぺたをなめた。

ツナさんに聞くと、イーブイちゃんって言う子犬だって教えてくれ

た。
そのツナさんの側から離れない青い生き物が、スイクンちゃんっていう子犬なんだって。

「ところで・・・おなまえなんていうん？このままやと何て呼んでいいか分からへんし・・・。」
「・・・わたし、は・・・・」

名前・・・？
わたしの、名前・・・・・・・

「わから、ない・・・」
「えっ？」

なにも、何も思い出せない・・・。

「じゃ、じゃあ親御さんは？おるんやろ？」
「・・・・・・・・・・・・ごめんなさい・・・。」

なにもわからないなにも・・・オモイダセナイ
わたしは・・・・・・ワタシハ・・・ダレ？
ココハドコ？
ワタシハ、ナニ？

「わたし・・・は・・・！」
「落ち着け。」

ふわっとなにかが私を包んだ。
とっても温かくて、優しい。
全部、こんな私の何もかも包んでくれる。そんな感じ。

「ツナ、さん・・・」

知らぬ間に流れていた涙をあわててツナさんの胸の中でぬぐった。

「お前の名前はアリシアだ。」

「？・・・わたしのこと、しってるの？」

でも、ツナさんは首をゆっくりを横に振った。

名前だけしか分かんないって。

「ゆっくり思い出せばいい。」

「・・・うん。」

顔をあげるとはやてさんや子犬達がこっちを見て微笑んでいた。

「八神家はアリシアを歓迎するで！」

「・・・オレは居候のはず・・・！？」

瞬間、はやてさんがツナさんの首に手をまわしてグイッと引きよせた。

すごい力。

「同じ屋根の下暮らしてんのやから家族や。もちろんアリシアちゃんもな。」

――私は知ってる？

この温もりを。“家族”を・・・？

・・・わからない。

でも。

「・・・そうだな。」

何もわからない私だけど、この優しい人たちの役に立ちたい。
おそらく私を助けてくれたのはこの人達なんだって思うから。
心の温かさを教えてくれたから。

「よろしくおねがいします！」

「じゃあこれからは、ジュエルシードの位置特定はこちらでするわ。場所が分かったら、現地にとんでもらいます。」

「「はい！」」

今現在なのは達がいるのは管理局艦船『アースラ』。
私とユーノくんは時空管理局に保護兼協力している形になっています。
さっき私たちに指示を飛ばして、現在抹茶に大量の砂糖を入れているのは・・・ここの艦長でありなのはとフェイトちゃんの戦いを止めたクロノくんの実のお母さん、リンディ・ハラオウンさん。

「・・・。」

（ちょっと砂糖入れ過ぎなの・・・）

砂糖大さじ2杯では飽き足らず、おまけにミルクまで入れた。
相当な甘党だ・・・。

（あっ、そうだ。）

えーと、なんでなのは達がこんな所にいるかと申しますと・・・。
クロノくんにジュエルシードの取り合い止められた後、フェイトちゃんは逃げちゃったんだけど私とユーノくんはここ『アースラ』に連れて来られまして。
軽い事情聴取の後にジュエルシードの件からは手を引けって言われたんだけど、やっぱり諦めきれなくて。最後までやり遂げたかったんだ。
フェイトちゃんとの事もあったし・・・。
だからお母さんに話せることは全部話した上で、ここに来たの。
この件が片付くまで『アースラ』にいること。これが私たちが協力させてもらうための最低条件だったから。
余計な心配をかけたくなかったからお母さんたちにはなるべく本当のことを言った。
・・・もちろん、魔法のことは秘密だよ。

「ところでなのはさん。学校の方は大丈夫なの？」
「あっ、はい。家族と友達には説明してありますので。」

話せる所まで、ね。

「・・・あ。」

「どうしたのなのは？」

私としたことがうっかりしてた！！

「ゆ、ユーノ君。ちょーっとトイレまでつい来てくれないかな？・・・・・ここじゃ話せないから。」

「うん、いいよ。」

最後の一言は、ユーノくん以外には聞こえないような小声でつぶやいた。

私たちの事情にあの人は巻き込めないかなって思ったの。

だからこっそりと。

「？」

艦長さんが不思議そうにこっちを見てるけど、気にしない！！

気にしちゃダメだよなのは！

私はユーノくんの手を引いて急いでその場を立ち去った。

「あらあら、あの2人仲がいいわねー。ウフフ。」

「そんなことより早くこの書類にハンコ押してくださいよ、かんちょぉー。」

「・・・話って何、なのは?」

周りに誰もいないことを確認。
そして私たちに貸し出されている部屋に飛び込んで少し落ち着いた頃、ユーノくんが口を開いた。

「ツナくんにこの事言ってなかったな~って・・・。」
「あっ、そういえば。」

ツナ君もジュエルシードを持ってるはず。
何故かフェイトちゃんは一般人と勘違いしてたみたいだけど・・・。
たぶんツナくんがバリアジャケット解いちゃってた所に来たからだね。
しかも、ツナくんとフェイトちゃんが顔を合わせたのは後にも先にもあの時だけのはず。

「今から電話してみよっか。」
「そうだね。」

携帯を取り出してツナくんの家にかけてみる。

「・・・もしもし、八神です。」
「はやてちゃん?私、高町なのはです。」

はやてちゃんが出た。
私だって名乗ると、とっても驚いたみたい。

「どないしたん?」
「ツナくんいるかな?ちょっとお話したい事があって・・・。」

「ええよ。ちょっと待っときや。」

しばらくしてからツナくんが出た。
とりあえず落ち着いて話した。

「・・・・・もしもし。」
「ツナくん！なのはだよ。高町なのは。」
「なのは・・・何かあったのか。」

私はこの数日間であったことを話した。
フェイトちゃんのこと。
時空管理局のこと。『アースラ』のこと。
クロノくんに・・・ユーノくんのこと。
ユーノくん本当は人間だったんだって、驚いたことをね。
最後のは別にどっちでもかまわないんだけど。

「・・・。」
「だから、管理局の人に気づかれないようにしてほしいの。ツナくんのジュエルシードが狙われちゃったら困るから・・・だから今は。」

いずればれるだろうし、うまく隠し通せてもいつかはジュエルシードをちゃんと差し出さないといけなくなると思う。
でも、いったん落ち着くまでは迷惑かけたくないから。
・・・ずいぶん自分勝手だってことはわかってる。
それでも今だけは。

「・・・。」
「お願い、ツナくん！！」

これだけはどうしても譲れない。
幼いなりの私の誇りがかかってるから。

「・・・・・・・・わかった。気付かれないようにうまくやる。」
「ありがとうツナくん！！ありがとう。」

さあ、ツナくんの分まで私が頑張らなくちゃ！
まっててねフェイトちゃん。
必ず・・・もう一度。
今度はちゃんと伝えて見せるから。

「・・・いこう、スイクン。」
「いいのか？」

電話を切った直後、ツナはイーブイを撫でながらそう言った。
“イーブイ”という名はこの生き物が自分で名乗ったのだ。
・・・当たり前だがツナやはやてに動物の言葉は分からないのでスイクンを通して知った。
ちなみにはやてはツナが名づけたと思い込んでいる。
スイクンが喋れることを彼女は知らないからだ。

「どこいくの、ツナ？」

と、ツナに後ろから抱きついて来た少女がいた。

アリシアだ。

「ちょっと用事があるんだ。」

「私も行く！」

ツナが子供の扱いになれていたせいもあってか、アリシアは異常にツナに懐いてしまっていた。

子供は敏感だと言うので、もしかしたら彼が大空だと言う事も理由の一つなのかもしれない。

「ダメだ。」

「イヤっ！連れてってくれるまで離れないもん！」

横でスイクンがやれやれとため息をついている。

なだめるの手伝えば？

っていうかツナのことだからいつもスイクンにしてるみたいにハリセンでしばくんじゃ――

「・・・わかった。ケーキでも買いに行こう。」

「ホントに！やったっ！！」

おっ？

「ちょっとまて！私が頼み事した時と大分態度が違うではないか！」

「黙れ犬。」

「いーぬー！」

「お、おのれぇ・・・私は犬ではないっ！！そもそもマグロには言われたくない！」

子供には甘いツナさんでした。

第17話：かる～い（？）魔法のお話なの

「ここから北西に3？だ。」

スイクンの使える魔法は3つしかない。
結界の魔法と探知の魔法・・・そして転移の魔法だ。

「・・・。」

探知の魔法は失くした物探しに便利とかそういうレベル。
おおよそ半径１００m範囲しか探知できないのだ。
なので、彼はヒマを見つけてはちまちまとジュエルシード探索を行っている。

「この辺だ。」
「・・・。」

結界の魔法は、他人には絶対に分からない特殊なものだ。
かけた本人にしか認知できないためジュエルシードを見つけた際には重宝している。
また、内側からの攻撃は絶対に通らない構造になっているため安全である。
ツナが一人だけ8つも持っているのはスイクンのおかげなのである。
方法は簡単。
ジュエルシードを見つけては暴走する前にこの結界で覆っておくのだ。
あとはツナが回収して一件落着となる。
しかしこの魔法、もちろんだがいいことばかりではない。

「私のこの結界は大量に魔力を消費するうえに、最大で3つまでしか出せないのだ。」
「・・・充分だと思うんだが。」

ツナはこういうが結構致命的だ。
なぜならば、直径１０ｍの結界を3つ分程度しか作り出せないのである。
しかも他人から認知できないということは、裏を返せばいざという時にこの結界で身を守った際に怪我が回復するまでは誰にも見つけてもらえないし動けないと言う事でもあるわけで。
また、前述の通り内側からの攻撃には申し分ないが外側の攻撃にはあまり強くない。
どどのつまり、他人に認知できない・数が使えない・外からの攻撃に弱い結界は普通の戦闘で使うには不利すぎるのである。
うまく使えば結構最強なのだが。

「・・・見つけたのは3つ、なんだな。」

最後の転移の魔法は、簡単に言うとドラ●もんのどこ●もド●的なノリで使う。
もちろん、こんなノリで使うのはスイクンだけだ。
たぶんおそらく。

「うむ。早く封印してくれないと私の魔力が持たん。今現在ギリギリのパワーで結界を展開している。」

今2人は何をしているのかというと、その結界のうちのひとつの場所へ向かっているのだ。
探知できないとはいえ、さすがにかけた本人には結界周辺の情報ま

で分かるらしい。
同じ手口でなのは達が知らないうちに8つも集めたのだ。
話が長くなったが・・・
まあ一言で言うと。
こういう時には、べんりべんり♪、ということだ。

「ここだ。いつも通りで構わないぞ。」
「わかった。・・・スピラーレ、セットアップ。嵐型（タイプ・ストーム）Ｖｅｒ．ボンゴレ。」
「Ｓｔｉａ　ｉｎ　ｐｉｅｄｉ　ｄａ，　ｐｒｏｎｔｏ．　Ｍｅｔｔａ　ｓｕ!」

スピラーレは、この発動前は二枚貝の石みたいなデバイスの名前だ。
オレが決めた。
センスがなかろうと異論は認めない。
・・・・・言われるともれなくオレがへこむ。
ちなみにバリアジャケットのデザインはローザの時と同じ。
喋る言語はイタリア語。・・・たまには日本語も喋ってほしい。

「ほう。」
「・・・嵐の弓矢（アーチェリー）。」

現れたのは、赤色のアーチェリー。日本風に言うと弓矢。
嵐のボンゴレリングをアップデートしたらこうなった。
・・・一応練習はしてきた、つもり。

「ジュエルシード、シリアル“？”・・・封印。」
「Ｓｉｇｉｌｌａｎｄｏ．」

暴走前のジュエルシードを封印する必要があるのかないのかよく分からないが、とりあえず毎回やっている。
スピラーレから放たれた――というかオレが撃った――矢はキレイな放物線を描いてジュエルシードに突き刺さった。
その後はヴィオーラにいつも通り保管した。
ローザで初めて魔法を使った時にそうしたように、ヴィオーラに保存してもらった方が効率がいいと気がついたからだ。
・・・・・悪かったな、気付くのが遅くて。

「・・・３つともこの森で見つかったのか？」
「うむ。比較的近場に合ったぞ。」

・・・。

「もしもだが・・・誰かがうっかり落としてしまったという可能性はないか。」
「無きにしも非ず、だな。」

もしかしてフェイトが落としたのではないだろうか。
原因は全く分からないが、そう考えればつじつまが合う。
海ならともかく、こんな狭い森に３つも固まっているなんておかしい。
後で回収しようとしていたが、その前にスイクンが見つけてしまったのかもしれない。

「可能性はある。確かにこれはあまりにも不自然だ。」

落し物なら落し物で、それもまた不自然だが。

「・・・ナッツ。」

「ガウ♪」

ヴィオーラからナッツが飛び出し、そのナッツの足元に魔法陣が浮かんだかと思うとナッツの姿が消えた。

「なにをした？」

「いや・・・ナッツをフェイトのもとに向かわせただけだ。」

いわゆる情報収集だ。

「時空管理局でも見つけられない人物をどうやって探すのだ。」

「こんな時のために彼女のデバイスにこれを仕掛けておいた。」

「仕掛けた？」

「・・・そんなに驚くことじゃないだろ。」

ま、まあいい。

ツナが何気なくすっと右手を開くと、そこには親指大の氷の粒があった。

不自然なことにこの氷は全く溶けていない。

「なんだこれは。」
「オレの死ぬ気の炎を凍らせたヤツだ。・・・大空の調和で、自然に仕込むことができる。」
「なるほどな。」

仕込んだ部分とその周りを調和させることで気付かれることなく今も役目をはたしているのだろう。
あのライオンはツナの炎の反応を追いかけているのであろうな。

「・・・アリシアが息を吹き返したのも、大空の調和で彼女の魂が自然に戻って来たからじゃないか？」
「うむ。魂と肉体のどちらかが欠けていれば不可能だったからな。」

簡単に言うと魂が再び肉体に舞い戻る際に、大空の炎の効果で違和感をすべて調和させて2つを結ぶクッションの役割を果たしたのだろう。
いや、そうするように言ったのは他でもない私なのだがな。（どやっ

「・・・・・誰にどや顔してるんだ。」
「ほっとけ。」

そうこうしているうちに全部回収し終わったな。
うむ。
先程のナッツの件といい、さすがだな。
伊達に5年近くもイタリアンマフィア（しかも世界最大規模）のボス候補してなかったということだな。

「ところで私の髪、昨日の夜に少しストレートにしてみたのだがどうだろうか？」
「・・・いいんじゃないか（どうでも）。」

案外裏では辛辣なツナさんでした。

第１８話：アリシアの寄り道珍道中なの（前書き）

アリシア可愛いよアリシア。

というわけで今回はゆるーい小話です。

第１８話：アリシアの寄り道珍道中なの

「～♪～～♪」

はじめまして！アリシアです。
あいさつは元気よく！これ、お姉ちゃんが決めたうちのモットーです。
ちなみに、お姉ちゃんからもらった大きなぼうしが今日のじまんだよ。
今日は、お兄ちゃんとお姉ちゃんのばんごはんを買いにブイちゃんと『すーぱー』に来ました。
ええっと、『おとうふ』と『おみそ』と『ぱすた』と『めんたいこ』をたのまれました。
なにつくるのかな？

「ブイっ。」
「なあにブイちゃん？・・・あ、ほんとだー。なにしてるのかな？」

『すーぱー』にいくのとちゅうの公園で、だれかがおはなししてた。
なんのおはなしなんだろ？
ちょっとぐらいよりみちしてもいいかな。

「おかしいなぁ。ユーノくん、この辺でジュエルシードの反応があったんだよね？」
「そのはずなんだけど・・・なのはも何も感じないんだよね・・・」
「もしかしてもうツナくんが拾っ「おねーさん、お兄ちゃんを知ってるの？」うわぁっ！？」

突然、大きな帽子を目深にかぶった見慣れない女の子が話かけてきた。
少女の足元には――これまた見かけない子犬がくっついていた。
あうう・・・。心臓が潰れるかと思うぐらいびっくりしちゃった・・・。

「だ、だれかな？」
「わたし？ひ・み・つ☆」
「！」

この子・・・できるっ！！

（なのは？どうしたの？）

うーん、おどろかせちゃったかな。

お姉ちゃんはあんまりおどろかないんだけど・・・おかしいなー。

「おねーさん、ねずみさんとおはなししてたの？」

（ねずみ・・・）

「ええーと、（今の話聞かれてないかな）あなたはどこの子？」

むうっ。

みんなそうやってわたしを子どもあつかいするんだ。

人をみためではんだんしちゃだめなんだよ！

ねっ、ブイちゃん。

「おねーちゃんこそなにしてるの？『じゅえるしーど』ってなあに？おかし？」

「えっ！！ええっと・・・」

えへへ～。

おねーちゃんびっくりしてるねー、ブイちゃん。

わたし、おぼえるのはとくいなんだよーだ。

子どもだからってなめちゃだめだよ！

「いいよ、お兄ちゃんに聞いちゃうもん。」

「へ？」

さらに目をまんまるにしておねーさんがおどろいてるね。

あっそうだ、『すーぱー』しまっちゃう！

いそがなきゃ！

「じゃあね、おねーさん。ねずみさんにヘンなコトされちゃだめだよ！いこっ、ブイちゃん♪」

「ブーイっ！」

「し、ししし、しないよっ！！」
「ちょ、ユーノくん！？」

あれっ？いまのは？
公園からでようとうごいてたわたしの足が、はんしゃてきにぴたっと止まった。
だって、ねぇー。

「ねずみさんがしゃべった！」
「「あ。」」

ん～。
でも今はお兄ちゃんたちにたのまれた『すーぱー』の方がだいじだし・・・。
ううん・・・きになる・・・。
でも・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「・・・ブイちゃん、『すーぱー』いこっ！じゃあね、おねーさんにしゃべるねずみさん！」
「ブイブイっ！」
「ぼ、ボクは鼠じゃありません！！」
「まーまーｗｗ」

さっきまでおどろいていたのがウソのようにクスクス笑うおねーさんと怒るねずみさんを公園にのこして、わたしとブイちゃんは『すーぱー』にむかいました。

「これでぜんぶだよね？」
「ブイっ。」
「よし、じゃあかえろ～！」

買ったモノが入っているふくろはわたしが持つにはけっこうおもくて、ちょっとあるいただけでつかれちゃった。
ううっ。
『おみそ』おもいっ！！

「ブイ～・・・」
「ふぅ・・・。だいじょーぶだよ。ちょっときゅうけいするだけだからね。」

えへへってブイちゃんと笑ってると、きゅうにからだがおもくなってきた。
これはあぶないかも・・・。
でももうすこしだし、いえでお姉ちゃんが待ってるはずだからいそがなきゃ！

「ちょっと、このガキんちょ。あんた何やってんの？」
「ふらふらしてるけど大丈夫？」

いすにすわって休けいしていたわたしに、公園であったおねーさんとおんなじくらいの二人ぐみが声をかけてきた。
なんでだろう？

「おねーさんたちだれ？」
「あたしはアリサ。こっちがすずか。」
「よろしくね。あなたは？」

お名前いわないとダメかなぁ。
じぶんでもよく分かってないからいいにくいんだ。
・・・。

「えっと・・・・・・。」
「ったく、自分の名前くらいいえっつーの！」
「ちっちゃい子相手に怒っちゃだめだよアリサちゃん。」
「うっ。」

この人コワイ。
早くかえった方がいいかな。

「あ、アリサさんにすずかさん！またこんどね！」

わたしは今だせるさいこうの早さではしってにげた。
もちろん、重いふくろをかかえて。

「ちょっとまちなさいよ！」
「またねー。」

けっきょくなんで話しかけて来てくれたのかは分からないけれど、
ねはいい人だったと思うよ。
わたしがほしょうするもん。
さいごにわたしはもういちどふりかえった。

「おねーさんたち、また会おうね。」

「き、気をつけなさいよね！」
「頑張ってねー！」

えへへ。
ついにげちゃったけど、やっぱりいい人だね！

「うぅ～ん・・・」
「ブーイ～？」

なんだかきゅうにつかれちゃった・・・。
どこかで一休みしていこうかな。
『すーぱー』にたのまれる前に、お姉ちゃんからおこづかいもらったんだ。

「ふぅ・・・あそこのおみせで、お茶のんでいこっか？」
「ブイっ！」

“翠屋”とかかれてて読めなかったけど、お茶をのむところだってことはわかったんだよ。
すごいでしょ。
はいってみよーっと。

「こんにちはー！！」
「あらあら、いらっしゃい。小さなお客さんね。」

「いらっしゃい！なににする？」

おみせには、お茶だけじゃなくってケーキもならんでた。
おいしそうだけど・・・

「５００円でたりるかな。」

「ブイ～。」

「お父さんお母さーん、ってお客さん来てたのか。」

きゅうにおみせにはいってきたのは、めがねのおねーさん。
うしろにはかおの似たおにーさんがいる。

「今はこの女の子だけだから大丈夫だよ。」

「別に急がないからいいよ。」

ええっと、なにたべよっか。
見たことないのばっかりだね、ブイちゃん。

「ブイー。」

「んー。じゃあ、この『しょーとけーき』ひとつください！」

「はーい。そこのテーブルに座って待っててね。」

言われたつくえにすわると、さっきのおねーさんたちがこえをかけてきた。
たぶん、ここのおみせのひとの“むすめさん”たちなのかなー。
ほら、お父さんお母さん、っていってたから。

「あなた、おつかいの途中？」

「うん。これでお姉ちゃんがよるごはん作るの。」

「こんなに小さいのに偉いなぁ。がんばれよ。」

「えへへ～。」

子どもあつかいされたのはむっとしたけど、ここの人がブイちゃんにとくべつにクッキーくれたからゆるしちゃう。
わたしそんなにこころせまくないもん。
それにしても、ケーキっておいしいね！
こんどお姉ちゃんにたのもーっと。

「おそくなっちゃったね。」
「ブイっ。」

なんだかさっきからあたまいたいから早くかえらないと。
お兄ちゃんとはなれすぎたのかな。

「うーっ。」
「ブ、ブイっ！？」

あたまくらくらする。
もうちょっとでおうちにつくのに・・・！
あと、５ふんくらいなのに。

「もう、だめー。」
「ブイーっ！！」

たおれそうになったそのとき、なにかがわたしをささえてくれた。
このあったかいかんじは・・・

「お兄ちゃん？」
「アリシア、イーブイ、こんな所で何してるんだ。」
「お姉ちゃんにたのまれて『すーぱー』に行ってたの。」
「ブイ！」
「・・・そっか。がんばったな。」

わたしのあたまをやさしくなでてくれた。
そのとき、お兄ちゃんのほのおがわたしにながれこんでくるのがわかった。
わたしね・・・お兄ちゃんのほのおでいきてるの。
これがないとわたしの『たましい』と『からだ』がはなればなれになっちゃって、わたし、しんじゃうんだよ。
だからね、ナッツくんがそばいないときにお兄ちゃんとはなれすぎちゃだめなんだって。
スーちゃん（※スイクンの事）がね、いってたの。

「魂は、肉体から離れるとすぐに消滅するか転生するためにいなくなる。この娘の場合おそらく、自分が死んでしまったあとの荒れに荒れている母親が心配で成仏出来なかったのだろうが・・・それを忘れてしまった今、もし一度でも肉体と魂が離れてしまえば次は二度と生き返らないだろうな。」

って。
むつかしくてよくわかんないよねー。

「帰るか。」
「うんっ！！」

スーちゃんのせなかにのっけてもらって、おうちにかえった。
おもいふくろはお兄ちゃんがもってくれたんだよ。

はじめてのおつかいは、いろんなひととであえたよ。
こんどはいっしょに“翠屋”にいこーね！
お兄ちゃん、お姉ちゃん。

第１８話：アリシアの寄り道珍道中なの（後書き）

山本「久々だな！」

ヴィータ「ったく、どうなってんだよ。」

山本「今回は、八神家の人々？を紹介しちゃうぜ。」

ヴィータ「あたしらはまだだけどな。」

山本「それ、ネタばれなのな。」

【イーブイ】

作品：ポケットモンスター

一応子犬ということになっている。
気がつくと異世界にいたようだ。
アリシアの事が気に入っていて、いつもそばにいる。

【スイクン】

ヴィータ「こいつは説明不要だろ。」

【沢田綱吉】

山本「ツナもいわなくていーよな！」

【八神はやて】

ヴィータ「はやてもいいよな。」

【アリシア】

作品：魔法少女リリカルなのは

ツナさんのチート能力で息を吹き返した女の子。
残念ながら、今は記憶がないため生き返る前のことは覚えていない。
そのうち思い出してくれるはず。

ヴィータ「って、結局2人しか紹介してねーじゃねーか！」

山本「まーまー。いいじゃねーか！」

ヴィータ「ふん。じゃあまたな。」

山本「あり？もうおわり？」

第１９話：いろいろな思いなの

なのはが管理局と行動するようになって１０日。
この１０日間で色々なことがあった。
・・・うまく話せるかどうかは分からないが。
そこから分かったことを今回は話そうと思う。

まずなのは達。
あれから何回かフェイトというもう一人の魔法少女とぶつかった。
昨日も会い、共闘したのちなのは自身の想いを伝えてみたそうだ。

『フェイトちゃん。お友達になりたいんだ。』

ただ、それが彼女に届いたかどうか・・・自信はないとも言っていた。

ちなみに、その時のジュエルシード６つのうち３つは管理局の手にわたった。

次にフェイト。
彼女の名は以前なのはから聞いた。
・・・名前なんて誰から聞こうが物凄くどうでもいいと思っただろ、今。

で、なのはが管理局員のエイミィという人に聞いたところによると。
彼女の母親、プレシア・テスタロッサが今回の事件の真の首謀者のようだ。

フェイトにジュエルシードを集めさせているのも彼女。
彼女は以前中央技術開発局で働いていたそうだが・・・違法物を使用して大事故を引き起こしてしまい、地方へ異動になった経歴を持っている。
その時に大分もめたらしいが、そのあとの数年間は技術開発に携わっていた。
しかしその後行方不明になってそれっきりらしい。

個人的にそこまでで引っ掛かることがある。

本当に“プレシア・テスタロッサはフェイトの母親なのか”ということだ。

スイクンと見た、アリシアがいた研究室の様な場所を思い出す限り・・・そうは思えない。
何か特別な秘密がありそうなんだ。
なによりオレの勘がそういっている。

それとオレ達。
はやてもアリシアもイーブイもいつも通りだ。
一つ違うとすれば、アリシアがやけにオレにくっついてくることぐらいか・・・？
そんなに重要なことじゃないな。

・・・・・・・ああ、スイクンか。
少し前よりちょっと神経質になったか。

ただ、人がゆっくりお風呂に入ってる時にアリシアとイーブイを引き連れて乱入してくるのはやめてほしい。それだけは勘弁。
・・・ロリコンじゃないからな。

あとは、管理局か。

残りのジュエルシードを見つけようと躍起になってるな。
・・・絶対不可能だろうな。
ここにあるから。

そういえばアルフ――フェイトの使い魔――は大丈夫だろうか。
怪我をして倒れていたところをなのはの友人が偶然発見したという。
その友達の家にいると言っていたな。
・・・行ってみるか。

彼女には聞きたいことがある。

数時間後。
オレははやての車いすを押しながら、大きなお屋敷の入り口にいた。

「・・・。」
「ガウッ。（ここか。アルフとやらがいるのは。）」
「楽しみだね、ブイちゃん！」
「ブイブイっ！」
「みんなちょっと落ち着きや、ツナが引いてるやん。」

何でついてくるんだろうか。
アルフの飼い主という設定で来ているから、はやては分かる。
そもそもオレが彼女の車椅子を押してきたんだ。
でも他は呼んでない。

「いらっしゃいませ。あなた方が高町様からお話しいただいた、八神様とご家族の方ですね？存じ上げております。」

突然開いた門に執事らしき人が立っていた。

服装がちがっていたなら、ただのとても人のよさそうなおじいさんに見える。
というかいつの間に開いたんだ・・・。

「そうです。うちのアルフが3日前にいなくなって・・・ずっと探してたんです。そしたらここで、アルフに似た大型犬を預かってくれてるゆうの聞きまして。」

素晴らしい嘘だな。
今びっくりした。

「さようでございますか。それでは、アリサお嬢様がお待ちですのでご案内いたします。私について来て下さいませ。」
「すみません。おじゃまします。」

この間、めずらしくアリシアがおとなしくしていた。
イーブイはいつの間にかはやての膝におとなしく座っている。
広い広い庭を抜けたところにそれは立っていた。

「すっごい、おっきぃ～・・・」

アリシアが一番に驚いた声をあげた。

「けがの手当てまでしてくださって・・・ほんまにありがとう。アリサちゃん。」
「べ、別にお礼言われるほどのことじゃないわよ。」

こうして、金色の魔導師の使い魔と大空が出会うことになった。

第２０話：金色の使い魔の心なの

（・・・アンタが高町なのはの友達かい？）
「ああ。沢田という。」
（おぼえておくよ。）

はやてがここの主人だというアリサという少女と話している間、オレはついてくると言って聞かなかったアリシアとイーブイを連れてアルフのもとを訪れた。
彼女は小さい檻の中でうずくまっていた。

（あたいの声が聞こえるって事は、アンタ魔導師なんだね。）
「一応。」
「カッコいい犬さんだね、ブイちゃん！」
「ブイ。」

横で話している一人と一匹はこの際スルーしておく。

（話はなのはから聞いた。）

ここからは誰かに盗み聞きされてはまずい内容なので、ツナも念話に切り替えた。

（そうかい。でもその前に聞いておきたいことがある。）
（なんだ。）
（あのフェイトを幼くしたような子・・・何者だい。）

もちろんアリシアのことだ。
彼女の主人であるフェイト・テスタロッサに瓜二つだったため、驚いたのだ。
話題に上っているとは知らない当のアリシアは、興味津々でアルフの尻尾を弄んでいる。

（彼女のことはもっと時間がある時に詳しく話す。今はフェイトのことが先だ。）
（・・・そうだね。で、何が聞きたいんだい。）

ツナがどうしても聞きたかったこと。それは。

（フェイトは・・・フェイト・テスタロッサは、本当にプレシア・テスタロッサの娘か？）

少なくともアルフはそう聞いているし、フェイトもプレシアの事を「母さん」と呼んでいる。
この男は一体何の話をしているのか？
アルフにはさっぱり聞かれている意味が分からなかった。

（どういうことだい。）
（いや・・・なんでもない。わからないならいいんだ。）

ツナはそう言って一瞬だけアリシアの方を見た。
彼女は相変わらずアルフの尻尾に夢中だ。

（フェイトは今どこにいる？）
（たぶん、まだあの女のところだよ。もしかしたらもうこっちに来てるかもしれない。）
（・・・ジュエルシード集め、か。）
とたんにアルフの顔が苦痛にゆがんだ。

（あの女！自分の娘をなんだと思ってるんだ！あんなに健気で優しい子にどうしてあんな事が出来るんだよ！！）

あんな事とはフェイトに対する暴力だ。
アルフはそれをプレシアに訴えたが聞き入れてもらえず、逆に攻撃され重傷を負いながらここまで逃げてきたのだ。

（最初は他より厳しい母親なんだって思ってたけど、それにしてもやり過ぎだ！これじゃフェイトがあんまりだよ・・・！）
（・・・。）

大型犬状態のアルフの瞳から、涙がこぼれる。

（おねがいだ、フェイトを・・・あの子を助けてやっとくれ！あの子は何にも悪くないんだよ。全部あの女のせいなんだ！あの女のせいでっ！！）
（アルフ・・・。）

ツナにはアルフの悔しさと悲しさがひしひしと伝わってきた。

「犬さん、泣いてる。悲しいの？痛いの？大丈夫だよ、私がお兄ちゃん達と一緒にここにいてあげる。だから泣かないで。」

「ブイ！」
「ガウ（あんたたち・・・）。」

アリシアがそう言った。
優しい少女。
アルフはにはその姿がフェイトに重なって見えた。

（・・・管理局はプレシアのもとに向かったはずだよ。なのはって子も。）
（わかった。フェイトは必ず助ける。）
（たのんだよ・・・。）

初対面の子に向かって私は何を言っているのかと、アルフは思った。
でも言葉を撤回したりはしなかった。
ツナから何かを感じたのかもしれないし、ただの気の迷いか何かだったのかもしれない。

『それでもあたいは、なのはと沢田を信じてみたい。』

アルフは檻の中に丸まり、静かに目を閉じた。

第２０話：金色の使い魔の心なの（後書き）

短ッ！しかもよく分かんねーヨ。
ですよね、すいません。

次回はいよいよプレシアさんのとこに殴りこみです。
スイクンの怒りのわけがようやく分かるかもしれません。

第２１話：伝えられた真実なの

「私の勝ち、だね。フェイトちゃん。」
「・・・そうみたい・・・。」

私とフェイトちゃんは一騎打ちをした。
何とか勝ったのは私で、今はボロボロになって海に落ちてしまったフェイトちゃんを助けた所。

「無事でよかった。」
「・・・。」

これでフェイトちゃんも無事保護できたしジュエルシードもゲットしたしで一件落着！
・・・のはずだった。

「！！」
「フェイトちゃん？」
「くる・・・！」
「ほえ？」

フェイトちゃんの言葉にハッとして雲を見上げると、光る雷とその先に消えていくジュエルシード。
慌てて雷を避けた時には、すでにジュエルシードは消えた後だった。

「なのは！急いで管理局に戻ろう！その子も連れて！」
「わかったよ。（・・・少しの間管理局の通信を妨害できる？）」
（！！・・・わかった。３０秒も誤魔化せないからいそいで！）

（オッケー！）

心の中でそんな会話を交わした後、すばやくフェイトちゃんを近くの茂みに投げ込んだ。
ただ投げ込んだわけじゃない。
きちんとフェイトちゃんを守る結界を張って、だよ。

「ちょ～っと痛いかもだけど、がまんしてねフェイトちゃん！」
「きゃっ！？」

フェイトちゃんが茂みに隠れたのを確認して、急いで魔法で自分の服を少しボロボロにする。
とっても単純な偽装工作。

『どうしましたかなのはさん！？何かあったんですか？』
「あっ・・・はい。ごめんなさい！」

どうやらユーノ君がうまくやってくれたみたい。
こっちのごまかしも完璧なの。

「すみません。フェイトちゃん・・・まだ逃げる体力残してたみたいで・・・」
『・・・そう。手負いですからそちらは後からでもどうにかなるでしょう。ジュエルシードもプレシアのもとへ渡ったようですし、フェイトさんは今だけ見逃します。なのはさん達は一度こちらへ帰還してください。』
「はい。」

ごめんなさい、リンディさん。
フェイトちゃんには今すぐ会わなければならない人がいるんです。

真実をもっとショックの少ない方法で知る必要があるって、綱吉くんが言ってたから。
私もユーノ君もまだその真実を知らないけれど・・・きっとこの後プレシア・テスタロッサの口から聞くことになるんだと思います。

（いこうか、ユーノくん。私の気持ちはフェイトちゃんに伝わったかな？）
（なのはなら伝わったはずだよ。・・・きっと。）

だから今だけ、見逃してあげてください。
フェイトちゃんには笑っていてほしいから。

しばらく森の中でアリシアとアルフとで待機していると、桜色の球体を引きずりながら2匹が帰ってきた。

「ありがとう。スイクン、イーブイ。」
「ブイっ！」
「当然のことだな。」
（フェイトっ！！）

隣で身を乗り出すアルフをなだめているアリシアを確認した後、なのはの結界を破壊してスイクンの結界の中にいるフェイトを解放した。

ちなみにその結界の中にはオレ達全員がいる。

「？お兄ちゃん。この人・・・あっ・・・！」

「アリシア？」

何かを言おうとフェイトを見たアリシアの声が急に途切れた。

まるでビデオテープを巻き戻している最中のテレビみたいな瞳のまま動かない。

「・・・。」

「んっ・・・・・アルフ・・・？」

「フェイトっ！ごめんよフェイト！！」

動かなくなったアリシアとは対照的に、茂みに着地した時の衝撃か何かで気を失っていたフェイトが目を覚ました。

そのフェイトに誰よりも先に、人型になったアルフがとびついた。

「ごめんよフェイト！辛い思いさせちまって・・・！」

「アルフ・・・。アルフは悪くないよ。・・・母さんは？」

「もうあんな女のいいなりになんかならなくていい！いいんだよ！！フェイトはフェイトとして自由に生きるんだ！！」

痛々しいフェイトに泣きつくアルフ。

とても見ていられる状況じゃない事だけは確かだ。

もっとも、すでにスイクンとイーブイが治療を始めているから大丈夫だろう。

・・・器用すぎてみてて気持ち悪いな、この２匹。

「お兄ちゃん。私はこのまま“お兄ちゃん”について行ってもいい？」

「アリシアの好きなようにすればいい。」
「ありがとう私の大好きな・・・お兄ちゃん。」

大分恥ずかしい事を唐突にアリシアに言われた。
どうやらフェイトを見たことでアリシアの復活前の記憶が戻ったらしい。

「お兄ちゃん、私は母さんを止めたい。そして真実をフェイトにここで打ち明けたい。」
「わたし・・・？あなたは、いや・・・あなた達は誰？」
「フェイト、沢田はあたしたちの味方だよ。」

そう言えば自己紹介も何もしていなかったな。
これじゃあアヤシイ人に囲まれたように見えるか。
警戒して当然だな。

「・・・オレは沢田綱吉。なのはの友人だ。」
「なのは・・・？」
「フェイトを追っかけまわしてた白い魔導師の子だよ。」

それだけ聞いたらなのはがストーカーしてたみたいだぞ、アルフ。

「私はスイクン。“一応”、そこのツンツン頭の使い魔だ。そしてこっちが賢いペットのイーブイ。」
「誰がツンツン頭だ、誰が。」

「ブイ～。」

少し嫌味な言い方にイラッと来たが今は抑えておく。
そこまでオレの堪忍袋は狭くない。

「私の名前はアリシア。アリシア・テスタロッサ。今回の事件の黒幕・・・プレシア・テスタロッサの実の娘です。」
「!?」
「テスタロッサ・・・だって?どういうことだい!」

やはりそうか。
たしかユーノが盗み聞きしたところによると、最初の事故を起こした時にプレシアの一人娘が死んだそうだ。
アリシアがその娘で間違いない。
この話は、なのはにはフェイトと戦う時に迷わないようにするために伝えていないとユーノが言っていた。

「どういうこと・・・?だって、私の記憶には私と母さんの二人だけで・・・!」
「母さんと“アリシア”の二人だったんでしょ?」
「・・・そ、そんな・・・。」

アリシアはすべてを知っているはずだ。
魂だけになったあともずっと、母親をそばで見続けていたのだから。

「あのねフェイト。母さんはね・・・事故で死んだ私の代わりに私そっくりの容姿と私の記憶を入れた、慰めばかりの人形と言う名の人造生命体を生み出したの。それがあなたなんだよ。」
「う、うそだ!」
「フェイトと言うのもその計画につけていた名前だったの。母さん

はそんなあなたが・・・大嫌いだっていってた・・・。」
「そんな・・・母さんが・・・」

アリシアはなるべく優しく言ったみたいだがフェイトにしてみればショックが大きいだろう。
実の母親だと思っていた人に『大嫌い』だと思われていたなんて、誰でも傷つく。
救いは直接本人に言われている訳じゃない、ということか。

「うっ・・・ふぅっ・・・」
「フェイト・・・!」
「でも聞いてっ!!生まれ方が違ってても、フェイトは私のたった一人の姉妹なんだよ。・・・私の可愛い大好きな妹なんだよ!」
「!!!」

幼い姿のままの姉が、大きく育った妹をふわっと包み込む。
まるで大きくなった娘を優しく抱擁する母親に、アリシアが見えた。

「おねえ、ちゃん・・・!うわぁぁん!!」
「よしよし。辛かったね、痛かったね、さみしかったね。でもこれからはお姉ちゃんもお兄ちゃんもいるからね!フェイトは一人じゃないよ!ほら、アルフもいるんだよ。」
「うん!」

感動のシーンの所悪いんだが・・・オレ、勝手にフェイトの兄にされてないか。
おかしくないか?アリシアの時点で。

「あきらめろ。アリシアがお前を実の兄の様に慕っている時点でフェイトの事は決定事項だ。」

「ブイブイっ。」
「・・・わかった。好きにしろ。」

元の世界でこういうことになれていてよかったと思う。
フゥ太、感謝する。

「ねえフェイト。私、これから母さんの所へ行くの。一緒に行く？
もちろん、お兄ちゃんたちも一緒だよ！」
「・・・うん。わたし、母さんときちんと向き合う。後悔したくない。」
「フェイト、ちゃんとついて行ってあげるからね。」
「ありがとう、アルフ。」

覚悟を決めたフェイトとアルフ。
記憶の戻ったアリシアと、彼女に懐いているイーブイ。
そしてオレと、何故かプレシアに対してずいぶん怒っている様子のスイクン。

オレ達はスイクンとフェイト、そしてアルフの転移魔法でプレシアの根城に侵入することになった。
もちろん、管理局に見つからない様に細心の注意を払いながら。

第２１話：伝えられた真実なの（後書き）

スイクンの怒りの理由は次回に持ち越しです。
今回はアリシアがちょっと大人っぽくなったので満足でした。

第２２話：覚悟と選択なの

「・・・あれ？」
「どうしたの、アルフ。」

さあこれから突撃だ！と言う時に、突然アルフが声をあげた。

「あ、あのさ。アリシア・テスタロッサは一度死んだんだろ？それで生き返らせようとしたプレシアが今の今までアリシアの体を保存してたんだよな？」
「そうなの、兄さん！？」
「お兄ちゃん知ってたの。」
「・・・。」

アリシアが知らぬ間にツナを兄さん呼びしてるところはこの際スルーしておくとして。
ツナの返答が曖昧なのはすべてツナの勘による考えだから。
この世界では誰も知らないが、彼には素晴らしい直感力がある。

「だったら、今プレシアの下にいるのはだれさ。自分の娘の体がなくなって気付かない親なんていないんじゃないのかい。」
「・・・。」

そうアルフに問いただされたツナの頬が、ほんの僅かにピクッと引き攣った。
近くで凝視していないと分からないほどに本当に一瞬だった。

「沢田？」

「・・・見れば分かる。」
「はぁ？」

彼がそれ以上喋りたくない風だったので他の者もそれ以上聞かなかったし、なにより足元のスイクンが思いきり殺気を飛ばすので（さっさと行くぞという意）それ以降誰も口を開かなかった。

かくして3人と3匹は、そんな空気の中で転移して行ったのだった。

「・・・そんな・・・！そんなことってないよ！もうやめて！」
「なのは・・・。」

静まり返った館内に響くプレシアの笑い声。
悲痛な面持ちで画面を見やる局員さんたちとユーノくん。
床に崩れ落ちたわたし。

「プレシアは勘違いしているようですけれど・・・彼女が今ここにいないことが、一番の救いでしょうね。」
「そうですね、艦長。」
「フェイト、ちゃん・・・アルフさん・・・！」

聞きたくない。
これ以上フェイトちゃんを苦しめないで。

『フェイト。あなたが生まれたときから私は、あなたのことが大嫌いだった！アハハハハッ！！』

もうやめて。
やめてよ。
人間を・・・フェイトちゃんをなんだと思ってるの？
フェイトちゃんがあなたのお人形？コイツは何言ってる？

（ふざけるのも大概にしてほしいの。）

本当に、この場にあの子がいなくてよかった。
いたらきっとショックで寝込んでた。

「・・・。」

どこで綱吉君がこの事を知ったのかは分からないけれど、おそらくもうフェイトちゃんはこれを聞かされているんだろうと思う。
大丈夫だったのかな。
ううん。
綱吉君ならきっと何とかしてくれてる。
私は信じてる。

（ユーノ君。今の私のやるべきことって何だろう？）
（プレシアの野望を食い止めること、かな。）

そう。
綱吉君がフェイトちゃんを何とかしてくれた。

なら私のやることは一つ。
プレシア・テスタロッサを何とかする。

（待ってて、フェイトちゃん。わたしがプレシアの目をさまさせてみせるよ。）

「・・・。」
「うわぁ・・・。」

目の前には集団で転移してきたとおぼしき管理局の魔導師達が倒れている。
その魔導師達は目の前で次々に退散していく。
外から、倒れた魔導師を救助している局員が何人かいるんだろう。
物陰でそれを見ていたオレ達は、とんでもないものを見てしまった。
床や壁から鎧騎士の様な操り人形――いや、機械人形の方が正しいかもしれない――が無数に出現したんだ。
このままでは先に進めない。

「オレとスイクンとアルフでこの機械人形たちを破壊する。フェイトはアリシア達を守りながら管理局の監視を妨害してほしい。いけるか？」
「まかせな！あたい一人で十分だよ！」
「フッ、貴様一人で出来るものか。こんなもの私の相手にもならん

な。」
「・・・急にどうしたんだ。」
こんな時にケンカするな。
今までもっと仲良かっただろ。

「全力でやってみる。お姉ちゃんは・・・私が絶対に守るよ。」
「だいじょーぶ！いざという時はブイちゃんがいるから無理しないでね、フェイト。」
「ブイブイーっ！」

いつの間にか大型犬の姿になったアルフとどこか物足りなさそうなスイクンは、嬉々として機械人形に襲いかかって行く。
2人ともプレシアへの鬱憤を晴らしているつもりのようだ。
後ろではフェイトが、イーブイを抱えたアリシアを庇うように立ち足元に金色の魔法陣を展開して何やらブツブツと唱えている。

「・・・アリシア。」
「なあに、お兄ちゃん？」

オレは首からさげていたスピラーレをアリシアの首にかけた。
スピラーレと言うのは、嵐のボンゴレリングをアップデートしてあるオレのデバイス。
実は、ナッツがローザのデータも少しだけ読み込ませておいてくれたから杖の形にもできる。
・・・スピラーレをアリシアに持たせておいた方がいいと思ったのは、勘。
なんとなくそう感じた。

「これ、お兄ちゃんがいつも大事にしてるネックレス・・・。いい

の？」
「今はアリシアが持っておいてほしい。何かあった時に妹を守るのは姉の役目だろ？」
「・・・うんっ！」
くしゃっと頭を撫でてやるとアリシアはうれしそうに頷いた。
それを見ていたフェイトの表情も、心なしか少しゆるんだように見えた。

「動くな鉄クズ共。他人を愚弄する主に使える貴様らにそんな価値などありはしない！れいとうビーム！」
「あんたらなんか全員ここで粉々に砕けちまいな！」
スイクンが凍らせて動きを封じた敵を、アルフが粉々に砕いていく。
なんだかんだ言いながら息ぴったりだ。
口が悪いのはそのままだが。

「・・・オレ達も行こう、ローザ。」
「ＯＫ．　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，ｒｅａｄｙ．ｓｅｔ　ｕｐ！」
空色の光が消えた時、目の前に浮かんでいる数えきれないほどの機械人形たちがこちらに狙いを定めていた。

「覚悟はいいか、機械人形ども。」
「ぐあぁぁぁおぉっ！！」

私も何かしないと。
そう思ってユーノ君と廊下を歩いていた。

「あっ、クロノくん！何処行くの？」
「僕はプレシアを止めに行く。死んだものは生き返らないし、失った時間も戻っては来ないことをアイツに分からせてやるんだ。」
「・・・私も一緒に行っていいかな。」
「ボクも行きます！」

過去をどうとらえるかなんてそれぞれの勝手。
でも、そんなことにフェイトちゃんを巻き込むなんて許せない。

「・・・・・・・・・。わかった。」

これがきっと最後の戦い。
この戦いが終わったら、フェイトちゃんは笑ってくれる？

第２２話：覚悟と選択なの（後書き）

・・・じ、次回こそはスイクンさんが怒ってたわけを書きます。
予想外に話が進みませんでした。

第２３話：おわりとこれから

「艦長！」
「どうしましたか？」

つい数分前、プレシアの居城の内部が見えていたはずのモニターのうちの一つが機能しなくなった。
おそらくそれが回復したという報告なのだろうと思っていたけれど、その私の予想は現実と少し違っていた。

「機能しなくなったモニターが回復した、のですが・・・その・・・」
「？」
「み、見ていただいた方が早いかと。」

そしてアップで映し出されたそれは、とても信じがたい光景。
粉々に破壊されたプレシアの機械人形たちと、ところどころ破壊されている壁や床や天井。
この画面に不具合が起きたてから５分程度しか経っていなかったのに。

「クロノ執務管！」
『艦長。僕がついたときにはもう・・・』
「・・・わかりました。とにかく今はプレシアの捕縛を優先させてください。」
『了解！』

一体何が起きているのだろう。

もしや、フェイトさん？
いや・・・たとえあそこにいたとしても、あの手負いの状態ではここまでするのは不可能だろう。

「でも、嫌な感じはしないのよねぇ。」
「艦長！また別のモニターが機能を停止しました！」
「あらあら。」
「ちょっ、艦長！？」

「いくらなんでも多すぎる！」

そう呻く青い犬の眼下には、蟻の大群とも引けを取らないのではと言うほどの機械人形がいた。
大きさは大小様々だがそんなこと彼らにとっては問題ではない。

「ちっ、早くしないと管理局のやつらが来るんだろ？」
「ああ。」
「あたいらは別にみられたってかまやしないさ。でもあんたたち・・・とくにアリシアはまずいんじゃないのかい！」

金の魔導師の使い魔の言う通りで、アリシアが生きていることが知られるのは非常に面倒。
ツナやスイクン、それとイーブイも出来るなら見つかりたくないのだ。

こんな場所に勝手に来ている時点で十分管理局からお咎めを食らうのは目に見えている。
ハッキリ言ってツナはそんな面倒事にわざわざ関わってあげるほどお人よしではない。
もっとも、よく彼の霧の方割れに『甘すぎる』だの『とんだお人よし』などと常日頃から言われてはいたのだが。

「・・・アルフとフェイトはここにいろ。もうすぐなのはが来る。」
「わかった。お姉ちゃん、気をつけてね。」
「後からおいでね。ぜったいだよ？」
「うん。」

姉妹は軽い抱擁と短い別れのあいさつを終えたのち、その片割れは信頼する大空の下へと歩いて行った。

「ぐるあぁぁぁっ！！」
「・・・道を開けてもらうぞ。」

そういった少年の足元には空色の魔法陣が浮かび上がり、彼の愛杖も形を変えていた。
杖の先端には、魔法陣と同じ色の光が集まって来ている。

（ブレイングバスター！）

瞬間集まっていた光が放たれ、光にあたるか掠った人形たちが次々に破壊されていった。

「お兄ちゃんすごーいっ！！」
「時間がない、急ぐぞ。」

その姿を最後まで見送った金の魔導師が管理局を妨害していた魔法を解いたのと同時に、誰かが彼女たちのもとへ走ってきた。

「！！・・・お前は！」
「フェイトちゃん！」
「ここにいたんだ。」

それは、管理局の黒い魔導師と友達思いの白い魔導師達だった。

「ぎりぎり、だね。」
「危なっかしいったらないよ。」
「なんのこと、フェイトちゃん？」
「・・・・・・・・・・なんでもない。」

「母さん！」
「・・・誰だ。」

突然起きた長い地震に耐えながら進んでいくと、ひとりの女が空中にふわふわと浮く巨大な入れ物と一緒に立っていた。
その入れ物はまさしくアリシアが入っていたものだった。

「わたしだよ、アリシアだよ！」
「フェイト、私にそんなに認めてもらいたいの？アリシアはここにいるわ。私を騙そうとするだけ無駄よ。」

「母さん・・・。」

アリシアの後ろにいたツナ達に気づいていないのか、女は淡々と続ける。

「私はアルハザードへ行く!そして今までを取り戻すのよ!アッハハハハッ!!」

「・・・。」

もう彼女には、実の娘の声すらも届いてはいなかった。

否、実の娘すらも判別できなくなっていた。

「フン。まさかあの女、あの氷の塊を自分の娘と勘違いしているのではあるまいな?」

「・・・。」

「ブイ。」

悲しみの表情で俯くアリシアの前にはプレシアがいるのだが・・・

その彼女の後ろに浮かぶビンの様なもののなかでぷかぷかと浮いている少女が問題だった。

彼女はもちろんのことアリシアではない。

浮いていたのは、全くそっくりにアリシアの形に掘られた氷像。

それもペンキか何かで色をつけていることがまる分かりの品だ。

「いい気味だな。人をさんざん馬鹿にした罰だ。」
「・・・馬鹿にされたのか。」
「一度ここを訪れた時に、あの女あろうことかこの私を『糞狸』と罵りおったのだっ！！」
「・・・。（しょうもないな）」

まあそのおかげでアリシアは一命を取り留めた？わけだが。

「私ははじめ、交渉をするつもりでここを訪れた。偶然たどり着いたのがここだっただけだがな。」
「・・・で、罵られて頭に来たお前はオレにあの氷像を作らせたのか。」
「普通の女ならばすぐにこの娘を返そうと思っていた。が、面倒になった。」
（誘拐犯・・・。）
「ブ、ブイ・・・。」

ツナ達がそうこうしていると、再び強い地震が起こった。
はっとして1人と2匹がアリシアの方を見た。

「あの女本気でアルハザードとやらに行くつもりなのか！？」
「こんな所でジュエルシードを発動させた・・・っ！」
「ブイっ・・・！」

一つだけならばツナ達だけでも抑えられたかもしれないが、こんな狭い場所で複数発動させられては止めようにもすぐには止められない。
おまけにその近くには足がすくんで動けなくなったアリシアが呆然とした状態で立っていて迂闊なことはできない。

「お、お兄ちゃん！ゆかが・・・床が！！」
「アリシア！！」

もたもたしていてはアリシアが奈落の底へ落ちてしまう。
が、残念ながらツナの位置からは遠すぎた。
底へ落ちる前に、このままでは彼女はがれきに押しつぶされてしまうだろう。

「アハハハハハッ！！これで・・・これで私たちはアルハザードへ・・・！！」
「やめろプレシア！」
「チッ、愚か者のババアめ。」
「ブイブイーっ！」

こわい、こわいよ。
私死んじゃうのかな。

「そんなのやだよ・・・せっかくお兄ちゃんがくれた命なのに・・・！！」

お母さん。
優しかった母さんは、もうここにはいないのかな。

じゃあ、何処にいるんだろう。

「優しかった母さんのためにも、私は生きたいよ！」

わたしがお母さんの出来なかった事をするんだ。
そして、フェイトをもうひとりぼっちにしないためにも。

「今だけ助けて。お兄ちゃんの力を、貸して！スピラーレ！！」

これってわたしのわがままなのかな？

「Ｓｉ．」

何て言ったのかは分からなかったけど。
機械の物のような声を聞いた直後、私はなぜか安心して意識を飛ばしてしまった。

「アリシア！」

小さく光ったかと思うと、その光は胸元から徐々に少女を包み込んだ。
少女に当たるハズだった瓦礫は、光にはじかれて他の場所へと落ちた。

光はゆっくりと物影の少年たちのもとへ近づいて来る。

「・・・ブイブイっ！」

「大丈夫だ。意識を飛ばしてしまったようだが、目立った外傷はない。」

「そうか・・・。ありがとう、スピラーレ。」

「Ｎａｔｕｒａｌｍｅｎｔｅ.」

優しく自分の首にネックレスを戻した少年に向かって、石の状態のままの彼女は無機質な声で当然だと返した。

「ツナ兄！これは一体・・・？」

「フェイト。・・・プレシアはあそこだ。」

「うん・・・ありがとう・・・。」

姿を現した金色の魔導師は、気を失った自身の片割れと母親を見比べながら一言そう返した。

そして、突然力が弱まったジュエルシードに困惑する母親のもとへと歩を進めるのだった。

「母さん。私は母さんの子なんだよ。だから、私はこの命を捧げても・・・」

「私に従う、とでも言うつもり？」

「・・・あなたがそれを望むなら。」

管理局によって徐々に揺れが収まるなか、それがフェイトの下した決断だった。

「・・・そうね。そうだわ。」

「！・・・じゃあ！」

肯定の意が返ってくる。

そう思っていた。

「でもね、私にはアリシア一人で十分！あんたなんかどこへなりとも消えなさい。」

「か、母さん！！」

同時にプレシアはビンとジュエルシードをともなって枯れ木の隙間に開いた穴へと落下。

必死に手を伸ばそうとしたフェイトだったが使い魔によって、危険だと制止されてしまった。

「アハハハハッ！！私たちの旅の始まりよ・・・アリシア。」

――のちにＰＴ事件と呼ばれるようになるこの一連の騒動は、こうして終結を迎えた。

「フェイトちゃん！」
「なのは・・・。」

2人の魔法少女は約束を交わした。
再び会おうと。
その時は普通の少女として、と。

「いいの？だってフェイトちゃんは悪くないんだから、管理局に出頭する必要なんてないんだよ？」
「ううん。・・・自分の犯した罪は償わなくちゃいけないから。」
「・・・そっか。」

少女は自身のピンク色の髪紐を手渡した。
もう一人も、同じように黒くて細い髪紐を渡す。

「今度会うときまで、失くしちゃだめだからね？」

「・・・なのはもね。」

「・・・。」

結局森に落ちていたジュエルシード3つはフェイトが落としたのかどうかは分からない。
でも、もう彼にとってそんなことはどうでもよくなっていた。

「フェイト。お姉ちゃんはずっと待ってるからね。」
「ブイ！」
「人間と言う生き物はつくづく面倒くさいな。」

彼が旅を始めて最初の事件は、こうしてその幕を下ろしたのだった。

第２３話：おわりとこれから（後書き）

次回からはオリジナルの事件を４～５話ほど書きたいなーと思います。

気が向いた方は、どうぞお付き合いください。

第２４話：命がけの任務なの

――フン、あの魔女では相手は務まらなかったか

――まあよい

――大空に休息なぞ与えぬ

――貴様の力、今度こそこの私に見せてみろ。

「フェイトさん、あなたの罰が決まりました。」
「はい・・・。」

時空管理局の船、アースラの艦長を務めるリンディさんが優しくそう言った。
もともと私の罪は軽いと裁判で言われていたからだろう。
彼女は自分で持ってきた封筒をピリピリと開けて、中の便せんを読み始めた。

「・・・。」
「あの、リンディ・・・さん?」

読み始めた彼女の表情がだんだん険しいものになっていった。
一体何が書かれているんだろう。

「こんなことさせるくらいなら局の雑用を押しつけられた方がましだわ!一体上層部は何を考えているの!?」
「えっ?」

この手紙がきっかけでわたし、フェイト・テスタロッサは思ったよりも早くお姉ちゃんやなのはがいる海鳴市を再び訪れられることとなった。
重大な任務と共に。

「アリシアちゃんの妹さん、帰ってくるんが楽しみやね。」
「うん！早く会いたいなー。」
「裁判とかいろいろあるから1年はかかるんじゃないのか。」
「うえー。カンリキョクのけちー！」

フェイトが管理局に行ってからはや数日。
その日もいつもどおりにはやての作ったご飯をみんなで囲んでいた。

「ごちそーさまっ！お姉ちゃんのご飯、今日もおいしかったよ！」
「・・・ごちそうさま。」
「おおきにな。明日はちょっと豪華にしてみよっか？スーパーのマツタケご飯の素がちょーど安売りなんよ。」

こんな日が続くんだと思っていた。
・・・心のどこかで、そんなはずはない事は分かりきっていたが。

「レマノフの箱・・・ですか。」
「そう。第一級指定のロストロギアよ。本当はこんな大事なことあなたの様な子供に任せちゃいけないんだけど、上からの決定には逆らえないわ。ごめんなさい。」

海鳴市から反応が確認されたロストロギア『レマノフの箱』の回収。それが私に課せられた罰だった。
このレマノフの箱と言うのは、なんでもレマノフ＝アンジェリカと言う人が最初に見つけて回収し損ねて死んじゃったから彼女を悼んでこの名をつけられたという曰くつきなんだとか。

「そのかわり、これがこなせたらすぐに釈放してくれるそうよ。だから・・・絶対に死んじゃダメよ。危険だと思ったら管理局に知らせてくれればいいんだから。」
「・・・はい。」

今回、彼女の指揮する戦艦は修復中のため発進できないし他の戦艦も余裕がないから連絡手段となる機械だけを渡された。

（監視の目が薄いのか・・・好都合。）
「どうかしましたか、フェイトさん?」
「・・・いいえ、なんでもないです。今から出発することは出来ますか?」
「ええ、もちろん。行ってらっしゃい。」

お姉ちゃんに会えることに浮かれて、わたしはこのロストロギアの恐ろしさをろくに調べもせずに管理局から出て行ってしまった。

レマノフ＝アンジェリカという魔導師がなぜ回収できずに死んだのかぐらい調べるんだった。
後になって私はこう後悔することになるなんて微塵も思いもせずに。

第２５話：本と機嫌と侵入者なの？

闇に包まれた海鳴市。
住民の寝静まったとある家で、無機質なピリリリリという音が響いていた。
腕で目を覆いながらベッドで寝ころんでいた少年は、その音を聞いてだるそうに枕わきの携帯を取った。

「・・・もしもし。」
『あっ、綱吉君！今日は練習来なかったね。連絡ないから心配したんだよ！どうしたの？』
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なのはか。」
『どうしたの、具合でも悪い？』

本当にその通りで、今日の彼はすこぶる機嫌と体調が悪かった。
いつも低いテンションが氷点下にまで下がってるんじゃないかというぐらい悪かった。
原因は朝から続く正体不明の強烈な頭痛。
ただしそこはさすがというべきか、彼は持ち前の演技力と無表情で体調の悪さを誰にも気取られることなく家族たちにすら今日一日隠しきった。
あの某ドS家庭教師様による特訓という名のイジメの賜物である。

「・・・・・・。」
『うん、なんだかよく分からないから、もうこれ以上聞かないよ。じゃあ、また明日会おうね！』
「・・・またな。」

電話を切った彼が痛みを忘れようと夢の世界へ行こうとした時だった。
一階から、誰かが騒ぐような物音がするのに気がついた。
声も聞こえてくるが、残念ながら内容までは分からなかった。

（・・・・・アリシア、まだ起きてるのか？）

そう思い、痛む頭を抑えながら一回のリビング兼キッチンの様子を見に行った少年――沢田綱吉がみたものは、予想外の光景だった。

「貴様何者だ。なぜわが主の家にいる。」
「う・・・ぐすっ・・・・・ふぇぇぇん！！怖いよぉ、お兄ちゃぁん！」
「泣くなうるせぇっ！！」
「きゃあっ！」

バキッという音をたて、赤い髪のおさげの少女が泣きじゃくり始めた金髪の少女を殴り飛ばした。
金髪少女の左頬は真っ赤に腫れあがってしまっている。

「ブ、ブイブイっ！？」
「ぅぐ、ひっ・・・ブイちゃん・・・逃げて・・・・・・」
「ヴィータ、侵入者とはいえ小さな女の子なんですからね。」

「フンだ。そいつが悪いんじゃねえか。」

赤髪おさげの少女――ヴィータを、クリーム短髪の落ち着いた雰囲気の女性がたしなめた。

そうこうしているうちに金髪少女とそのペットの子犬は最初に声を発したピンクポニーテールの女性の手によってロープでぐるぐると縛りあげられた。

子犬は４人を睨んで威嚇しているが、効果はなかった。

「シャマルの言う通りだ。少しは加減というものを覚えるんだな。」

「ザフィーラまで言うなよ・・・。」

この中で唯一の男性――ザフィーラとクリーム短髪の女性――シャマルに言われてしまい、ヴィータが肩を落としてしまった。

が、そんなことは気にせずにシャマルが部屋の電気をつけようとしたその時だった。

「貴様たちは何者だ。・・・アリシア達に何をした?」

部屋の入口の方から殺気と共に地の底を這うような低い声が聞こえた。

「！？」

オレが階段を下りて最初に見たのは縛りあげられたアリシアとイーブイ。
部屋にいる見知らぬ４人組のヤツラが縛ったらしい。
止めに行きたいが、下手に飛び出して彼女たちを人質にでもとられたらまずい。
そう思ってしばらく外から中を窺っていた。
ちょうどその時、雲の陰に隠れていた月が出てきたようで部屋の中をぼんやりと照らしだした。

「なっ・・・」

映し出されたのは、泣きじゃくる少女とブルブル震えながらも必死に少女を守ろうとしている子犬。
しかも少女の方の頬は――真っ赤にはれていた。

「・・・。」

オレの中で何かが切れる音がした。

「っ・・・!?（なんという殺気だ!）誰だか知らないが、貴様に名乗る名などない。」
「それにここは主の家だ。」
「何でお前この家に、しかも夜中にいるんだよ!!」
「この子の二の舞になりたくなかったらおとなしく出て言ってください。」

４人が予想外の殺気に耐えながらそう脅すと、ピタリと殺気が止んだ。
気配も感じられない。

「なんなんだよ!もうどっか行っちまったか?」
「恐れをなしたんじゃないですか?」
「いや・・・足音がしていない。つまりまだ同じ所にいる可能性が高いだろう。」

窓からの月明かりが薄暗い室内を薄く照らしだすなか、４人と誰かは一歩も動かない。
お互いに相手の隙を窺っているのだ。

「・・・なんだ?」
「どうしたんだよシグナム。」

ピンクポニーテールの女性――シグナムは、トンという微かな音と何かが燃えたような音と共に、一瞬オレンジの光のようなものが目の前を横切った気がした。
しかしそれらしきものは見当たらない。

「きゃあ!」
「シャマルっ!?」

「誰だおま、がぁっ！」

シグナムが声を聞いて慌てて振り返ると、そこには床に倒れ伏したまま動かないシャマルとザフィーラとそれを唖然として見ていたヴィータがいた。

「し、シグナム！ひ、ひひ、火の玉が今・・・シャマル達を・・・」

「落ち着けヴィータ。焦ったところで正体は分からずじまいだ。」

そういうシグナムの手に、いつの間にか物騒なモノが握られていた。刀だ。

「そこにいるのだろう、出て来い！」

当たり前だが、そんなこと言われて出ていくバカは滅多にいない。

「んなっ・・・？」

「ヴィータ！」

再び目の前を光が横切ったと思ったら、次の瞬間にはヴィータが意識を飛ばして床に寝ていた。

シグナムにも何が何だか理解できなかった。

（ばかな！一番戦闘に手馴れた私ですら何処にいるか分からないだと？）

狐に包まれたような気分で辺りを見回すが、気配すら感じ取れない。

ただただ静寂が包んでいるのみだ。

「貴様が望むならば、正々堂々勝負する！私は隠れてこそこそとい

うのを好まない。姿を現せ！」

返事はなく、月が輝くだけ。

「なぜ我らを襲う？（どこだ、どこにいる！）」

「お前たちはオレの仲間を傷つけた。」

答えが返ってきたと思ったら、次の瞬間シグナムが見たのはきれいに掃除されたフローリング。

そして視界がフィードアウトしていく。

「ば・・・かな・・・」

ピンクの髪の古代の戦士は誰とも分からないモノにいとも簡単に意識を奪われた。

寝よう思って布団にもぐると同時に、何かが倒れるようなそんな音が響き渡った。

心配になって慌てて音のした方へ急いだ。

「真夜中に何してるん！？近所迷惑に・・・」

部屋をのぞいた私が見たのは、K．O．された守護騎士（ヴォルケンリッター）と名乗っていた４人。
しかも長いロープで一纏めにぐるぐると縛られとった。
ただ、外傷はなかったしちょっと待ったら目が覚めそうやしそっとしとくことにした。
でも、ここで寝ているはずのアリシアちゃんとイーブイちゃんの姿がないのが何よりも気になった。
そしてさらに奥まで覗くと、そこには氷を持った男の子がおった。

「ツナ？どないしたん？こっちの４人も寝とるみたいやけど。」
「・・・はやて、この４人を知ってるのか。」
「うん。さっき知りおうたばっかりなんやけどな。ホントは明日紹介しようっておもてたんやけど・・・まあ、ツナにはええかな。」

私はさっきあったことを全部話した。
寝ようと思ったら、鎖が巻きついてた古い本からあの４人が飛び出してきたこと。
彼女たちはこの本――“闇の書”いうらしい――の持ち主を主としてずっと仕えてきた存在であること。
そんで、私が何の因果かその主に選ばれたこと。
彼女たちはただのプログラムの実体化に過ぎないらしいこと。
それでも、あの子たちの主としてあの子たちには幸せに暮らしてほしいと思ったこと。

「あの子たち今までモノの様に扱われてきたんとちゃうかな、と思ってな。だったら私が主のうちは幸せに過ごしてもらいたいやろ？
それに、べつに闇の書の力？やいらんしな。今で十分幸せなんよ。」

「・・・？お姉ちゃん？」

真夜中に唐突に目が覚めたフェイトは、きょろきょろとあたりを見回したがもちろん誰もいない。
アルフも今回はいない。

（夢か・・・。でも、なんでお姉ちゃんが叩かれる夢なんて見たんだろう・・・？いやだな。気味が悪いから忘れよう。）

不思議に思いつつも、もう一度布団にもぐってすぐに寝てしまった。

「・・・４人には悪い事をした。」

「ええんよ。私がちゃんと紹介してなかったんがそもそもの原因や。朝になったらちゃんと謝らないかんな。あの子らなりに私を守ろうとしてくれたんは嬉しかったんや。」

今回の事件は、アリシア達を空き巣と勘違いして捕まえたシグナム達をみたツナがシグナム達を誘拐犯と勘違いしたというなんともややこしいことになっていた。
様はすべて間違った解釈により起こったことだったのだ。

「アリシアちゃん大丈夫？」
「今から氷を持っていく。泣き疲れて寝たから大丈夫だろう。」

まあ、ツナの機嫌が悪かったというのも４人にとっては悲劇だったのだろうが。

「そっか。・・・ごめんなっていうたってね。」
「はやては悪くない。謝らなくてもいい。」
「ありがとうな。ところでツナ。熱、あるんやないの？」

唐突にはやてがツナの顔色を見ながらいった。
が、当の本人は――

「ない。」

無表情で言い切った。

「そっか・・・おかしいな。顔赤いから熱かな～って・・・」
「分かったからもう寝ろ。」

ツナは４人の縄をほどいて毛布をかぶせた後、氷を持って急いで出ていった。

「やっぱり体調悪いやろ、ツナ。はやてちゃんの目はごまかせへんで。絶対朝から隠しとったやろ・・・あとで一日だまっとったお仕

置きた～っぷりせなあかんなぁ・・・？」

おそらくこの家で一番怖いのは、ツナでもアリシアでもなくはやてさんです。

第２５話：本と機嫌と侵入者なの？（後書き）

シグナム達が弱かったんじゃありません。
ブチギレたツナさんがビックリするほど強かっただけです。

あのオレ様な家庭教師様に教育されればこうなっても仕方ないかな～という私の想像です。すいませんでした。

次からレマノフの箱さんのおでまし（？）と思われます。

次回もよろしくお願いします！

第２６話：異変発生なの

「おはようユーノ君！」
「おはよう、なのは。」

う～ん。
今日も平和な朝なの～。

「あっ、綱吉君大丈夫かな？メールしてみよっと。」

実は、毎日夕方になると綱吉君と一緒に公園で魔法の練習してるの。
私は繊細な魔法のコントロールが、綱吉君は転移とかの補助系の魔法が苦手だ。
これでもだんだんうまくなってるんだよ？

「よかった、今日は来れるって！」
「そっか。よかったね、なのは。」
「うん！」

私の一日はこんな風にいつもどおりでした。
わたしは、ね。

「このあたりのハズなのに・・・。」

管理局がつかんだ情報によると、この川付近にレマノフの箱のモノらしき魔力反応が最近感知されたらしい。
でも、箱なんて見当たらない。

（・・・。今日は、お姉ちゃんに会いに行こうかな。）

別に時間はたっぷりあるし、見つからない時に探したってダメな場合もある。
近くまで来てるはずなのになにも感じないし・・・いいよね。
今なら管理局の目も届いてない。
発信器らしきものをつけられた形跡もないから大丈夫。

「よしっ。」

さあ行こうと思い立ちあがったその時、私はふいに違和感を感じた。
慌てて空まで浮いてみて初めて気がついた。

（あれ？）

なにもない河原なのに、迷った？
周りは見渡す限り木、木、木。
上からみても景色は同じ。

「ここは、どこ？」

とあるごく普通の家。
この家の主である車椅子の少女の前に、正座させられている人影が４つあった。
その中で口を開いたのはピンクポニーテールの女性。
彼女は深々と車椅子の少女に向かって頭を下げながら、申し訳なさそうに言った。

「すみませんでした、主はやて。」
「謝る相手が違うやろ？」

言われたシグナムはちらっとそっぽを向いているヴィーダの方を見やった。
彼女だけがこの中で頭を下げていなかった。
シグナムはそんなヴィータに向かって目配せで合図を送った。
謝れ、と言わんばかりに。

「・・・ごめんな、アリシア。」

しぶしぶと言った感じで一言そう言ったヴィータと目を合わせようとはせず、アリシアはぷいっとあらぬ方向へ向いてしまった。
どうやら許す気はないようだ。

「・・・ブイちゃんやお兄ちゃんも虐めたくせに。」
「だ・か・ら！お前の兄貴なんかイジメてねぇって言っ「やめろ、ヴィータ。」・・・ふん。」

がっちりした体格の男、ザフィーラにたしなめられたヴィータはそれっきり何もしゃべらなかった。

「ほんまにもう！」
「はやてお姉ちゃん、私この人達キライ。」
「・・・ツナのヤツはどこ行ったんや、こんなときに。」

はやては「さてはあの男逃げやがったな」と思いつつアリシアの頭を優しく撫でた。
そのアリシアの胸には彼女が持っているハズの無い、水色の丸い石のはめ込まれた指輪が大事そうにぶら下がっていた。

「・・・ナッツ、この辺なのか？」
「ガウ！」

しかしそこには誰もいない。
でもナッツの言うことはホントだろう。
このライオンが辿っているのは、フェイトに仕込んだオレの炎とい

う名の氷だから。

（・・・何か別の力が働いているのか？）

近くで何かが輝いたような気がした。

第２７話：真実の水晶なの（前書き）

こんにちは！

毎度のことですが、サブタイトルはあんま関係ないです。

第27話：真実の水晶なの

「・・・いかなきゃ。」
「アリシアちゃん？どないしたん？」

今まで談笑していたアリシアから急に表情が消え、彼女はおもむろに立ち上がった。
瞳はうつろで、まるで何かに取りつかれているようだ。

「私は離れちゃいけない・・・いついかなる時も、そばに・・・」
「何処いくん！？」

理解不能なことをブツブツとつぶやきながら、はやての制止も聞かずにアリシアはイーブイと共に家を出て行ったのだ。
全員が混乱する中、スイクンだけが眉一つ動かさずにそれを見送っていた。

「死者は蘇らない・・・絶対に・・・」

はやてが最後に聞いたのは、その言葉だった。

（ここは河原だったハズなのに・・・）

気がつくとフェイトがいたのは、森の真ん中だった。
近くには川なんてない。
おまけにどんなに進んでも近くの山にさえたどり着けない。

（・・・きっと、私が途中で帰ろうとしたからだ。ちゃんと最後まで探すんだった。）

後悔先に立たず。
今更そう思ってももうあとの祭りだった。

「・・・。」

「ナッツ、どうだ？」
「がう・・・。」
「・・・。」

確かにここから炎の反応がするらしい。
でも、何処にもフェイトはいなかった。
結界の類も考えてみたが・・・結果は惨敗。
なにもない。

（あるとすれば、何か大きな力に取り込まれたか・・・）

そもそも、管理局に身柄があるハズのフェイトの反応がなぜこんな所からするのか。

ツナ達は何も知らないためそこから考えなければならなかった。

（・・・。）

考え込んでいると、ツナの直感が何かに引っ掛かった。

「・・・ローザ、セットアップ。」

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ!」

突然ローザを起動させたツナ。

彼は眼下に広がる森のどこか一点をじっと見つめていた。

「・・・？あれ、ここどこ？」

「ブイっ！」

気がつくと私は、森の中にいた。

ぐるーっと見回してみたけど、あっちもこっちも木ばっかり。

見慣れた景色なんて一つもなかった。

「これ、なんだろ?」

足元をふと見ると、そこにはまんまるの水晶玉が転がってた。
すごいすごい。
向こう側が透けて見えるよ、きれー!

「ねー、ブイちゃん!これお兄ちゃんに持って帰ったら喜ぶかな?」
「・・・ブ、ブイブイっ!」

えーっ。
こんなにきれいなのに、何でやめた方がいいの?

「!?ほえっ!」
「ブイーっ!」

あんまりにもブイちゃんがやめろっていうから、水晶玉を元の場所に戻そうとしたの。
そしたら、その水晶玉が突然まばゆく光り始めて・・・私の体の中に入ってきた。
こわい。
私これからどうなるの?

「ふえっ・・・うえぇぇぇん!!」

――ミッドチルダ、時空管理局本部。

「レマノフの箱のものらしき魔力反応が消えた！？」

「はい。近くに他の、ミッドチルダからでは誰かまではさすがに特定できませんが、魔力反応なら確認できたんですけど・・・」

詳しいことは、アースラの修理が終わらない限りここからじゃ分からないわね。

「わかりました。・・・上に伝えておきます。フェイトさんに帰還命令を。」

「了解！」

一体なにがどうなっているのかしら。

「あ、あれ・・・？」

目の前を光が覆ったかと思うと、私はあの河原に立っていた。

さっきまで森の中にいたのに。

（戻って来られた・・・？）

「フェイト！」
「ツナ・・・！」

そんなことを考えていると、何処からかツナくんが駆け寄ってきた。
もしかして探してくれてたのかな。
だとしたら、何で私が海鳴市にいるって分かったんだろう。

「元気そうだなフェイト。バルディッシュも。」
「Ｙｅｓ．」
「うん、久しぶりだね。えっと、その・・・お姉ちゃんは、元気？」
「ああ、今家に・・・っ！？」

私の知らない魔力反応！
いったいだれ？
なのはでもあのフェレットの子でもない・・・。

「・・・アリシア？」
「えっ。」

ツナ？
いま、なんて？

「そんなはずない。管理局の人に聞いたんだけど・・・お姉ちゃんには魔力資質は受け継がれてないって・・・」
「・・・いや、これはアリシアだ。間違いない。」

どうして言い切れるの？

「とにかく行ってみる。」
「あ、わたしも・・・！」

そうして私とツナは魔力を感じる方へと飛び立った。
もしかしたらこの時、ツナは気がついていたのかもしれない。
でも私は気がつかなかった。

誰かがこちらを見ていたことに。

――レマノフの箱。
箱と呼ばれているが、実は見た目水晶玉。
近づく者を、誰も気づかないうちに自らの世界に取り込む。
取り込まれた者は箱に閉じ込められたかの如く、自力では二度と抜け出せない。
適合者にたった一つだけ力を与えると言われている。

第27話：真実の水晶なの（後書き）

～舞台裏のひとコマ～

山本：おっす！今回はオレが舞台裏に潜入しちゃうぜ！

ツナ：あっ山本だ。もうくたくただよ～。

山本：おう、お疲れ！

フェ：ツナ！今から打ち上げに行くんだけど行かない？

ツナ：いくいく！

アリ：わ、わたしも・・・いい？

ツナ：もちろんだよ！あっ、お酒は飲んじゃダメだからね？

アリ：・・・うん。

はや：ツナもやで。

ツナ：わかってるよ！

フェ：ねえツナ。なんで撮影の時とそんなにキャラが違うの？
あとテンション。

ツナ：それフェイト達もだよ。

フェ：え～？そうかな？

アリ：ほえ。

ツナ：っていうかあれだよね。
　撮影時とキャラおんなじだったらそれはそれで気持ち悪いよね。

はや：・・・なんでこっちみていうん？

フェ：ああ・・・たしかにね。

はや：なんなんよ！ええやん、裏表なくて！

ツナ：芝居とそれとはちがうだろ。

アリ：うん。

フェ：だね。

はや：ぐすっ。みんな寄ってたかって～！

山本：・・・オレ、帰ってもいいか？

結論

『このあとどう考えてもツナが酔っ払います。』

第２８話：霧の出現と望みなの（前書き）

今回でレマノフの箱編は終了です。

次から闇の書編に移行したいと思います！

第２８話：霧の出現と望みなの

「ふえっ、うぇぇぇんっ！！」

こわい。

私の身に何が起こってるの？

「ブイ！」

「ひっく・・・ブイちゃん？」

と、そのとき、何処からか声がした。

『汝の望むものはなんだ？』

「だ、だあれ？」

私の望むもの・・・？

ところで“望む”って何だろう。

おかし？

『我はレマノフ。ようやく我の仕えるべき主を見つけた。』

難しくてよく分かんないよぉ。

なんだかこわいし・・・。

『汝の望みを一つだけ叶えよう。さあ、答えてみよ。』

急に言われても困るよ。

「ええっと・・・・・・・・お、お兄ちゃんやお姉ちゃんやフェ

イトの力になりたい！」
『・・・というと？』

ふえぇ。
うーんと、うーんと・・・。

「ブイブイ。」
「私魔力なんてないから、その、何かほかの・・・・・・・う～ん・・・。」

たぶんね、こういうことはもっと大人の人に聞くべきだよ。
子供のわたしじゃ分かんないもん！
どうしよう・・・。
こわいし、くらいし、気持ち悪い。
あ、お兄ちゃんの指輪があるから体調は悪くないんだよ。

「そうだ！お兄ちゃん達が倒れたりした時のために、誰かをすぐに呼べたらいいよね！ね、ブイちゃんもそう思わない？」
「ブイーっ！」

うんうん、これがいいや！
わたし天才！

『ふむ・・・承知した。では、心で強く念じてみよ。さすればどうにかなるだろう。』
「ちょっとこわいけど、ありがとう！れまのふさん。」

どうにかってどうなるのかな？
ま、いっか。

『これは取引だ。汝の体をよりどこに提供してもらう代わりに・・・って聞いてない。』
「えへへー。」
「ブイ♪」

何か聞こえた気がしたけど、よく分かんなかった。

「お姉ちゃん！」
「あっ、フェイト！？元気だった？」
「うん。」

魔力を感じた方へ行くと、いつも通りのアリシアがいた。
いや、少し体が震えていた。

「なにかあったのか。」
「・・・ぐすっ。」

問いかけたところ、突然アリシアが泣き始めた。
おろおろし始めたフェイトはともかく。
とりあえずオレはいつもランボ達にやっていたように、アリシアを抱きしめてやった。
しばらくそうしていると、大分落ち着いたらしく泣きやんだ。

「ツナ、誰か来る！」
「・・・管理局？もしかしてフェイトを迎えに来たのか。」

アリシアは向こうでは死人ということになっているし、オレはもともとこの世界の住人じゃないからそういう組織にマークされるのは極力避けたい。
なにより、フェイトに迷惑はかけられないしな。
魔力を感知されないようにローザは解除したが、なにぶん逃げる暇がない・・・か。
見晴らしのいい河原ではすぐに気付かれるだろう。

「ね、ね、アリシアすごいことできるんだよ！」
「すごいこと？」

当然のごとくフェイトが首をひねる。
というか今はそれに付き合っているヒマはない。

「早く逃げ・・・っ！？」
「むむむーっ！」

急いでその場を立ち去ろうとしたその時、ギュッと目をつぶったままアリシアが唸り始めた。
同時にアリシアが光に包まれる。
光が収まった時、そこにいたのはアリシアじゃなかった。

「・・・ボス？」
「クローム！？なぜここにいるんだ、アリシアは！」
「たぶん、お姉ちゃんが呼んだんだよ。」
「ブイっ！！」

フェイト曰く、おそらくアリシアがクロームの魂を呼んだのでは？
ということだった。
イーブイもそれを肯定するように力強く鳴く。
・・・とにかく、それは後で考えよう。

「クローム、力を貸してくれないか？」
「よろこんで、ボス。」

オレとオレの腕の中で丸くなったイーブイとクロームが、じょじょに霧に包まれていく。
驚くフェイトに短く別れを告げ、とにかくオレ達はその場を後にした。

数分後とある平凡な家。
そこには、頭に氷を乗っけたまま赤い顔をして正座させられている少年と、怒り心頭の少女がいた。
言わずもがな、八神家である。

「つーなーよーしーく～ん？そんなフラフラの体でどっこに行ってたんかなぁ～？」
「・・・。」

実はツナは、頭痛も熱も全く引いていなかった。というか悪化していた。
あれだけ暴れたのだから当然っちゃ当然だ。
ちなみにクロームは、イーブイを連れて自身の幻術で姿をかくしてツナの部屋で待機している。

「心配するやろ!?熱ある時にどこほっつき歩いてんねん!!病人は寝とかなあかんやろ!!!」
「・・・ごめん。」
「ごめんやあらへん、今すぐ部屋で寝より!一週間外出禁止やからな!!」
「・・・。」
「ほんまにもう!!」

実はシグナムがツナの後をつけて来ていた。
フェイトが森で感じた視線はそれなのだが、そのシグナムの報告を聞いたはやてがこうして怒り狂っていたというわけだ。
まあ、報告など聞かなくてもすでに怒ってたのであるが。

「ヴィータ、ちゃんと見張っとくんやで!」
「お、おう。」

はやてにとって家族は、それほど何よりも大事なものなのだ。

帰還してすぐ、わたしはハラオウン艦長に呼ばれた。

「フェイトさん、回収は現時点では不可能となりましたから通常通りの裁判の手続きをします。いいですか？」

「・・・。」

ツナはうまく逃げきれただろうか。

お姉ちゃんは無事だろうか。

・・・よしっ。次は何もかも片付けたあと、ちゃんとした形で逢いに行こう。

「フェイトさん？」

「あっ、はい。よろしくお願いします！」

だからまっててね、姉さん。

はやてにどやされた後、ツナの部屋。

「ボス・・・骸様の反応が、しないの・・・。」

「骸は大丈夫だ。オレを信じろ。（霧のリングと共に奪われた魂は骸の方か）」

「はい。・・・わたしは何があってもボスと骸様を信じるから。」

「ありがとう。クロ・・・凪。」

ツナとクロームがほんわかとした会話を繰り広げていた。
イーブイとスイクンはすでに寝てしまっている。

「いつでも呼んで。わたし、ボスの力になりたいの。」
「・・・ああ。」
「ボス・・・熱、早く良くなってね。」

そう言い残して霧の片割れたる少女は姿を消した。
後に残ったのは、すやすやと眠る金髪の幼子。

（あの時アリシアに何があった？なぜ今ここに凪が現れたんだ・・・？）

数々の謎を残し、レマノフの箱はひとりの少女の中へと姿を消したのだった。

第２８話：霧の出現と望みなの（後書き）

●アリシアはツナの世界の人間の魂を呼び寄せて宿せるようになった！

（本人が嫌がるので今は女性限定）

ツナの世界限定なのは、アリシアが呼び寄せられるのがツナと親しい人たちだけだからです。

あとツナの世界の時間進行は今現在止まっているので、便利なのです。

第２９話：それは小さな願いなの

「こんなことって、アリかよ・・・！なんでだよ、なんではやてなんだよ！！」

病院の前で崩れ落ちるひとりの少女。

２人の女性と１人の男性も、声もかけられずに立ち尽くすしかなかった。

「はやてちゃんがもう歩けなくなるなんて・・・このままじゃ死ぬなんて・・・！」

クリーム色が特徴的な髪の女性も、無念そうにそう言った。

重苦しい沈黙が包む中、口を開いたのはリーダー格の女性シグナムだった。

「闇の書の力を使えば救えるかもしれない。」

彼女はそう言った。

「ですが、今から闇の書のページを埋めていたのではいつになるのかわかりませんよ。」

シャマルも悲しげに眼を伏せたまま。

ぽつりとそう言った。

「たしかにそうだけどよ！少しでも希望があるならやろうぜ。あたしは後悔したくない！」

少女ヴィータは必死に訴える。

それにはじめに賛同したのは、唯一の男性であるザフィーラだった。

「確かに、やる前からあきらめてどうする。今すぐに行動すればまだ間に合う！」

その一言で、全員の心が一つになった。

――主はやてを救いたい。

「はやてちゃんを助けたい。はやてちゃんたちと一生あのまま幸せに過ごしたい。」

「このまま何もせずに死なせてたまるか！」

４人の騎士たちはこの日、並々ならぬ決意を固めた。

自らの間違いに気づくこともなく。

キャラクターステージ０２

○フェイト・テスタロッサ

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ
持ち物：バルディッシュ（デバイス）
魔光色：金色

『真面目で真っ直ぐで純粋な女の子。雷気の魔法変換資質を持っている。普段はそれなりに明るくておとなしいが、ネガティブ思考の気があるので要注意。アリシア・テスタロッサのクローンであり、アリシアの大切な妹。彼女は、再三ロストロギアがらみの事件に巻き込まれる。』

○アルフ

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ
持ち物：主フェイトに対する忠誠心。
魔光色：赤

『フェイトの忠実な使い魔。いつもフェイトの身を案じているお母さん的存在？とツナ達は思っている。見ててほほえましいです。みんなの姐御的性格。』

○アリシア・テスタロッサ

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ

持ち物：ツナから渡された大空のボンゴレリング

『魔法資質がない、とは管理局の言い分。フェイトの母体であり姉。再び自分に元気をくれたツナのもとを離れると、大空の炎の供給が立たれて死んでしまう。なのでそれを知ったツナから、もともと力を秘めている大空のボンゴレリングを渡された。ナッツかこのリングがそばにあれば死なずに済むらしい。ツナとはやてとフェイトの事が大好き。』

○イーブイ

作品：ポケットモンスターシリーズ
持ち物：勇敢な心

『アリシアとツナにだけ懐いている異世界の生き物。スイクンとはやての事をどう思っているのかは行動からは読み取れない。ちなみにとても優秀で賢いです。・・・・・・・・ここだけの話、特殊なメモリーカードがあったら姿が変化するらしいよ。』

○プレシア・テスタロッサ

作品：魔法少女リリカルなのは

『アリシアの母親でフェイトの生みの親。フェイトを利用するだけ利用した結構酷い女。』

○月村すずか

○アリサ・バニングス

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ

『なのはの親友。ツナの編入先（彼の知らない間にスイクンに無理やり入れられてた）である私立聖祥大附属小学校の友人でもある。アリサ曰く「テストで１００点は当たり前」とのことだが、それを聞いたツナの頬が一瞬引きつったとか、そうでないとか。』

○リンディ・ハラオウン
○クロノ・ハラオウン
○エイミィ・リミエッタ

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ
持ち物：Ｕ２Ｓ（クロノのミッドチルダ式ストレージデバイス）

『リンディが艦長を務める、時空管理局の艦艇「アースラ」の乗務員。クロノはリンディの息子であり、エイミィとは幼馴染のような関係。』

○ローザ

作品：なし（オリジナル）
色：空色

『ツナのミッドチルダ式ストレージデバイス。発動前は空色の星型の宝石で、発動するとなのはと色違いの水色の杖になる。話す言語は英語。ナッツの影響を受けたからなのかインテリジェントデバイ

ス並の意思を有する。が、不良品として一度捨てられた過去のある機体のために能力はそれほど高くない。なのはのデバイスであるレイジングハートと似通った部分が多数見受けられる。』

○レイジングハート／バルディッシュ

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ
色：ピンク／金色

『それぞれなのはとフェイトのデバイスでありよき相棒。どちらも願うだけで基本的な攻守魔法が発動できる祈願型のミッドチルダ式インテリジェントデバイス。レイジングハートの性格が明るいのに対し、バルディッシュは寡黙。どちらも英語を話す。』

○スピラーレ

作品：なし（オリジナル）
色：緋色

『ツナのミッドチルダ式インテリジェントデバイス。発動前はオレンジ色の二枚貝型の宝石で、アップデートすればするほど強くなるという変わりもの。現在アップデートされているのは、ローザの大まかなデータと嵐のボンゴレリングのみ。だが、ジュエルシードの力をナッツが勝手に読み込ませちゃってるので地味に強い。ちなみ彼女の管理や調整はナッツがすべて行っている。性格は比較的明るく、ナッツの影響からか主一直線。話す言語はイタリア語。』

○ナッツ／オーロ

作品：なし（オリジナル）

『ツナのミッドチルダ式ユニゾンデバイス。元は匣アニマルのナッツで、スイクンがそこに最高性能のスパコンを埋め込んだ。スイクン曰く「人間の科学力ではまだまだ及ぶまい」とのこと。誰がそのスパコンを作ったかとかは一切不明。主にヴィオーラやスピラーレ、ローザの制御と調整を担当している。話す言語は、ツナにしか通じないらしいライオン語。』

○ボルサ・ヴィオーラ

作品：なし（オリジナル）

『ツナのミッドチルダ式ストレージデバイス。ツナの魔力を使ってありとあらゆるものを保管出来るとても万能なケース。ただしナッツの補助なくしてはうまく起動しない。話す言語はイタリア語。』

キャラクターステージ０２（後書き）

「へー。」

ぐらいの反応で構いませんｗ

第３０話：とある冬の一日

もうオレがこの世界へたどり着いて半年が過ぎようとしている。はやてと出会ったのが春の終わりごろで、フェイトと束の間の再会をしたのが夏の初めだった。
ヴォルケンリッター？守護騎士？・・・だったか。と名乗る３人が加わって６人になった八神家は今日もにぎやかだった。騎士の一人だというザフィーラと、イーブイ＆スイクンはペット扱いだ。
ザフィーラは守護獣という使い魔みたいなものらしい。事実、彼の普段の姿は変わった狼みたいだ。
そんな中オレはというと、毎日朝と夕方になのはとレイジングハートと一緒に魔法の練習をしている。
あの家庭教師がいない修行なんて初めてな気がする。・・・なにはともあれ、そっちのほうは順調だ。

「綱吉くん。放課後、帰るのをちょこ～っとだけ待ってて欲しいんだけど・・・いいかな？」
「・・・職員室か。」
「にゃはは。すぐ終わるから、ごめんね！」

で、そのオレが今どこにいるかというと。

「あたしらは塾があるから先に帰るよ。」
「また明日会おうね。なのはちゃん、ツナくん。」
「・・・ああ。」
「バイバイ。アリサちゃん、すずかちゃん！」

なのはが通う、私立聖祥大附属小学校の3年生のとあるクラス。

「じゃあわたしも言ってくるね！」

「・・・ああ。」

オレ一人を残し、ガラガラと音を立てて閉まる教室の扉。

何でこんなところにオレがいるか・・・？

（・・・。）

ここの3年生として通ってるからだ。

本当は高校3年なのに・・・って、これどこの見た目は子供頭脳は大人な名探偵だ。

はぁ。

（それもこれも5ヶ月前の・・・。）

「おいサイ○人。」

それは夏の暑い日。

まだいろいろな所に春の面影が残っている。そんな日だった。

というか誰の頭がサ○ヤ人だ、誰の。

「・・・なんだ。」

あからさまに面倒臭さそうに返してみる。が、スイクンには効かなかった。

代わりに意味深な笑みが返ってくる。

「お前、もう一度小学生をやってみないか？」

「・・・・・・は？」

そして現在に至る。

（学校に通う必要あったのか？というか学区違わないか。）

なのはと会う機会が修行以外で出来たのはうれしい。

が、それにしてもこの学校勉強のレベルが高い。

中身が高校生でよかったとつくづく思う。

小学生の算数でｘとかｙ使うか？

（・・・「テストは１００点がアタリマエ」か。オレには一生言え

そうにないセリフだな。）

これは、アリサが言い放った言葉だ。お前はどんな小学生だとツッコミたい。
というか驚きすぎてそんなツッコミしか出て来なかった。

「ごめーん綱吉君！帰ろっか。」

そんなことを思い返していると、なのはが戻ってきた。
思ったより早かったな。

「構わない。今日はどんな練習をするんだ？」
「今日はねー・・・とにかく魔法を精密にコントロールできるようにしようかなーって。」

ならオレはバインド技術を磨くか。

「さあっ！いつもの公園へレッツゴー！」
「・・・いつにも増してハイテンションだな。」

この日もオレはいつも通り、なのはと練習をした後すぐに家へ帰った。
電車に乗ればそんなに時間はかからない道のり。
いつも通りの時間帯にいつも通りの道のりから帰った。

「おかえり、ツナ。」
「おかえりなさい綱吉くん。」
「ただいま。はやて、シャマル。」

いつも通りの・・・・・・・・・・・・いつも通り？

「シグナム達は？」

「遊びに行ってるんやって。」

「たった今シグナムが迎えに行きましたから、心配しなくても大丈夫ですよ。」

・・・。

「シャマル・・・聞きたいことがある。」

「？」

綱吉くんに引きずられるようにして綱吉くんの部屋に戻はいると、バタンと扉を閉められた。

部屋にはすでにアリシアちゃん達がいて布団を占領している。

「な、なんですか。」

「本当はシグナムたちはなにをしている。」

いつもの彼からは想像できないような威圧感と、凛としてなおかつ

優しい言葉。
ウソも口答えも許さない、絶対王者の風格。
この華奢そうな少年からこんな感じを受けるなんて・・・思わなかった。

「・・・今みんなは、魔力集めをしてます。」
「？」

はやてちゃんがこのままでは原因不明の難病で死んでしまうこと。
彼女の死を阻止するために我らヴォルケンリッターは闇の書の完成を目指していること。
そのためには、莫大な魔力が必要なこと。
全てを嘘偽りなくわたしは話した。

「・・・どうして言わなかったんだ？」
「言っても何も変わりません。」

言い終わって顔を上げると、そこには見たことのない綱吉君がいました。
甲冑（ミッドチルダで言うバリアジャケットのこと）とおぼしき服装に、赤い弓矢。
まさか。

「魔導師だったんですね。」
「オレも手伝おう・・・シグナム達を助けに行くぞ。」
「どうして手伝ってくれるんですか？」

ただの居候の彼が手伝わなければならない理由なんてあったでしょうか。

「家族の心配をしちゃいけないか？」
「・・・そうですね、ごめんなさい。」
薄く微笑んだ綱吉くんにつられわたしの頬もほころんでしまいました。
最初に会ったときから思っていましたが、綱吉君は不思議な人ですね。
「はやてちゃん、今から綱吉くんと買い物に行ってきます。」
「ほなオリーブオイル頼むな。いってらっしゃい！」

第３１話：悲しき現実なの（前書き）

今回はツナさんがちょっとかわいそうな状況に。

さてそんなツナさんは一体どうするんでしょうか。

第３１話：悲しき現実なの

「はぁっ・・・はぁっ・・・」

どこかのビルに、肩を切らしながらしゃがみこむ少女がいた。
少女が上着として羽織っていた部分のバリアジャケットは、破壊され消滅。
目の前の壁も少女が外から叩きつけられた際に粉々になっていた。
少女の名は高町なのは。
この世界ではイレギュラーな力の使い手、つまり魔導師であった。

「はぁはぁっ。」

そのなのはの目の前に映っているのは、粉々になった壁だけではない。
もう一人赤い少女がいた。
なのははもちろん知らないが、彼女の名はヴィータ。
ヴィータがなのはをここまで必要以上に痛めつけたのは、自身の大切にしていた帽子をなのはの魔法攻撃であるディバインバスターで吹き飛ばされボロボロにされたからだ。
ようやく落ち着きを取り戻したのか、開いていたヴィータの瞳孔が元に戻った。
ヴィータのデバイスから、空薬莢がカツンと一つ落ちた。

「・・・。」
「はぁ、はぁ・・・」

コツコツと音を立てながらこちらへ歩いてくるヴィータに向かい、最後の気力を振り絞って、ボロボロに破壊されたレイジングハート

を構える。
しかしそれを意に反す様子もなく、ヴィータは歩みを止めて自身の槌型のデバイスであるグラーフアイゼンを静かに構えた。

（こんなので終わり・・・？）

なのはは自分が攻撃されている意味が全く分からなかった。
この少女にも彼女の魔法にも、一ミリだって覚えなどなかったのだ。
ヴィータの方も、別になのはに恨みがあってこんなことをしているわけではない。
そもそもなのはにあったのは、ヴィータの方もこれが初めて。名前すら知らないのだから。
そのヴィータがなのはを狙う理由は・・・ただ一つ。

（いやだ・・・ユーノくん、クロノくん・・・）

闇の書のページを埋めるためになのはの莫大な魔力が必要だから。
なのはほどの魔力があれば、簡単に１０ページ以上は埋まるだろう。
たびたびなのはの魔力を感じていたヴィータ達は、彼女を探し回っていたのだ。
魔力を奪っても対象が死ぬわけではないし、何よりはやての事が最優先である彼女たちに罪悪感などあるはずもなく。
しかもヴィータにとってはその大切なはやてからもらった帽子を傷付けられたのだ。

「・・・。」

遠慮など微塵もあるはずはなく、ヴィータは自らの得物（グラーフアイゼン）を振り下ろした。

（フェイトちゃんっ！！）

が、その攻撃がなのはに届くことはなかった。
阻まれたのだ。

「ごめんなのは、遅くなった。」
「ゆーの・・・くん？」
「仲間か！」

突如現れたフェイトに阻まれてしまったヴィータは、後ろへ下がって体勢を立て直す。
なのはの傍らには彼女に魔法をくれたユーノの姿があった。
フェイトとヴィータが静かに睨みあう。

「・・・友達だ。」

「買うものはこれくらいですね。」
「・・・はやてにはなんというつもりだ？」

はやてに気づかれないためにさっさと買い物を済ませた2人――ツナとシャマル――は、スーパーの前でシグナムたちの居場所を探っていた。
どうやらこの近くでヴィーダが魔法封鎖領域を展開させているよう

だ。

「向こうについてから考えます。とにかく向かいましょう。」
「・・・・・まさか・・・！」
「どうかしましたか？」

何かに気づいたらしい。
ツナの表情が一瞬だけ歪んだ。

（ぶっ飛ばすのは簡単だ。でも、それじゃあダメなんだ。魔力を持って帰らねぇと・・・）

フェイトと、後から現れたアルフと交戦するヴィータ。
さすがの彼女でも2対1は部が悪い。
ただ単に2人を倒すだけならよかったのだが。

（カートリッジ残り2発・・・やれっか？）

ユーノに支えられたなのはは、ビルの屋上でフェイトの戦いを見ていた。

「なにがあったの？どうしてなのはが？」
「わかんない。突然襲って来て・・・」
「でももう大丈夫。ボクもフェイトもいるし、アルフもいるから。」
「アルフさんも・・・？」

先程そんな会話をしながらユーノにけがを治してもらっていたが、なのはの方は大分よくなったので出てきたのだ。
レイジングハートの損傷は壊滅的だが、全く使えないわけではない。ディバインシューター一発程度ならばまだ撃てるだろう。
もちろんだが、ユーノがそんなことをさせるはずはないのだが。

「クロノたちも、アースラの整備をいったん保留にして動いてくれてるよ。」

なのはの瞳は心配そうにフェイトを見つめていた。

「解析完了まで、あと少し！」
「・・・・・・・・・術式が、違う・・・！」

アースラに乗っている艦長のリンディと執務管でリンディの息子のクロノは、歯がゆい思いで画面にくぎづけになっていた。
何者かが作りだした魔法封鎖領域の術式がミッドチルダと違うために、なかなか破れないのだ。
おかげでこちらには情報が全く入って来ないうえに何が起こっているのかさえ分からない。
これには、クロノの幼馴染のエイミィもお手上げだった。

「そうなんだよ。どこの魔法だろ、コレ・・・。」

「うぐっ、ぐぅぅっ！！」
「もうおわりだね。名前と出身世界を教えてもらうよ。」

フェイトに気を取られている間にアルフのバインドにまんまと捕まってしまったヴィータ。
しかしそれでも彼女にあきらめた様子は感じられない。
ヴィータの瞳孔は再び開いていた。
それに気付かず話しかけるフェイト。その時だった。

「！？」
「なんかやばいよフェイト！！」
そう感じたかと思うと、フェイトの目の前には全く知らない女性がいて剣を振りぬいて来ていた。
ヴィータが驚いたように呟く。
「シグナム？」
彼女たちは知らないがその女性はヴィータと同じ騎士のシグナム。
しかもリーダーだ。
だがそこはフェイト。なんとかバルディッシュで防いだ。
同じようにアルフも守護獣のザフィーラに襲われ蹴り飛ばされた。
「レヴァンティン、カートリッジロード。」
「Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｒｏａｄ！」
次の瞬間レヴァンティン――シグナムの剣型のデバイスだ――の刀身が光と炎に包まれた。
シグナムは“紫電一閃”の掛け声とともにフェイトに突撃し、バルディッシュを真っ二つにしてみせた。
そのままフェイトにもう一撃を加え、空中から叩き落とす。
「フェイト！！」
慌てて駆け寄ろうとしたアルフだったが、ザフィーラに阻まれ動けない。
「このっ・・・！」

それを見ていたなのはの瞳が、さらに不安で揺れた。

「まずい・・・助けに行かなきゃ。」

ユーノが何かをブツブツと唱えるとなのはの足元に緑の魔法陣が浮かび上がり、そこからなのはを包む結界が出現した。
彼曰く、これは回復と防御の結界魔法であるとの事だった。

「なのはは絶対にここから動いちゃだめだよ！」

「・・・うん。」

それだけなのはに伝えると、ユーノは急いで負傷しているであろうフェイトのもとへと向かった。
丈夫なバルディッシュが真っ二つにされるほどの一撃だったのだ。
フェイトが無傷であるはずはない。

「どうしたヴィータ。油断でもしたか？」
「うるせーなぁ。今から反撃するとこだったんだよ！」
「そうか、それは邪魔したな。すまなかった。」

言ってからシグナムは、すぐにヴィータの両手両足につけられたバインドの破壊にかかった。
彼女の挙げた右腕で紫の光が輝いたと思ったら、バインドは粉々に砕け散る。
これでヴィータは自由だ。

「だが無茶はするな。ケガでもすれば、主はやても悲しむ。」
「わーってるよ。むう。」
「それと、落とし物だ。破損は直しておいたぞ。」

シグナムのお説教にむくれたヴィータの頭に何かが乗っかった。
それは、なのはに飛ばされた赤い帽子だった。この帽子には、左右にウサギの顔の人形がくっついているという仕様だ。
帽子の上からポンポンとされ、ヴィータは照れ隠ししながらも嬉しそうにお礼を言った。

「状況は、実質3対3。1対1なら我らベルカの騎士に、」
「負けはねぇッ！！」

勢いよく突撃していった2人だが、そこでヴィータがあることに気がついた。

「闇の書が・・・無ぇ？」

「バルディッシュ・・・大丈夫、本体は無事。」

フェイトの言う通り本体である黄色の丸い宝石部分は無事だったため、真っ二つにされたバルディッシュはすぐに元の状態を取り戻した。

立ちあがったフェイトとユーノは、今後どうするかを考えた。

このままでは勝てないと分かったからだ。

「この結界を破ってみんなで同時に出る。できそう?」

「アルフと力を合わせれば・・・なんとか。」

「わたしが前に出るから、やってみてくれる?」

「わかった。」

アルフにも聞いてみると、きついが何とかすると返ってきた。

今のユーノ達の最優先事項はなのはを連れて戦線離脱することだ。

負傷したなのはをこのままにしておくわけにはいかない。

「それじゃあ、がんばろう。」

「うん!」

不安げに見守るなのはに視線を送りながら、2人は再び夜空に舞いあがった。

「～♪～～♪」

同時刻八神家。
ここの主であるはやては上機嫌で夕食のシチュー作りをしていた。
キッチンの向こう側――料理をしているはやてからみるとちょうど後ろ――では、アリシアとイーブイが仲良くテレビを見ている。

「よしと・・・ん？」

シチューの出来上がり具合を確認していた時、突然ケータイが鳴った。
相手はシャマルのようだ。

「すみません、いつものオリーブオイルが見つからなくって・・・。遠くのスーパーまで探してきますから。」
「別にええよ～、無理せんでも。」

妙に間延びした喋り方からも相手がシャマルとよくわかる。
ついでにみんなを拾って帰るというので、はやても強く言わなかった。

「急がんでもええから、気ィつけてな～。」

「はい。」

切れたケータイをポケットに戻し、はやてはアリシア達の方へ向き直った。
それを感じ取ったのか、イーブイがこちらに向きアリシアの腕をつついて合図する。

「はやてお姉ちゃん、どうしたの？」
「うん、シャマル達が帰ってくるんもうちょっと遅くなるみたいやから・・・夕飯先食べる？」
「えーっ。みんなでたべる！」

はやてはお腹がすいているだろうと思って聞いたのだが、アリシアはどうしてもみんなと一緒に食べたいと言って聞かなかった。
自分の食べた後にみんなにワイワイされるのが気にくわないらしい。

「ほなそうしよか。我慢できる？」
「もっちろん！！」
「ブーイっ。」

えっへんと効果音がつきそうなぐらい2人が胸を張って言うので、はやても微笑みながら了承した。

「なのはにフェイト、ユーノにアルフまで・・・。」
「お知り合いですか？」
「・・・。」

ツナは複雑な顔で、甲冑姿のシャマルの横に立っていた。
ちなみに４人の甲冑はすべて彼らの主はやてのデザインしたものだ。
だからこそ、あの時ヴィータは強く怒りをあらわにしたのである。

「・・・魔力を奪っても死にはしないのか？」
「はい。生存していくうえでリンカーコアという器官は絶対必要なものじゃありませんし・・・。それにあの子たちはまだ若いですから、すぐに回復するんじゃないかと思います。残念なことに１人につき１回しか蒐集できませんけど・・・。」

なのは達はツナにとって大切な人達だ。
小説内で描かれていない間もフェイトやアルフにユーノとは連絡を取り合っていたし、なのはに至っては学校で毎日会えた。放課後も一緒に魔法の練習をしたり、ときどきすずかやアリサとかその他もいれて遊んだこともある。
出来ればそんなかけがえのない人たちを傷つけたくはない。
だが、シャマル達の想いを裏切ることもツナには出来なかった。
もうすでに彼女たちはツナの大切な仲間であり、家族になっていたのだから。

「・・・だれからにするんだ？」
「そうですね・・・あの緑の魔法陣の子達よりも先に黄色の子を狙いましょうか。なるべく急いで帰りたいので、厄介な子から先に。シグナムが相手をしていますからその隙に捕獲、お願いしてもいいですか？」
「・・・・・やってみる。（すまない、フェイト・・・）」

シャマルは自身の指輪型のデバイス、クラールヴィントを振り子型のペンダルフォルムにフォルムチェンジさせた。
一方のツナはなのは達にばれないように、ローザではなくスピラーレを嵐の弓矢状態で発動させた。
なぜだかは分からないが、ツナの魔力光は使用する武器によって色が変わるのだ。
今現在のツナの魔力光は赤色。ツナの世界にある嵐の炎が赤色だからなのだろうか。
ちなみにナッツが勝手に作った杖状態にすると、橙色になる。
それはさておき。
普段はローザを使うので、なのはたちはツナの魔力光が空色だと思っている。
ゆえにツナだとは気付かれにくいのである。

「・・・目標を捕縛する。準備はいいか、シャマル。」
「いつでもどうぞ。」

だが、ツナとて中2のあの頃から成長していないわけではない。5年も巨大マフィアの最有力候補として生きてきたのだ。
こういう時の対処法など、あの死神と恐れられる赤ん坊から嫌というほど叩きこまれている。

「目指すべきターゲットは3つ・・・確実に捕える。」

先程までの苦しそうな表情がウソのように、表情を一瞬にして落としたツナ。
ゆっくりと瞳を閉じた彼の指先から光の球がひとつ、すっかり日の沈んだ夜空に消えて行った。

「助けなきゃ・・・え？だめだよ、そんな危ない魔法！レイジングハートが壊れちゃうよ！」

レイジングハートがなのはに促したのは、最近使えるようになった最大級の砲撃魔法。
当たり前だがヴィーダの一撃でボロッボロのレイジングハートではとても堪え切れる技ではない。
それほどまでにデバイスへの負担が大きい技なのだ。
しかしレイジングハートはどうしても撃てという。

「わかったよ。やってみる。（フェイトちゃん、ユーノくん、アルフさん。わたしが結界を壊すからその隙に転送を！・・・大丈夫、スターライトブレイカーで打ちぬくから！！）」
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｃｏｕｎｔ　９．」

心配する3人をよそに、なのはは魔力を溜めていく。
スターライトブレイカーとは、以前なのはが原作無視して色々すっ飛ばし発動させたことのある技である。
つかすっ飛ばすなよ。

「８．　７・・・７・・・」
「レイジングハート！？」

何とか持ち直したレイジングハートは、もう一度7からカウントし

なおし始めた。
その後もたびたび止まりつつカウントを続ける。

（・・・いいのかよシャマル、あれほっといて。）
「ツナくん、どうしますか。わたしとしては止めたいのは山々なんですけど。」
「・・・結界がもうないから止めるのは簡単だ。放っておく。」
「だそうですよ。」
（なんでツナに判断全部委ねてんだよ・・・って言うかツナいたのかよ。）

ヴィータの至極もっともなツッコミを受けて帰ってきたシャマルの答えはこうだった。

「だって、ツナくんの勘と統率力には目を見張るものがあるじゃないですか。」
（それはそうだ。）
（シグナムまで肯定したら言い返せねぇじゃんか。ふん。）
「・・・。」

シャマルのその一言で、自身の自称：最強の某家庭教師様の教育を思い出して遠い目になったツナがいたとかそうでないとか。

（シグナム、近くのビル・・・どこでもいいですからその少女を落としてください。ツナくんが捕らえます。）
（シャマルか。承知した。）
最初に答えたのは、アルフを余裕綽々と言った感じで相手にしていたザフィーラだ。
（はぁ？ザフィーラ納得すんな！ちょっとまてよ！？）
慌てて聞き返すヴィータも、ユーノを大分おしている。
（やはり魔導師だったか・・・。）
フェイトといい戦いを繰り広げているように見えるシグナムはやはりといって納得していた。
（知ってたのかよ、シグナム？）
（ただ者ではないなとは薄々感じていた。）
抵抗を続ける3人を相手にしながら、４人の騎士と守護獣はそんな会話を繰り広げる。余裕だ。
そこはともかく、彼女たちはとにかく少しでも多くの魔力が欲しいのであって。
そのためツナが魔導師であった事実などさしたる問題ではなかった。むしろ魔力集めをする仲間が増えたのだから喜ぶところ。
家族であるツナ達とは今はすっかり和解していて、アリシアも最初はあんなに嫌っていたヴィータに今となっては自ら寄ってきて四六時中くっついているほどだ。

「（ツナは信用できるからな。いいよ、やってやるぜ！）グラーフアイゼン！」
「（お手並み拝見としよう）いい戦いだった、テスタロッサにバルディッシュ。だがここまでの様だ。レヴァンティン！」
「（うむ）これで終わりにしよう。はぁっ！」

悲鳴が上がる中、３人は同時に自らの相手をそれぞれ近くのビルに向けて叩きつけた。
同時にシグナム達それぞれの横を計ったかのように絶妙のタイミングで赤い光が通り過ぎる。
光はフェイト達を目指して一直線に進んでいく。

「ぐぅっ・・・な、なんだいこれ！？」
「バインドだ！ほかにも仲間がいたんだ・・・。」
「やられた・・・動けない。」

叩きつけられたフェイト、アルフ、ユーノの両手両足は赤色のなにかで固定されていて全く動かなかった。
シグナム達には先程の光がそうなのだろうと分かったのだが、そんなことはお構いなしという風に、間髪いれずに少し遠くにいたシャマルが自らの技を発動させた。

「・・・捕縛完了。」

「こんな遠くから3人同時に捕まえられるなんて、ビックリしました。わたしでも難しいですよ。」

表情を失くしたツナの顔からは、彼が今どんな気持ちで自らの友人たちをとらえたのか・・・伺い知ることは全く出来ない。
シャマルは気にしているヒマがないため、急いでリンカーコアを捕らえにかかった。

「う・・・あ・・・？」
（フェイト!?どうしたんだい!）
（フェイト?）

他からは全く見えないが、フェイトの小さな体から突然現れたのは・・・女性の腕。
その手にはフェイトの金色のリンカーコアがしっかりと輝いていた。

「よし、リンカーコア捕獲完了。蒐集開始!」
「Ｒａｍａｓｓｅｒ.」

シャマルの掛け声とともに闇の書のページが次々と埋まっていく。
それに比例するように手上の輝きは徐々に弱いモノになっていく。

「・・・なのは、アルフ・・・ユーノ・・・・・・ごめ、ん。」

（フェイトっ！！）

そして光が消えた。

「順調です。あと2人の一気に回収しますね。」

（急げよなシャマル。こっちは腹減ってんだからよ。）

「はいはい。はやてちゃんに心配かけられませんからね。」

意識を手放し倒れ込んだフェイトの四肢からバインドが外れる。

満足げに微笑んだシャマルは次にユーノを、最後にアルフの魔力を奪い取った。

「・・・スピラーレ、頼めるか。」

「S？，　Ｃａｐｏ．」

自らの主人をボスと呼んだ彼女は、表情を落とした主人の願いを聞き届けた。

やはり仲間を見捨てられない優しい人なのだなと思いながら。

・・・機械が思うかどうかはさておき。

第３１話：悲しき現実なの（後書き）

「空色」

１月１２日の誕生色

感性、可能性、芸術性を表す

美しいものを感じ取る才能に長けると言われている

（『誕生色大辞典』より）

第３２話：再び巻き起こる嵐なの（前書き）

イ、イーブイとアリシアが空気・・・！

スイクンはいいんです。

彼はそういう役回りなのです。

第３２話：再び巻き起こる嵐なの

「な、なあ、シグナム？」
「はい。どうかされましたか、主はやて。」
きょとん、と言った様子で自身の主に向き直ったシグナムは、シチューを食べる手を止めて問いかけた。
はやて曰くツナの様子がおかしかったというのだ。
「そうでしょうか。主はやての作ったご飯もきちんと食べてますし、特に変わった様子はありませんでしたが・・・。」
「そーか？あたしはおかしかったと思うぜ。なんかやけにぼーっとしてたし。」
「ブイちゃんもそう思うって～。」
「まさにそうなんよ！それに、いつもはおかわりするのに今日はせんかったし！！」
ヴィータとイーブイとはやての意見に、全員が「ああ、そういえば。」と思い返した。
はやてはツナが来るまで１人暮らしだったためかお皿に少なめに料理を盛る癖がある。
なので、はやてとシグナムとシャマル以外の家族は必ず一回はおかわりをする。
「熱があった時あんだけ巧妙に隠してたんよ。やのに今回に限って分かりやすいし・・・」
「そ、そうですね。女性ばっかりの中で食べるのはまだちょっと慣れてないだけかもしれませんよ。」

シャマルは何か心当たりがあるらしく、少し動揺していた。
どうやらはやてに知られたくないことが関わっているようだ。
一緒に暮らすようになって数ヶ月は経っているハズだが、はやてはシャマルの考えをあっさり信じた。

「そうなんかなぁ・・・。」
「難しい年頃ですし、今は様子を見てあげてはどうでしょう。」
「うん・・・。なんかあったら相談してくれるやろうし、そうしてみるな。」

追究をやめたはやてにホッとしつつ、シグナムはご飯の後すぐにヴィータとシャマルとザフィーラを呼び寄せた。
ツナについてシャマルから聞き出すためである。
ちなみに余談だがアリシアとイーブイとスイクンは、心配なのかなんなのかツナの部屋に押し掛けに行っている。

「で、実際のところどうなんだよシャマル。」
「それがその・・・さっき魔力をいただいた人たちがツナくんの大切な方達だったみたいで・・・」

シャマルがおずおずとそう言った。
友人を傷つけてしまったと気に病んでいるのではないか、と。

「なるほどそうか・・・。」
「それでも、ツナははやてをとってくれたんだろ?」
「結果的にそうなるな。」

ザフィーラが少し表情をゆがめて一言つぶやいた。

「じゃあいいじゃねーか。もうあいつらに用はねぇんだし、会う事

もないだろ。」
「・・・だといいんですけど。」
彼女たちはまだ知らない。
近いうちに再び会う日が来るということを。

「・・・。」
窓の外を眺めたままの体制でピクリともしないツナを心配し、アリシアがつぶやいた。

「ねえ、死んでないよねお兄ちゃん。」
「ブイ・・・。」
「死んでたら腕だけで頭を支えていられるわけがなかろう。」
突いても叩いても殴っても凍らせても反応は返って来なかった。
つーか、何やってんだおめぇら。

「燃やしたら反応するかなぁ。」
「・・・止めておけ、家がなくなる。」
後ろでそんな物騒な会話をされているとは気づかず、ツナは先程の

戦いを思い出していた。

「フェイト、ユ・・・ノ・・・」
「アルフっ！」

2人もまた、フェイトと同じように魔力を奪われ意識を手放す。

（すまない。ユーノ、アルフ・・・）

ツナがそっと呟いた。

「Ｃｏｕｎｔ６，５，４，３，２・・・」
「レイジングハート、頑張って！」

最後の気力を振り絞り、レイジングハートはカウントを続けた。

「２，１，０．」
「スターライトブレイカーはっ・・・しゃ・・・？」
あとは発射するだけ。
しかし出来なかった。

なのはの胸からシャマルの腕が突き出ていたから。

「あっ、失敗しちゃった。よいしょっ！」

「あ・・・あ・・・」

一度突き出した腕をもう一度差し込むと、今度はその手になのはのピンクに輝くリンカーコアが掴まれていた。

なのはの瞳が恐怖に染まる。

「ふぅ、やっと帰れますね。闇の書、蒐集開始。」

怯えるなのはの目の前で、光はどんどん小さくなってゆき。

「シグナム～腹減った～！」

「もう少しの辛抱だヴィータ。」

ついに消えた。

「Ｃｏｕｎｔ０.」

「・・・フェ・・・イト、ちゃん・・・・・・・・レイジ、ング・・・ハート・・・。」

力尽きたなのはは意識を飛ばして倒れ、準備万端で集まっていた魔力も姿を消した。

響いたのは、空しくカウントを教えるレイジングハートの声だけだった。

（届け、リカバリーシュート。）

シャマルが蒐集を終えた頃、ツナはなにもない夜空に向かって弓を引いていた。
矢は赤い魔力そのもので形作られている。
燃えるように輝くその赤い光の矢は、ツナの心の呟きと共に真っ暗な虚空の彼方へと消えて行った。
直後、消えたと思われた光が４つにわかれてパンッとはじけたようにも見えた。

（一旦バラバラに散って、いつものところで逢いましょう。）
（おっけー。）
（わかった。）
（綱吉はどうする。彼は約束の場所を知らないだろう？）

シグナムの言う通り、いつもの場所と言われてもツナには分からない。
今までいなかったのだから当たり前だ。

（・・・シャマルについて行く。）
（承知した。）
（見失わないようにしてくださいね。）

５つの光が夜空に美しい光を描きながら、それぞれ別々の方向へと飛び散っていった。

ツナが知っている事実はここまでなのだが、もちろんこれだけしか動きがなかったわけがない。
時空管理局もまた動いていた。

「急いでロックかけて・・・何か知ってるかもしれないんだから！！」
「やっているのですが、何者かの妨害が酷く・・・。」
「ああもうっ！！」

突如魔法封鎖領域から飛び出してきた５つの光。
何か情報を得るために、エイミィとその部下が躍起になって追跡していた。
所が何かの妨害で、思うように事が進まない。

しかも転移スピードが速すぎで全く追いつかないのだ。

「ロック・・・外れました・・・」

「・・・・・・・・・ごめん、クロノ・・・。失敗した・・・。」

うなだれたエイミィが、傍らでモニターを凝視するクロノに謝罪した。

幼馴染とはいえ、一応はクロノの方が上司なのだ。

「・・・目覚めたら、４人から話を聞こう。何か分かるかもしれない。」

「ホントにごめん・・・。」

仕方がないさとエイミィを慰め、クロノはゆっくりと部屋を後にした。

「ふん、貴様らごときに足取りなどつかませてなるものか。」

魔法封鎖領域があった地点よりも大分離れた場所で、不敵に微笑む犬がいた。

いわずもがな八神さんちの居候兼ペット、スイクンである。

実は先程管理局の邪魔をしていたのは彼。この半年で強化した彼の結界魔法を５人全員に使ったのだ。

「半年前の３つしか同時に結界を作れなかった私ではない。体力と根気がいる魔法だが私にできぬことなどないのだ。・・・他の４人

はともかく、沢田の存在を知られるわけにはいかんからな。」

何せ彼はこの世界と全く関係の無い世界から来た人間なのだから。
管理局風に言うならば、管理外世界の人間。
もしもツナ達の世界が管理局の管理世界であったなら、干渉出来なくなった世界があると気付くはずなのだが彼らにそんなそぶりはない。それにツナはこの世界に来るまで時空管理局なんて組織、聞いた事も見たこともなかった。こんな大きい組織があるのなら、裏社会の人間のトップであるツナが知らぬはずはないのである。

「せいぜい無駄な努力をして私を楽しませるがいい、下等種族共。」

最後に悪役みたいなセリフと意味深な笑みを残して、スイクンも姿を消した。

「あっ、つながりました艦長！」
「急いで映して！！」

なぜか分からないがようやく魔力封鎖領域が解かれ、画面に色々なものが映し出される。
そしてそれは信じられない光景だった。

「！？」

地に倒れ伏している、なのは、ユーノ、フェイト、そしてアルフ。
起きあがる気配はない。

「いけないわ、向こうに至急医療班を飛ばして。それから、本局の医療施設の手配を！」
「了解です！」

管理局の対応は早く、すぐさま４人は手当てを受けて医務室へと運ばれていくのであった。

「おはよ～お兄ちゃん。」
「・・・おはよう、アリシア。」

いつも通り、八神家は朝を迎えた。
のだが。

「・・・なんかツナの目の下、クマができとる？」
（ど、どうすんだよシグナム！誤魔化すのか？）

起きてきたばかりのヴィータが一気に目覚めて慌てた様子で聞いて来る。
対して落ち着いた様子のシグナムが落ち着いて対応した。

「（それしかないだろう）主はやて、顔を洗って来てはいかがでしょう。目が覚めていませんよ。」
「うん、そやな。ありがとうシグナム。」

何とか誤魔化しきったシグナムは、朝食を作るシャマルにチラッと視線を寄こしつつはやてを連れて洗面所へと向かった。
相変わらずぼうっとしているツナに、ザフィーラが声をかける。

「そんなに気になるのなら、その大切な者達とやらに連絡を入れてみたらいいんじゃないか？相手は綱吉がいたと知らないのだろう？」
「・・・気絶して寝込んでるやつに連絡入れて繋がるわけないだろ。」

ぼうっとしているわりに正論を返されて、あまりしゃべらないザフィーラがさらに押し黙ってしまったことは言うまでもない。

「クロノ執務管。少しお話があるのですが・・・」
「どうした？」

なのはの病室にフェイトと共に訪れていたクロノは、入ってすぐ中にいた医者に呼ばれて部屋の外へ出た。

部屋の中では、2人がようやく再会を分かち合っているようだった。

「実は、その、おかしなことがありまして。」
「おかしなこと?」
「はい。実は・・・」

その医者が言うには、体の傷は一つもなくリンカーコアもすでに10分の1ほど回復しているというのだ。
リンカーコアも驚きだがそれ以上に不思議なのは体の傷の方。治したものが絶対にいるはずだという。
「誰かが治した?そんな馬鹿な。」クロノの素直な感想はこうだった。
なにしろそんな高いレベルの魔法を使えるのは、管理局員以外ならばなのはだけだからだ。
フェイトもアルフも今は、一応管理局員ということになっている。

「・・・わかった。こっちで調べておくから、くわしい検査結果と情報をこちらに回して欲しい。引き続き4人をたのむ。」
「はっ!」

「補助や回復系統の魔法、ですか?」
「・・・シャマルは得意か?」
「ええ、私の専門ですよ。」

ツナのクマ事件があったその日のお昼前、ツナが突然シャマルに言った。
なにかというと補助や捕獲系、防御魔法などの裏方専門のシャマルに、それらの魔法を教わりたいという。

「私は全然構わないですよ。でもそうなると攻撃とか結界魔法専門（？）のヴィータちゃんとシグナムとザフィーラにも頼んだ方がバランスがいいんじゃないかなぁって。」
「・・・頼んだら、シグナム以外は嬉々として引き受けてくれた。」
「あー・・・。そういえば、シグナムは人に教えるの苦手って言ってましたね。」

ツナ曰く、これ以上中途半端な魔法で友人たちを傷付けたくないのだという。

「はやてにも・・・早く良くなってほしいからな。」
「・・・そうですね。」
（（だから一日でも早く闇の書を完成させないと。））

この時ツナの中ではすでに、超直感が得体のしれない警報を鳴らしていた。
しかし、ツナがその意味を知ることになるのはもう少し後の話になる。

第３２話：再び巻き起こる嵐なの（後書き）

「金色（ゴールド）」

１２月２６日の誕生色

理想・おおらか・花形を意味する

強力な保護者になるしっかり者といわれる

（『誕生色大辞典』より）

第３３話：予想外のお客さんなの（前書き）

今回はめちゃんこ短いのですよ。

次はちょっと長めの予定です。

第３３話：予想外のお客さんなの

朝っぱらにツナのクマ事件があったその日の夕方。
ツナは、シグナムとシャマルに彼女たちが使う変わった魔法について学んでいた。

「我らが扱う魔法は、一般的に“古代ベルカ式”と呼ばれている。主に対人戦闘に特化しているな。」
「ベルカ・・・だから魔法陣が正三角とオレ達のと違っていたのか。」
「昔はミッド式と魔法体系を二分していたほどの勢力を誇っていたんですよ。」

ちなみに今ツナが扱っているのはミッドチルダ式――通称ミッド式――といって、丸い魔法陣の中で二つの正四角形の頂点が円周に沿って動いているタイプの魔法陣だ。
簡単に言うと、ユーノたちの世界では『一般的な魔法陣』。
彼らの世界の名前がミッドチルダだからね。

「私たちの魔法の大きな特徴は、カートリッジシステムですね。」
「かーとりっじしすてむ？」

シグナム曰く、これは儀式によって圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込むことで瞬間的に爆発的な力を発揮できるのだという。
この儀式は、今現在すべてシャマルが行っている。
シグナムとヴィータの分を毎日作っているのだという。

「話が長くなったが・・・その中で特に優れた術者はその力を讃え

て“騎士”と呼ばれる。私にシャマル、そしてヴィータがそうだな。」

「ザフィーラは守護獣ですから、デバイスも持っていなければ騎士というわけでもありません。その代わり格闘などの近接戦では誰よりも頼りになります。」

（・・・“ベルカの騎士”に弾丸、か。）

シグナムには、2人の話をツナの足の上で聞いていたナッツの瞳がキラーンと光った・・・ように見えた。

一方こちらは時空管理局。

あの事件が起こってから1日が経とうとしていた。

「ごめん、クロノ。心配かけて・・・。」

「きみとなのはでもう慣れた。」

苦笑するクロノだったが、何かを思い出してふっと表情を引き締めた。

「そうだ。やっぱり、予定は変えられないって。体調がすぐれない所悪いんだけどこの後すぐに面接に行くことになったよ。なのはも呼んでおいて。さっき病室で再会をとても喜んでたから入りそびれちゃって。」

「ごめんなさい。」

彼は謝る必要なんかないと言う。
そしてもう一つ、とバルディッシュの様子について詳しく説明してくれた。

数分後、クロノとフェイトはなのはをつれてとある部屋の前で止まっていた。
彼の名はギル・グレアム。時空管理局の顧問官。
今回の面接は、フェイトの保護観察に関することの一つだった

「失礼します。」

そこにいたのは、体格のがっちりとした男性。

「クロノ、久しぶりだな。」
「ご無沙汰しています。」

面接というから緊張していたなのはも、グレアムさんがクロノの指導教官だった人だということやなのはと同じ地球のイギリス出身だと聞いて行くうちにすっかり打ち解けて落ち着いていた。
他人ばかりの中で出身世界が同じ人というのは、やはり安心感があるらしい。
面接の最後にグレアムは、フェイトにこう言った。

「約束してほしいことは一つだけだ。友達や自分を信頼してくれる人のことは絶対に裏切ってはいけない。それができるなら、私はキミの行動についてなにも制限しないことを約束するよ。できるかね？」

「はい、必ず。」

しっかりとした言葉でフェイトは言った。

「うむ、いい返事だ。」

「全力でかかって来い、綱吉！」

「・・・最初からそのつもりだ。」

現在夕方の神社。

そこに人影があった。

いわずもがなだが、ツナとシグナム達である。

「結局一番やる気満々なのシグナムじゃん！」

「ちょっと悪く言えば戦闘マニアですからね、彼女・・・。」

こんな所で魔力集めもせずに何をしているかというと、ツナの戦闘力を知りたいと言いだしたシグナムと模擬戦を行っているのだ。

彼女曰く、練習はまず己の技量を知ってからだということらしい。

ちなみに今日はザフィーラが蒐集に出ている。

「我らヴォルケンリッターは、主はやてのために誇りをかけている。お前は主はやてを救うために何をかける？」

シグナム達は、はやての命と願いのために自分達の誇りのすべてをかけて魔力蒐集にあたっていた。
生半可なものではない。

「・・・はやてには何度も助けてもらった。だから今度はオレの番だ。オレの命にかえても・・・仲間を、家族を守るという覚悟をかける。」
「フッ・・・面白い。気にいったぞ綱吉！」

互いの武器をぶつけて語り合う2人を見ていたスイクンが、木陰でぼそっと呟いた。

「いやいや。お前にここで死なれたら誰が指輪探すのだ。」

彼は雰囲気を壊さぬように気を使って呟くだけにした。

「あれ？お兄ちゃんたち何してるんだろ？」

アリシアは公園から家に帰る途中、神社で見覚えのあるシルエットがあったのに気がついた。
いそいで石段を登ると、そこでは武器を交えて戦うツナとシグナム。
それを見たアリシアは盛大な勘違いをした。

「あ、アリシア何でここにいるんだよ！」
「・・・んか・・・め・・・」
「は？」

ヴィータが聞き返すと、今度はハッキリと大きな声で叫んだ。
それはもう大きな声で。

「ケンカはダメえぇぇぇぇぇぇぇっ！！！」

瞬間、アリシアの体が光に包まれ。
あまりの大声に驚いて手を止めたツナたちは、さらに驚くべきものを目にした。

「あれ・・・？」
「えっ？」
「変わった・・・。」

光が解けた時に現れた人物は、アリシアではなかった。
では誰なのか。それは――

「き、京子・・・ちゃん・・・？」
「あれっ？あ、つっくんだ！」

そう。ツナの世界の住人、笹川京子であった。

（アリシア・・・また適当に呼んだのか・・・！）
「久しぶりだね、つっくん。私のお誕生日以来だから・・・ええっと2週間ぶりぐらいかな？」

この少女は自分のいる場所に疑問を感じないのだろうか、と3人がようやくそれだけ思い始めたころ。
京子は周りのことは気に留めず、ツナの両手首をしっかりと握ってこんなことを宣言した。

「そうだ！ずっと聞こうとおもてたんだけど・・・つっくん、この間合格した4年制の大学を卒業したらイタリアに行っちゃうって本当！？」
「えっ・・・どこでそんなことを・・・」
「本当なんだね・・・。じゃあ私もお仕事辞めてつっくんについて行くよ！」
「・・・へ。」

何が何だか分からないためポッカーンとしている3人と、木陰で呆然としたまま固まっているスイクンそっちのけで、会話は進む。
京子はツナの手首を放して、天使の様な微笑みを浮かべた。

「大丈夫だよ。わたし、つっくんの力になりたいの。基礎以外は独学だけどハッキングやプログラミングもできるようになったから、5年前の無力なわたしじゃない。ハルちゃんも行く気満々だよ♪」
（（（（ナチュラルに犯罪行為が聞こえたんですけども！？））））
ツナ以外の4人の心の中のシャウトが京子に届くはずもない。

「だからつっくん、連れてってくれないと一生恨んじゃうからね。」
「・・・考えておく、から。（だれだ、京子ちゃんにハッキングを

教えたのは？）」

その後アリシアが戻ってくるまで、遠い目をしたツナと嬉しそうな京子ちゃんがいたとか。

第３３話：予想外のお客さんなの（後書き）

「蜜柑色」

８月２０日の誕生色

エネルギー・大望・現実的という意味

心身ともに健康的な現実主義者といわれる

（『誕生色大辞典』より）

蜜柑色ってオレンジ色の事ですかね？

キャラクターステージ０３

○シグナム

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ
持ち物：炎の魔剣「レヴァンテイン」（デバイス）

『闇の書の守護騎士（ヴォルケンリッター）のリーダーで“烈火の将　剣の騎士シグナム”。炎熱の魔力変換資質を持っている。とてもまじめで誠実な性格。「家族なんやから気軽に呼んでくれたらええよ」と言ったはやての事をただ一人“主はやて”と未だに呼んでいる所からも彼女の真面目さが伝わってくる。』

○シャマル

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ
持ち物：風のリング「クラールヴィント」（デバイス）

『闇の書の守護騎士（ヴォルケンリッター）の１人で“風の癒し手　湖の騎士シャマル”。喋り方はおっとりとしているが、実はとてもしっかりしている。はやての家事を進んで手伝う。ちなみにアリシアと一番に和解したのは彼女である。・・・・・余談だが、彼女は運動音痴でカナヅチである。』

○ヴィータ

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ

持ち物：鉄（くろがね）の伯爵「グラーフアイゼン」（デバイス）、のろいウサギ

『闇の書の守護騎士（ヴォルケンリッター）の1人で“紅の鉄騎　鉄槌の騎士ヴィータ”。4人の中で1番外見が幼く8歳ぐらいに見える。勝気で結構自由奔放に動き回るが、根はとっても優しい。はやてを姉のように慕い、家族たちに全幅の信頼をおいている。』

○ザフィーラ

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ
持ち物：主に対する忠誠心
魔力光：白

『闇の書の守護騎士（ヴォルケンリッター）の守護獣で“蒼き狼　盾の守護獣ザフィーラ”。獣人の男性で、見た目は4人の中で一番年上っぽい。寡黙な性格だが面倒見がいいので、アリシアからものすごく懐かれている。八神家は女ばかりだからなのか、少ない男であるツナとよく話しこんでいる（？）姿が目撃されており、性別不詳のスイクンとも仲良くしているようだ。』

○ギル・グレアム

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ
持ち物：とくにはない

『時空管理局顧問官。クロノの師匠。なのはと同じ地球出身者で、そのころはイギリスに住んでいたらしい。2人の女性の守護獣を従

えている、とても穏健な人。』

○クローム髑髏

作品：家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！
持ち物：精製度Ａランクオーバーの霧のリング、霧の匣、三叉槍

『ボンゴレファミリー霧の守護者の片割れ。アリシアによって呼びだされた。今後の出番に期待が高まります！ツナと骸の事は大事な人だと思っているが、基本他人には興味を示さない。』

○笹川京子

作品：家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！
持ち物：誕生日にツナから贈られたペンダント

『とても優しくちょっと天然な子。高校に通いながら女優兼歌手として早くから活動している。ちなみに中学生の頃にスカウトされたのがキッカケとのこと。アリシアに呼び出されてしまった。ツナとの関係は不明だが、４年制大学卒業後イタリアに渡る予定のツナに女優と歌手を辞めてでもついて行くつもりでいると語った辺り少し怪しい。』

○レヴァンティン

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ
魔力光：紫

『古代ベルカ式アームドデバイスでシグナムの愛刀。フォルムチェンジをすると、弓矢にもなるらしいがシグナムの戦い方上滅多にお目にはかかれないとか。』

○グラーフアイゼン

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ
魔力光：紅色

『槌の形をした古代ベルカ式アームドデバイスでヴィータの相棒。破壊力は一級品で、とくに結界を破るとかそういうのが得意。魔力で作り出した丸い弾をガツーンと勢いよく打って攻撃する。』

○クラールヴィント

作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ
魔光色：明るい緑

『４つの指輪型をとっている古代ベルカ式アームドデバイスでシャマルの相棒。攻撃よりも防御に優れており、裏方に徹している。通常のリンゲフォルムから、振り子の様になるペンダルフォルムにフォルムチェンジすることができる。』

キャラクターステージ０３（後書き）

「ほー」

ぐらいでかまいまｓ（ｒｙ

番外編：第1回八神家的家族会議！（前書き）

はい！
完全に遊びました、すいません。

後悔はしてません！

が、やはりグダグダなのです。

番外編：第1回八神家的家族会議！

12月某日、八神家応接間

はやて　：これより！八神家の家族会議を始めます！

ツナ　：・・・家族会議？

アリシア　：かいぎかいぎ！！

ヴィータ　：いててて！髪を引っ張んなアリシアっ！

シャマル　：議題は、家族の立ち位置についてです。

ヴィータ　：立ち位置ってどういうことだよ。ま、まさか誰が一番地味かを――

シャマル　：違いますヴィータちゃん。

シグナム　：主はやて、これはどういう事なのですか。

はやて　：いやな。昨日の夜、読書しよってふと思たんや。

シャマル　：私もずっと気になってたことだったんですけど・・・

はやて　：誰が八神家ではお母さんにあたるんかなーって。

スイクン　：ああ・・・気になるな。

ツナ　　：お前はなってないだろ。

ザフィーラ：私はならないな。

はやて　　：・・・そうなんかなぁ・・・。

ザフィーラ：あ、いや、あくまでも私個人の意見であって――

シグナム　：主はやて！私は気になります、やりましょう。

シャマル　：私やりたいです。

ヴィータ　：はやてがやりたいんならやろうぜ！

ツナ　　：（必至だな）

アリシア　：わたしもしたいー！

はやて　　：そんなにいうんならやろか！！（キラキラ

シグナム　：（ほっ。）

はやて　　：昨日ちょっと考えたんやけどな、やっぱり・・・お父さんはツナ思うんや。

ツナ　　：・・・・・・・は？

シグナム　：確かに、うちは女性ばかりですからね。
シャマル　：そうなると、お相手は誰になるんでしょう？
ヴィータ　：一番歳の近いはやてだろ。な、アリシア。
アリシア　：ん？うん！
ツナ　　：んなっ！？
はやて　　：ちょ、な、なにいうてるん！シグナムやろ！
シグナム　：へ？
シャマル　：お、お母さんについては置いておきましょうか。
ヴィータ　：でもさ、あたしとアリシアは姉妹でいいだろ？で――
アリシア　：スーちゃんとブイちゃんとフィフィーはペットだよ。
スイクン　：・・・ザフィーラはフィフィーって呼ばれてるのか。
知らなかったぞ。
ザフィーラ：悪くはないだろう。
スイクン　：よくもないがな。
ヴィータ　：そこの犬黙れ。そうなると、必然的に残ってるのはシグナムとシャマルとはやてじゃん。

スイクン　：それにはやてはこの家の主人だ。
はやて　　：ええっと・・・
シャマル　：整理しますね！

【シャマル的八神家】

ママン→はやて
パパン→ツナ
長女　→シグナム
次女　→シャマル
三女　→ヴィータ
末っ子→アリシア
ペット→イーブイ
　　スイクン
　　ザフィーラ

はやて　　：おぉ～。
ツナ　　：おぉー・・・じゃないだろ。小学生にこんなでかい娘がぼこぼこいてたまるか。

スイクン　：（自分の本来の歳を忘れているわけではないだろうな。ロリコンになるぞ。）

はやて　　：う、それもそうやなぁ。

ヴィータ　：立ち位置なんだからいーじゃん。

ツナ　　：よくない。ここはこうだろ。

【ツナ的八神家】

ママン→シャマル

パパン→ザフィーラ

長女　→シグナム

長男　→ツナ

次女　→はやて

三女　→ヴィータ

末っ子→アリシア

ペット→イーブイ

居候　→スイクン

スイクン　：まてまてまてまてまて！！何で私だけ居候なのだ！

ツナ　　：は？

スイクン　：は？・・・じゃない！お前も現実的には居候だろうが！

シャマル　：私がお母さんですか？

はやて　　：ええなぁ、真ん中っ子。一人っ子のあこがれやわ～。

ザフィーラ：バランス的には悪くない。

アリシア　：えっとねぇ・・・犬のお父さん、テレビで見た事ある！

ザフィーラ：・・・私は獣人だ。

シグナム　：ふむ。

スイクン　：他が賛成でも私は却下する！！

ヴィータ　：あーもー！じゃあもうこれで行こうぜ。

【ヴィーダ的八神家】

ママン→シャマル

パパン→シグナム

長男　↓ザフィーラ
長女　↓はやて
次男　↓ツナ
次女　↓ヴィータ
末っ子↓アリシア
ペット↓イーブイ
　　スイクン

シグナム　：・・・私が男役は無理があるだろう。
はやて　　：巨乳やし？
シグナム　：関係ありません、主はやて。
シャマル　：私がお母さんは固定ですか？
ツナ　　：・・・シャマルとアリシアとヴィータは固定だな。
ザフィーラ：長男・・・。
はやて　　：う～ん。なかなか納得のいくんがないなぁ。
アリシア　：じゃあじゃあ、アリシアが考えるよ！

【アリシア的八神家】

ママン→はやて

パパン→ツナ

長男　→ザフィーラ

長女　→シグナム

次女　→シャマル

次男　→スイクン

三女　→ヴィータ

末っ子→アリシア

ペット→イーブイ

ツナ　　：・・・。

ザフィーラ：原点回帰か。

ヴィータ　：スイクンとザフィーラが子ども扱い以外はな。

スイクン　：私に性別はないのだが。

アリシア　：ねー、シグ姉はどう思う？

シグナム　：私は・・・。

【シグナム的八神家】

ママン　　↓はやて

パパン　　↓ツナ

パパンを狙ってる人　↓シグナム

息子　　↓ザフィーラ

パパン狙いの人の娘1↓シャマル

娘　　↓ヴィータ

パパン狙いの人の娘2↓アリシア

ペット　　↓イーブイ
　　スイクン

ヴィータ　：シグナム！？

ザフィーラ：愛人を遠回しに言っているが――

シグナム　：愛人ではない。

シャマル　：どろっどろじゃないですか！

はやて　　：昼ドラの見過ぎやろ！

シグナム　：私が主はやての娘など畏れ多い。

ツナ　　：・・・だからってなんで三角関係だ。

シャマル　：しかも狙ってるんですね、綱吉君を。

シグナム　：主はやてに少しでも近づくためだ。

はやて　　：この場合の近づくの意味、盛大に勘違いしてるやろ・・・。

ザフィーラ：もうこれでいいだろう？

【ザフィーラ的八神家】

ママン→シグナム

パパン→ザフィーラ

長女　→シャマル

長男　→ツナ

次女　→はやて
三女　→ヴィータ
末っ子→アリシア
ペット→イーブイ
　　スイクン

ツナ　：・・・。
ヴィータ　：もうこれでいいな。
はやて　：シグナムとシャマルは？これでええ？
シグナム　：主はやてがいいとおっしゃるなら。
シャマル　：構いませんよ。
アリシア　：けってーい！！
ツナ　：・・・終始グダグダな会議だったな。
はやて　：そんなもんやって、会議は。
シャマル　：それでは！次の議題はですね～。
シグナム　：次の機会にしないか、シャマル。

第３４話：危険な力なの（前書き）

主人公の出番・・・ほぼないです。

相変わらずグダグダなのです・・・。

第３４話：危険な力なの

ツナが蒐集を手伝うようになってはや数日。
相変わらず日に日に寒さを増している冬の海鳴市には、クリスマスが近づいていることもあっていつもより家族連れが目立つようになっていた。
そんな中、とあるスーパーに車椅子の少女とそれを押している少年の姿があった。

「なぁ、転校生ってどんな子やったん？」
「・・・半年前、はやてに武器を向けた金髪の子。フェイトって言う、素直な優しい子だ。」

ツナが初めて魔法蒐集を手伝ったその２日後のこと。
管理局員のハラオウン親子とエイミィ達と共に、フェイトは海鳴市へと引っ越してきた。
戦艦アースラが整備中のため、魔導師襲撃事件の情報収集を行うためにしばらくの間滞在することとなったのだ。
そしてフェイトは、なのはとツナの通う小学校へと編入してきたというわけ。

「そっか。あの後和解して仲良くなったって言うてたなぁ。・・・そや、今度お家に呼んであげたら？ごちそうするっていうてあげ。」
「・・・今度聞いてみる。」

フェイトをシグナム達に合わせることはできない。
管理局にこれ以上闇の書について知られるわけにはいかないのだ。

もしもはやてが闇の書の所有者とばれてしまえば、今の魔法蒐集に全く関係の無いはやてが罰せられることになるだろう。

「最近みんな家におらんな・・・。」

シグナム達はもっぱら蒐集に出ていていない。シャマルはまだいる方だろう。

アリシアとイーブイも、最近は「スーちゃん（※スイクンの事）と特訓するんだよ！」といって毎日のように遅くまで帰って来ないのだ。

「・・・・いつか必ずみんな揃って過ごせる日が来る。今はみんな忙しいだけだ。」

「大丈夫やって！みんな自分のやりたいことやったらええし。ツナを見つけるまでひとりやったんやから平気や。」

心配そうにするツナを見て、安心させようとはやては元気に答える。強い子だと感心しつつ、ツナは早く闇の書を完成させなければと決意を新たにしたのだった。

「今日はすずかちゃんがお食事に来るやろ？お鍋にしよう思ったんやけど、お肉多めでよかったんかな？」

「・・・そうだな。」

微笑みをかわしながら、2人はレジを済ませてスーパーを後にした。

「みんな外で寒ないかなぁ・・・。」

海鳴市某所、上空。

「管理局か。」
「でもチョロイよ、こいつら。」

帰宅途中だったヴィータとザフィーラが、管理局の結界（魔法封鎖領域）の中に閉じ込められていた。
外からもかためられているようで、このままでは破れそうにない。
しかもヴィータ達の周りは複数の局員に囲まれていた。

「雑魚ばっかだな。これなら余裕だぜ！」

が、ヴィータがグラーフアイゼンを振り上げるのと同時に局員は逃げて行った。
予想外の行動に驚くヴィータだったが、背中を預けていたザフィーラの声で現実に引き戻される。

「上だ！」
「くそっ。」

2人の頭上には攻撃態勢をバッチリ整えたクロノがいた。
彼の掛け声で、一気に魔力で構成された白く尖った針のようなものが降ってくる。
が。
ザフィーラの防御魔法を破ることはできず、かろうじて彼の腕に刺

さったモノも破壊されてしまい傷一つつけることは出来なかった。
「こんなもので傷つくほど、私はやわでは・・・ないっ！」
「上等！」
「くっ・・・。」

数分前、管理局側。

「都市部にて、捜索指定対象の魔力反応を持つ2名を補足！現在結界内部で捕獲中です。」
「相手は強敵です。戦闘は避けて、外部から結界の強化と維持を！現地には執務管を向かわせます！」
「はっ！」

エイミィの操作する機械が突然緊急事態を告げたかと思うと同時に、リンディのもとには報告が届いていた。
リンディの素早い判断で、すぐさま現地の魔導師達とエイミィはいろいろな準備に取り掛かる。

「武装局員配置終了！ＯＫ、クロノくん。」
「了解！」
「それから今、現場に助っ人を転送したよ！」

ザフィーラに攻撃をはじかれたばかりの現場のクロノの目に飛び込んできたのは、２人の少女。

とてもとても見覚えのある姿だった。

「なのは！フェイト！」

他にも近くの違う建物にアルフとユーノの姿もある。

これが、先日ボロ負けした管理局の反撃の合図だった。

「レイジングハート・エクセリオン！」

「バルディッシュ・アサルト！」

「「セ～ット、ア～ップ！！」」

「「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ！」」

新たな力と可能性を宿した2人の武器が、少しばかりデザインの変わったバリアジャケットを2人に纏わせていく。

この2人の武器には、実はヴィータ達と同じカートリッジシステムが新たに搭載されているのだ。

ただ・・・繊細なインテリジェントデバイスには負担が大きすぎるのが今のところの難点でもあると、エイミィは語った。それでもレイジングハートとバルディッシュは譲らなかったそうだが。

彼女曰く、「よっぽど悔しかったんだろうね、自分達がご主人様の役に立てなかったことが」ということらしい。

「あれはあたしらの・・・！」

なのは達の武器に自分達と同じカートリッジシステムが備わってい

るのを見て、ヴィータの顔が険しくなる。
あの時のなのはたちに勝てたのは、デバイスの性能の差が大きかった。
事実、フェイトはあのシグナムの腹に一太刀入れていたのだ。武器の差がなければ苦戦していただろうと、彼女自身も言っていた。

「私たちは戦いに来たんじゃない。」
「あのとき私たちを襲った理由を教えて！」
「・・・・・あのさ・・・ベルカのことわざに、こんなのがあんだよ。“和平の使者なら槍は持たない”。」

ヴィータの言葉はなのはとフェイトにはいまいち通じなかったらしく、2人は顔を見合わせて首をひねるばかりだ。
理解してないと分かった彼女はグラーフアイゼンを突き出してこう言った。

「話し合いをしようって言ってんのに武器を持ってやってくるヤツがいるか馬鹿、って意味だよ。バーカ！」
「有無を言わさず襲ってきた子がそれを言う！？」
「それにそれはことわざではなく、小話のオチだ。」

もっともなザフィーラのツッコミに対して、ヴィータが五月蠅いと返した直後。
突然結界外部から紫の光を伴った侵入者が現れた。
その正体はシグナム。

「・・・。」

その後の展開は、ヴォルケンリッターにとって不利なものだった。
パワーアップしたなのは達にはおされるし、なにより逃げようとしても結界がカタすぎて出られない。
外部からしっかりと強化されているのだ。
これではなのは達を倒したところで管理局につかまってしまう。

（シャマル、なんとかならないか？）
「それが・・・私の魔力ではちょっと・・・。外から強化されてるみたいなんです。シグナムやヴィータちゃんの最大魔法ぐらいの破壊力があればいいんですけど・・・。」
（２人とも手が離せない。・・・アレを使うしかないだろう。）

結界の外には、闇の書を持ったシャマルの姿。
彼女は結界内部にいるザフィーラと連絡を取り合っていた。

「でもあれは、ページを大分消費しますし・・・危険です！」

ザフィーラが促した事、それは。
“闇の書の力の行使”
それが、今結界内部に囚われているシグナム達を救う唯一の手だてだった。

（うまく避けるさ。それにページは、また集め直せばいい。私たち

がやられては元も子もない。）

「・・・・・そうですね。わかりました。」

そう言ったシャマルは、静かに闇の書を開いた。

（みんな！今から結界破壊の砲撃を撃ちます。うまくかわして撤退を！）

（（（おう！！））））

「ぐっ！」

そのころクロノは謎の男からの攻撃を受けていた。

クロノは、ユーノと手分けしてほかに仲間がいないか捜索を行っていたのだが、その道中での事だった。

突然のことに対応しきれず、クロノはあっさりと男の蹴りを受けてしまった。

顔は仮面で分からないし、声にも姿にも見覚えはなく、本当に突然のできごと。

「何者だ、連中の仲間か！」

「・・・ここは手を引け。時が来るのを待て！」

質問には答えず、男はただそう言った。

「エイミィ今のは？」
「分かりません、こっちのサーチャーには何も・・・なんで、どうして！」
謎の男はヴォルケンリッター側でもなければ、管理局側の人間でもないようだった。
「闇の書よ、守護騎士シャマルが命じます。眼下の敵をうち砕く力を・・・今ここに！」
シャマルの言葉と共に紫色の雷が、ページの開いた闇の書から発生。光を空へと昇ってゆき黒い雲を発生させた。
雲は結界のちょうど真上に集まり、黒と紫を混ぜたような球体状の巨大な光がバチバチという音と共に出現する。
「うって・・・破壊の雷（いかずち）！」

球体から放たれた雷は、ビキビキと結界を破壊する。
砕けるのも時間の問題だろう。

「テスタロッサ。この勝負、預ける。」
「シグナム！」

それを見た騎士と守護獣たちは、次々に戦線離脱していく。

「あたしは鉄槌の騎士ヴィータ。お前の名は？」
「なのは、高町なのは。」
「たかまちなのっ・・・なの、は・・・ええい、呼びにくいっ！」
「逆切れされた！？」

ヴィータも戦いを預けると言い残し、なのはの制止も聞かず去っていった。

「仲間を守ってやれ。直撃を受けると危険だ！」
「え？あ、あぁ・・・。」

ビキビキと今にも壊れそうな結界。
確かに危険だが、アルフにはザフィーラがなぜ敵である自分達に忠告してきたのか分からなかった。

そうこうしているうちに、ついに闇の書の雷が結界を破り、内部を破壊し始めた。

「・・・。」

結界外部にいた少年が、すっと自らの空色の杖を構える。

誰に注目されることもなく。

第３４話：危険な力なの（後書き）

「純白」

1月1日の誕生色

純粋・優雅・シンプルという意味

心の美しい最高の女性と言われる

（『誕生色大辞典』より）

第３５話：あの頃のお話なの

およそ半年前、八神家。

「ん、そろそろ寝なあかんな・・・。」

この家の主、はやては夜の読書を終えて床につこうとしていた。
・・・のだが本棚の方から異様な気配が漂って来て寝られなかった。
気配の正体は、彼女が「綺麗だから」という理由で大事にしていた変わった本。
鍵がついているという仕様だったため、読んだことはない。
なにはともあれ、その本が突然本棚から浮かび上がり光を放っていたのだ。
本を縛っていた鎖が砕け散り、パラララッとすべてのページがめくれ出す。

「な、なんなん？」

答える人がいる訳もない。当たりまえだが。
まー、そこはさておき。
最後までめくれ終わった本から今度は魔法陣が出現し、あっという間に恭しく膝を曲げて頭を下げたヴォルケンリッターの４人の姿が現れた。

「我らは闇の書の主に使えし守護騎士。」
「主、我らに何なりとご命令を。」

それが、主はやてと守護騎士４人の出会いだった。

次の日。
八神家の面々は、皆応接間に集まっていた。

「紹介するな。こちらは今日から私らの家族になる闇の書の守護騎士さん達や。仲良うしたってな。・・・って、名前分からんかったらお互いに困るわなぁ。改めまして、八神はやて言います。よろしゅう。」

戸惑う４人とニコニコしている少女。
そう、今日は他の家族たちとの正式な顔合わせをしているのだ。

「・・・沢田綱吉。みんなはツナって呼ぶ。」
「スイクンだ。はやて嬢には世話になっている。」
「・・・・・・・・・・・アリシア。アリシア・テスタロッサ。こっちは相棒でイーブイのブイちゃん。・・・お姉ちゃん達虐めたら今度こそ許さないからね。」
「ブイ。」

ぷくーっと腫れたほっぺたを氷で冷やしながら不機嫌そうにしているアリシアと、警戒心むき出しのイーブイ以外は嬉しそうに？している。
ちなみにアリシアはツナにベッタリとくっついたまま動こうともしない。
よほど昨夜のことがトラウマになっているようだ。

「シグナムだ。先日の非礼、心から謝罪させてもらう。主の家族とは知らず・・・すまなかった。」
「私はシャマルと言います。」
「あたしはヴィータだ。」
「ザフィーラという。」

こうして４人は、改めて八神家の一員となった。

我らの新しい主。
主はやては今までの主とは全く違っていた。
その年の若さも、ひとつの違いで驚くべき点だとは思っている。
だが、それ以上に我らは驚いた。

「じゃあさっそく、採寸しよか！４人とも服・・・ないんやろ？キチンとサイズ図ってから買いにいかなな！」
「えっ。」

今までの主は、多少の違いはあれど我らをモノの様に扱うような人物ばかりだった。
そのため我らには戦うということしか脳はなく、ただレヴァンティンを主のために揮うことだけが私の存在理由だと。そしてまた今回も・・・。
そう思っていた。
だが、主はやてはまったくもってそういう人物ではなく。

主はやてにしてみれば突然現れた不審者であろう我ら――主はやてが意識して呼んだわけではなかったうえに、主は魔導師でもなければ闇の書の“や”の字も知らなかった――を家族として扱い始めたのだ。
それは初めての体験で、信じられないことだった。

「その格好寒そうだよ。もうちょっとで夏だけど、夜寒いから風邪引いちゃうよ。」
「ブーイっ。」
「・・・1人5着買うとして、20着ぐらいか。」
「そやなー。ズボンとか下着もいるやろうしもっと増えるかもしれへんな。」

驚いたことは主はやてのことだけではない。
主曰く「今は立派な家族なんよ」という2人と2匹の態度。
私たちを特に不審がる事もなく接してくれるのだ。
先程警戒心むき出しだったアリシアという少女とイーブイという子犬も、いつの間にか普通に会話に混じっていた。

「やっぱりシャマルには、大人っぽいワンピースが似合うと思うんよ。」
「シグナムは・・・ズボンの方があってる。」

私たちにとって何もかもが初めてのことだった。
いつも一番に動くヴィータも、こればかりは驚きで目をまんまるにしたまま動かなかった。

「ブイブイ!」
「そうだよねー、ブイちゃん。赤い髪の人はゴスロリ?だっけ。・・・とにかくドレス似合いそうだよね!」

「アリシア。赤い髪の子は、ヴィータちゃんっていうんやで。あとどこでそんな言葉覚えてきたん？」

それからの日々は幸せだった。
平凡な日常。平凡に過ぎてゆく時間。
家族一緒にいる時間が何よりも嬉しくて、楽しかった。

「闇の書の力なんて、私はそんなんいらん。それに力をもらってもわたしはなーんも望んでへんよ。今の幸せがあればそれでええ。・・・魔法のこととか、私は魔導士ちゃうから全然分からへんけど・・・周りにご迷惑がかかるんやろ？そんなんやったらよけいや。せやから、なんも望まん代わりにこれだけ守ってほしい。守ると言うよりお願いや。“主はやては闇の書の完成も戦いも望みません。”だから、みんな戦かったり傷ついたりせんとってほしい。・・・約束やで？」

はやてはそう言ってほほ笑んだ。
あたしらを代表して、シグナムが「騎士の誇りにかけて」って誓ってたっけ。
もちろんはやてと交わした約束を破る気なんて、あたしらには微塵もなかった。
主の命令ってこともあったけど、これはそういうのだけじゃなかった気がする。

「ヴィータ、もう開けてもええよ。」
「！」
はやてがあのとき買ってくれた“のろいウサギ”って言うウサギのぬいぐるみ。
あの日からこのウサギとは、お風呂以外はいつも一緒にいる。
甲冑（戦闘服、もしくはバリアジャケットとも言う）の帽子にもあしらってくれたんだ。

「甲冑？」
「はい。我らは武器は持っていますが、甲冑は主に賜わらなければなりません。」
「自分の魔力で作りますから、イメージしていただければ。」
「そっかー。私は戦わさへんから・・・・・そや、服でええか？ここはちょうど図書館やし、資料早速探さな。カッコエエん作ったげる、楽しみにしといてや！」

シグナムとシャマルが頼むと、そういってはやてが作ってくれたんだ。
資料集めにはツナとかアリシアも手伝ってくれた。
だからこれは、みんなの優しさがいっぱいつまった服なんだ。
ウサギと甲冑に日常。
家族の幸せそうな光景や笑顔が見れることが、あたしにとっての幸せになってた。

冬のはじめ、１２月の頭頃。
その当たり前の幸せが突然崩れ始めた。

「なぁ、シャマル！シャマルの魔法でどうにかなんねーのかよ！治療すんの得意だろ？」
「・・・私の魔力では、無理です。」
強い力で私をゆすりながら、ヴィータちゃんが今にも泣きそんな顔でそう言った。
私達としたことが・・・大変なことを忘れていた。

「今すぐにでも魔力を集め、闇の書を完成させない限り主は死んでしまうだろう。闇の書と主は密接に繋がりすぎている。」
「だったら今すぐ行こうぜ！」
「・・・間に合うかどうか・・・。」

闇の書は、私たちヴォルケンリッターの実体化を維持させるために主からわずかずつ魔力を奪っている。でも魔導師じゃないはやてちゃんの場合、その影響が人体に出てしまった。
はやてちゃんの原因不明の足のマヒによる歩行障害は、魔力を集めてほしい闇の書のせいだったんだって。
どうしてもっと早くに気付けなかったのだろう。

「間に合うかどうかはやってみねぇと分かんねぇじゃねぇか！」
「そうですけどでも・・・。」
「ヴィータに同意だ。やる前からあきらめてどうする。闇の書を今すぐにでも完成させて主はやてを本当の主として闇の書に認めさせれば、病の回復・・・までは行かなくとも、麻痺を進行を止めることは出来る。」

お医者さんの診断で、はやてちゃんの足のマヒが体の上へ上へと進行していることが分かったと言われた。
このままでは臓器が麻痺し、死ぬだろう・・・と。
信じられなかった。

「確かにそうだ。・・・主はやて、一度だけあなたの命に背きます。我らの勝手をどうかお許しください。」

その日の夜。
私たちは、とある高層ビルの上で誓った。

「我らにできる事は、あまりにも少ない・・・だが、主をむしばんでいるのは闇の書の呪い。」
「はやてちゃんが闇の書の主として誠の覚醒を得れば！」
「我らが主の病は消える。少なくとも、進みは止まる。」
「はやての未来を血で汚したくないから、人殺しはしない。だけどそれ以外なら・・・なんだってする！！」

主の幸せのために。家族の幸せのために。
ただ一度だけ主との誓いを破ると。主を闇の書から救うと。
守護獣たる私ももちろん、誇りのすべてをかけて誓った。

あの日、私たちの運命は大きく変わったのだ。

第３５話：あの頃のお話なの（後書き）

「漆黒」

1月7日の誕生色

情熱・才能・想像力という意味

目標に向かってチャレンジする発想豊かな情熱家といわれる

（『誕生色大辞典』より）

第３６話：明かされる事実なの

「なのは、ユーノ。君達に来てもらったのはほかでもない、今回の事件の敵がはっきりしたからだ。」

ここはフェイトやクロノ達が地球での本部（仮）として利用している、とあるマンションの一室。
そこでは神妙な面持ちをしたクロノがいた。

「敵・・・クロノくん、その敵って？」
「うん。まずはこれを見てほしい。エイミィ！」
「はいはーい！」

モニターに映し出されたのは、前回の戦闘で突然現れて結界を破壊した黒い雷撃。
なのはとフェイトはアルフの魔法のおかげでこの攻撃によるダメージはゼロだ。
ユーノは自分の身は自分で守ったため、こちらも無傷。

「これがどうかしたの？」
「実はね、この魔法と同じものが過去に使われていたことが分かったんだよ。」

エイミィ曰く、クロノの指示で検索したところ飛んでもないモノがヒットしたのだという。
そのとんでもないモノとは。

「第一級捜索指定ロストロギア『闇の書』。今回の事件の犯人はこいつで間違いない。」
「で、でもでも！私が戦った相手は女の子であって、そんなんじゃなかったよ！」
「まずはボクの話を聞いてほしい。」
この一言でみんなが黙り、クロノに視線が集中した。
「いいかい。これは見えない敵と戦っているようなものなんだ。」
闇の書は転生を繰り返しており、破壊することはほぼ不可能。
転生先は新たな主のもとで、それはランダムに行われるうえに主が発動しなければ魔力反応がないため探すのは困難である。
しかも闇の書には４人の守護騎士がおり、常に主と闇の書を守っている。
「この守護騎士は、闇の書の防衛プログラムが実体化したものだ。人間じゃない。」
「ええっと・・・ということは？」
「・・・主を見つけ出さないと、いつまでたっても終わらないってこと？」
「そういうことになるね。」
守護騎士は、記録に残っている限り自らが感情を持つことはなく、ただただ主に従って動く。
つまり主を見つけ出して捕まえれば、この事件は解決だ。
「・・・でもヴィータちゃんからは強い意志を感じたよ。自分から動いてるって感じで。」
「シグナムもそうだった。」

「あたいもアイツが命令されてるって印象は受けなかったよ。」

ところが、なのは達はその考えをあっさりと否定した。
主がどうなのかは分からないが命令されて動いているわけではないのではないか、と。
彼女たちはもちろん知らないが、それが正解だ。
シグナム達は主はやてを救うために勝手に行動しているのだから。
・・・重要なことを忘れたままで。

「どっちにしろ、闇の書を完成させるわけにはいかない。」
「完成したらどうなるの？」

そう、この書は完成させてはならないのである。
プログラムが狂った今の闇の書を。

「もともと闇の書は魔法に関する知識でページを埋めて、それを永遠に受け継いでいくために生み出された物なんだ。だから闇の書は何度破壊されても次の主を求めて転生を繰り返すように作られた。」

だが、狂ってしまった。
知識と力を欲した者達によってプログラムは書き換えられ、それを繰り返されていくうちに『記録するための本』は『破壊するための本』になり下がった。
書のページをすべて魔力で埋めて完成した闇の書が最初に食らうのは・・・自らの主。
主を糧に本来の姿を現した闇の書は、取り込んだ主が死ぬまですべてを破壊しつくす。
破壊の限りを尽くした書は再び転生して新たな主を選ぶ。
繰り返される悲劇、終わることのない無限ループ。
今の闇の書は、主を殺し世界を壊すただの厄介な殺戮マシーンへと

変わり果てた。

「闇の書の力は純粋な破壊にしか使えない。そんな力を欲する人なんてもういないよ。」
「じゃあどうやって探すの？」
「ちょっとまって、なのは。その前にクロノに聞きたいことがあるよ。」

フェイトが突然そう言った。
何か気になることがあったらしい。

「守護騎士は４人、なんだよね。」
「ああ。まちがいない。」
「でも最初にシグナム達に遭遇した時、逃げた魔力反応は５つだったんだよね？」
「あ・・・。」

なのはが声を上げる。
もしやその反応が主なのではないのか、とフェイトは思ったのだ。
ところがその考えはあっさりとクロノに否定された。

「その可能性も考えた。でもあの時主がでてくるメリットはなかったはずだし、この世界にそんな高い技術を持った魔導士がなのは意外にいるとは考えられない。」
「（少なくとも一人はいるんだけどなぁ）そっか・・・。」
「じゃあ誰？」
「おそらく協力者がいるんだろう。正体は分からないけどね。」

クロノの考え、半分正解。

「とにかく今の僕たちのやるべきことは闇の書の完成を阻止することだ。みんな、気を引き締めてかかること。相手は強敵だ、油断するな。」
「うん！」
「はい！」

元気に返事をした2人を見ながら、クロノはここにいないリンディの代わりに指示をとばした。

「これから管理局本部に戻るから、ユーノはリンディ提督が戻ってくるまでボクとエイミィと一緒にここで待機しててほしい。頼みたいこととそれを手伝ってもらう人の所へ行く。なのは達は動きがあるまで通常の学校生活を送ってくれてて構わない。何かあったらフェイトを通して連絡する。」
「「了解！」」

管理局の握る真実。
ツナ達が気付くのは、今日か明日か・・・最後まで気付かずに完成させてしまうのか。
今、最後の戦いに向けて歯車が動き始めた。

（にゅにゅ？ここどこ～！）

漆黒の書に隠された光。
主を、そして書を救う最後の希望。
異世界の旅人の探し物。

（だれかっ、誰かここから出してよ！）

蒼き少女は、闇の中でひたすらもがいていた。

第３６話：明かされる事実なの（後書き）

「アクア」

7月4日の誕生色

静穏・崇高・自己発展という意味

心理状態を上手にコントロールできる人と言われている

（『誕生色大辞典』より）

第３７話：希望と絶望なの（前書き）

最近寒いです。
そろそろ冬ですねぇ。

第37話：希望と絶望なの

あの日から数日が経った。
相変わらずクロノくん達から連絡は来ていない。
ヴィータちゃん達に、また会えるかな。

「おはよ、ツナ。」
「おはよう綱吉くん。」
「え、と・・・お、おはよう、ツナ。」
「・・・おはよう。」

それはともかく、私にとってはその日もいつも通りの朝だった。
でもすずかちゃんたちにとってはそうじゃなかったみたい。

「綱吉くん！私、昨日の夕方シャマルさんから聞いて・・・はやてちゃんが入院したって・・・」
「えっ！はやてってすずかの友達の？」

はやてちゃんって言うのは、最近すずかちゃんが図書館で出会って仲良くなった隣町の子だ。
明るくて優しい子だからそのうち私たちにも紹介してくれるって言ってたばかりだ。
何でも足を悪くしていて車椅子生活なんだとか。

「・・・うっかりベッドから落ちて少し頭を打っただけだ。ただの検査入院だから大したことない。心配するな。」
「そっか。それならいいんだけど・・・。」
「ってちょっと待ちなさいよ、何でツナがそんなこと知ってるの？

すずかの友達でしょ？」

アリサちゃんが不思議そうに聞き返した。
そう言えばそうだ。

「はやてはオレの親戚で、こっちに引っ越してきてから一緒に暮らしてる。」
「へぇ～。」
「そうだったんだ。」
「そういうことは、先に教えてほしいの。」

それから私たちは、はやてちゃんのお見舞いに行こうということになった。
せっかくだからこの機会に紹介してもらおうと、アリサちゃんが言いだしたから。
病院であんまり騒がしくするのはどうかと思うけど・・・はやてちゃんが喜んでくれるならそれもいいかも。
楽しみだな。フェイトちゃんも嬉しそう。

「じゃあ、明日の放課後はやてのお見舞いに・・・レッツゴー！！」
「「「おーっ！！」」」
「・・・あんまり煩いと行かせないからな。」

綱吉くん何気に厳しいの。

「なのはは長距離砲撃が得意だ。届かないと思っていても、飛んでくる。・・・逆にフェイトは近距離戦闘が得意だ。足りない破壊力をスピードで補ってくるから、気を抜いたらおしまいと思え。」

今日の朝、ツナが唐突に言った言葉だ。
そんときは起きたばっかりで頭が動いてなかったんだろうな。訳分かんなかったけど、今はちゃんと分かる。
ようは油断すんなってことだ。

「んなこたぁ百も承知なんだよ、バカマグロォッ！」

目の前の敵をぶっ潰しながら思いっきり叫んでやった。
スッキリはしたけど・・・そういやなんでマグロって叫んだんだろ、あたし。
まあいいや。

「う～ん。そんなことより、なんか大事なことを忘れてる気がすんだよな・・・。」

はやてに関わるような重大な何か。
今潰したばかりの敵から魔力を収集しながら、考えてみた。
でもだめだ。記憶に靄がかかったみたいでちっとも思いだせねぇ。

「とにかく今はこれがはやてを救う最善の策なんだよな。」

あたしは呟きながら砂漠の砂を蹴って、次の標的のもとへと向かった。

「くっ・・・ヴィータが手こずるわけだ。」

目の前の生物はなかなかの魔力の持ち主だが、いかんせん強い。
普通に倒すなら造作もないことだが蒐集のために、潰してしまってはいけないからな。
力加減が難しい。

「行けるかシグナム？」
「大丈夫だ。ザフィーラは他のヤツをたのむ。」
「ああ。・・・今朝の綱吉の言葉、覚えているか。」

無論。
テスタロッサのスピードはなかなかのモノだ。
始めから油断などしない。

「お前の主はそんな騎士ではないだろう、レヴァンティン？」
「Ｙｅｓ，ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ．」

もちろんだと答えてくれた私の愛刀。
やはり私のことをよく分かってくれている。

「管理局のあの４人は蒐集済みだったな。」
「・・・。」
「安心しろザフィーラ、いくら私とてこの状況で意味のない行動は

とらん。もしテスタロッサに出くわす様な事があれば、隙を見て撤退する。」

それで満足したのか、ザフィーラは別の場所へ魔力を求めに行った。

「主はやて、もう少しの辛抱です。あなたにこれ以上寂しい思いはさせません。どうか今だけ・・・。」

そうして私は再びレヴァンティンを構え直し、戦闘を再開した。

「綱吉くん、今回の事件の犯人が分かったんだって！」

「・・・犯人？」

なのはが綱吉に語ったことは、クロノが先日なのは達に語ったことだ。

闇の書についてのあの部分。

なぜなのはがツナにこんな事をしゃべっているのか？

理由は簡単、なのはに力を貸して欲しいとツナが頼まれたからだ。

もちろん力を貸すとはいっても裏方だから、あくまで情報収集という形になっているのだが。

「・・・主を、食らう？」

「そうなの。だから、もしも闇の書の主さんを見つけたら教えてほしいんだ。」
「私は、どうしてこんなことをするのか聞きたい。」
「わかった。できるだけ当たってみよう。」

ツナの快い了承の言葉に、心から嬉しそうな表情をうかべなはのはとフェイト。
それに答える様に微笑むツナだが、本当に心から笑っているはずがない。
はやてが主だとどうして言えようか。

「あっ、そろそろ帰らないと！バイバイ綱吉くん！」
「じゃあね、ツナ。」
「フェイト、なのは。また明日。」

嬉々とした表情を浮かべる2人を、複雑な表情をした少年が最後まで見送っていた。

「ねぇフェイトちゃん。アレ、なんだかわかったの？」

ツナと別れて帰路につく2人は、小さな声でそんなことを話していた。

「・・・ううん。まだ、何も。」

「そっかぁ。」

なのは達のいうアレとは、数日前にさかのぼる。

「なに、あの雷!?結界壊れるよ!」

このままでは結界の覆っていない部分にまで攻撃が広がり、本物の町が大変なことになる可能性があった。

でも内部にいる私たちじゃどうしようもない。

慌てていたその時。

「ムーンライト・・・ブレイカー!!」

「!?」

突然どこから遠くから声が聞こえて来て。

微かだったからもしかしたら違うことを言ったのかもしれない。

そこはともかく。

一瞬だけだったけど、結界をつき破った黒い雷にぶつかる青っぽい光が見えた。

ただ、すぐに目の前がアルフの防御結界で覆われてよく分からなくなった。

「・・・ただいま。」
「おかえり、ツナくん。」

ツナが家につくと、夕飯作りの途中のシャマルが出迎えた。
入院中のはやてはもちろん知らないが、今日もシグナム達は蒐集に出ていていない。
よって今家にいるのはツナとシャマルだけだ。
え?アリシアはいないのかって?
いないよ。スイクンとイーブイを引き連れてどっか行ったから。

「ツナくん。ちょっといい?」

シャマルが鍋をかきまぜる手を止め、火を消してからこちらに近づいて来た。

「今さらかもしれませんけど、ちょっと思い出した事があって。シグナム達がいないから、先に聞いてくれる?」
「・・・わかった。」

曰く、シャマルが闇の書の力を使って結界を壊したあの夜。
気になるものを見かけたという。

「チラッとしか見えなかったんですけど、結構ガタイのいい男性が管理局の魔導師らしき男の子に攻撃を仕掛けてたんです。」
「管理局の・・・?」

詳しく聞いてみると、その少年はなのはが以前言っていた『クロノ・ハラオウン』という魔導師の特徴と一致した。
が、男性の方についてはツナの記憶には何も引っ掛からなかった。
シャマルが目撃したことによると、まるでこちらに味方してくれているようだったという。

「闇の書は・・・完成した後他人の手に渡るとどうなる？」
「どうもしませんけど、その他人には管理者権限がないので闇の者の力を使うことはできないわ。力を使うことを許されているのは主だけ。権限の無い人が持ってもただの本よ。」

つまり、その男の目的は別にあるということだ。
手に入れてもメリットの無いモノを、わざわざ欲しがるだろうか。
普通は欲しがらないだろう。

「・・・ところで、シャマル・・・しばらくシャマル達ははやてのいる病院に近づかない方がいい。」
「え、どうして！？」

これ以上考えても答えがでなさそうだと感じたツナは、話題を変えて今日の学校でも出来事を話すことにした。
学校の出来事と言っても、そんな軽い話ではない。

「くわしく、教えて。」

ツナはとりあえず、今日なのは達から聞いたこととなのは達が何も知らずにはやてのお見舞いに来ようとしていることを話した。
シャマルはなのは達の名前を知らないので、あの時の白い魔導士と金色の魔導師だと伝えた。

「そんな！ど、どうしましょう！はやてちゃんが、はやてちゃんが・・・！」

「・・・落ち着け。お見舞いの方は、しばらくの間はやてのもとへ通うのを控えればバレはしない。いざとなったらオレが連絡する。」

「で、でも闇の書の話の方は！このまま完成させればはやてちゃんは死ぬ・・・集めなくても死ぬなんて、そんな・・・あんまりよ！」

忘れていたのは自分達の失態だが、どちらにしろはやては助からない。

シャマルは、喚きながら・・・その場に泣き崩れた。

自分達には主を救うこともできないのかと。

なんのための守護騎士なのか、と。

「・・・。」

「うぅっ・・・ごめんなさい、はやてちゃん・・・！」

泣き続けるシャマルにハンカチを渡しながら、ツナがこう言った。

「まだはやてを救える可能性はある。」

第３７話：希望と絶望なの（後書き）

「菜の花色」

２月２３日の誕生色

人道主義・不言実行・ロマンチストという意味

人々に歓喜の爆発を起こさせる行動派といわれる

（『誕生色大辞典』より）

第３８話：とっておきの秘策なの！（前書き）

長くなっちゃいました。

何回アニメ見直しても、リイン様マジぱねぇ。

第３８話：とっておきの秘策なの！

「まだはやてを救える可能性はある。」

ツナは確信を持った口調でそう言った。
驚いたシャマルは、慌てて聞き返す。
本当なの、とすがるような声でただ一言そう言った。

「ようは、闇の書の狂ったプログラムを書きかえられればいい。」
「でもそれができないから・・・管理局が未だに私たちを捕まえられてないんでしょう。」

普通に考えれば闇の書のプログラムを書き換えるのは不可能だ。
なぜか？
先程もいったように、闇の書をいじるには管理者権限が必要となる。
権限があるのは闇の書の主だけだ。
ところがその肝心の主は闇の書が完成して権限を得た瞬間、ろくな事も出来ずに仏様になる。
だからといって外側から無理やりこじ開ける（いわゆるハッキング）と、すぐに転生されてしまう。
メインプログラムをいじることはもはや不可能なのである。

「いじろうとするから失敗する。・・・壊せばいいんだ、プログラムを。」
「え？」

そんなことしたら私たち消えちゃうじゃないですか！と喰ってかかるシャマルをさらっと流し、ツナは淡々と話しを進める。

「まずは転生プログラムを破壊する。」

「どうやって！？」

真っ青な顔をして慌てふためくシャマルとは対照的に、ツナが微かに微笑んだ。

何か秘策があるようだ。

「闇の書の中に、異物が混じっていることがわかったんだ。そいつとナッツに協力してもらう。」

ちんぷんかんぷん。

結局、彼女はこれは自分の手に負えないと、シグナム達が帰ってくるのを待っていることにしたのだった。

「えっ、管理局とぶつかった？」

「ああ。用はないからすぐに撤退したが・・・少し気になるヤツがいた。」

1時間後、シグナム達が他世界での魔力蒐集から帰ってきた。

すぐにシャマルは今までの事をすべて話した。

それで今彼女たちはなにをしているか？

5人は、戻ってきたアリシアを一足先に寝かせるまでの事を済ませてこうして応接間で真夜中の会議を開いているというわけだ。

「高町なんとかって奴ホントしつこくてさ・・・そんときに出てきたのが、その男だった。」

「私も、テスタロッサに見つかってどうするべきか考えていた時だ。得体のしれない男に「早急にここから立ち去れ」といわれてな。テスタロッサが男に気をとられている間に撤退してきた。」

「こっちもだ。アルフという使い魔との交戦中に助けられた。」

彼女たちはひとまず闇の書云々は置いておいて、謎の男について話し合っていた。

この男が味方かどうか分からない今、下手をすれば主はやてにも危害が及ぶかもしれないからだ。

「・・・同じ特徴の男をシャマルやなのはの仲間が見ているが、なのはたちも見覚えはないと言っていた。管理局の人間ではないか・・・あるいはよく知る身近な人物が幻覚で姿を誤魔化しているか・・・それか、なのは達の知らない局員か。」

「局員ということは絶対にないだろう。」

ツナのその考えを、シグナムがバッサリと切り捨てた。

「根拠はあるのかよ、シグナム。」

「最後まで聞け、ヴィータ。まず、私たちを庇うような真似をしても管理局に一つもメリットがない。次に・・・局員が局員を瀕死に追い込んだりはしないだろう。」

「どういうことだ。」

局員が局員を瀕死に追い込む。シグナムは今そう言った。

そして、これを聞いたツナの顔色がサアッと変わった。

「テスタロッサが瀕死の傷を負った。私が撤退するための隙を作るためだけに、だ。」

「・・・。」

シグナムが見たのは血まみれのフェイトの姿だけだから本当に瀕死の重傷をおったかどうかは定かではない。

が、大きなけがを負ったことは間違いないという。

「・・・。」

「・・・。」

外の木々が擦れ合う音が、部屋いっぱいに響く。

今夜は大分風が強いらしい。

「なぁ！そんなことより今ははやての命の方が先だろ！？」

最初に木々の音をさえぎったのはヴィータ。

「あたりまえだ。闇の書のページはあと４０ページ。」

「ツナ！あたしらはこんな所で、振り上げた拳を下ろせないんだ！ツナの案に、闇の書の完成は必要なんだろ！？でなきゃ何のために誇りを捨ててまであたしら頑張ってきたんだよ！！」

シグナムの比較的落ち着いた声に続くようにヴィータが喚き散らす。

いったん落ち着きましょう、とシャマルになだめられてようやく落ち着いた彼女に、ツナは肯定の意を返した。

「今のままでは、闇の書のどのプログラムが異常なのか分からない。

・・・だから、完成させて確認する必要がある。」
「はやては、死んじゃわないよな・・・？」
「完成直後に暴走するとは考えづらい。」

シグナム曰く、闇の書には管制人格というのがあるらしい。
ならば完成直後の数分間だけでも、その人格が働ける時間があるハズだと考えたのだ。
八神家が再び静寂に包まれる。

「・・・絶対に主はやてに本当の笑顔を取り戻すぞ。」

響き渡った守護騎士の将シグナムの声に、全員が深く頷いた。

「ユーノ、何か分かったか？」
「うん。やっぱり調べればちゃんと書いてあるもんだよ。」

ツナ達が会議を始める１０時間前。
時空管理局・無限書庫。
その名の通り、無限に近い数の書物が保管されている空間だ。

「本があっても整理されてなくちゃだめだよねー。」
「それにしてもあなた、スゴイ詮索能力。時間があったらここの本、整理してほしいわね。」

ユーノの傍らでぷわぷわと浮かびながら本を棚から取り出しているのは、グレアム提督の双子の使い魔でクロノの師匠でもある、リーゼロッテとリーゼアリア。猫を元にしているので、彼女たちの耳は獣の大きな耳で尻尾も生えている。

「これはうちに代々伝わる能力なんです。」
「ああ～、スクライアんとこの子だっけ、キミ。」
「はい。」

それはともかく、とユーノが自身が調べて分かったことを語り始めた。

「ええっと・・・。」

まず一つ目。
闇の書は本来の名ではなく、本当は『夜天の魔導書』という名であるという。この魔導書の本来の目的は、各地の優秀な魔導にを記録するために主と旅することだったということ。
二つ目。
闇の書には４人の守護騎士がいて、その騎士たちはプログラムが実体化した擬似生命体であるという。騎士たちが自らの意思で行動をすることはなく、主の命を裏切るようなことをしたという記録は残っていないのだということ。

「・・・闇の書の封印とかについては？」
「それはまだ調べ中だけど、たぶん出て来ないと思うよ。」

封印不可能と言われる闇の書なので、そういう記述は残っていないだろうという。

まあ確かにそうなので、クロノもそれ以上追及しなかった。

「とりあえず、なのはとフェイトにもこの事伝えておくよ。」
「へぇ～。クロすけに彼女がいたんだ。がんば～っ♪」
「違うよ、ロッテ！からかうな！」
「可愛い弟子を応援してあげただけだよぉ～♪」

ケタケタと笑う師匠を放っておき、クロノはユーノから「これ、なのはに渡してほしいんだ。」と頼まれた紙を受け取って、部屋を後にした。

次の日、日のほとんど沈んだ夕方。
とあるビルの屋上に４つの人影があった。

「綱吉はまだか？」
「ああ。友達に呼ばれたんだとさ。」
「さっきメールで、後２０分ぐらいで来るって。」

いたのはヴォルケンリッターの４人。
彼女たちはとある覚悟を決めていた。

「最後に闇の書に捧げるリンカーコアは我らのものだ。一足先に我らのだけでも捧げておこう。最悪綱吉は明日でも行けるからな。」

「シャマルはちゃんとあたしらの手当てしてくれよ。寝込んだなんて知られたらはやてが心配するかんな。」
「たのんだぞ、シャマル。」
「わかってますよ。」

あと２０ページとなった闇の書。
その残りのページを、シグナム達の魔力で埋めようというのだ。

「少しだけなら私たちが消滅することもないでしょうし、５人で分け合えば十分２０ページは埋まるはずです。」
「ああ。明日、シャマルの分を蒐集すれば完成だ。」

全員蒐集してしまえばこちらが危ないので、今日は治癒係のシャマルを除いたシグナム、ヴィータ、ザフィーラ、綱吉の分を収集する。
蒐集後はシャマルの転移魔法でうちまで帰る、という手はずだ。
こんなビルの屋上にいるのは何かあった時のためなのである。

「受け取れ闇の書！我らの魔力を主に捧げる！」
「闇の書・・・蒐」

そのとき。

「・・・えっ？」
「なんだこれ！？」
「バインド・・・やられたっ！」

姿を現したのはーー

「愚かな騎士たち。」
「哀れな騎士たち。」

「テスタロッサ！」
「高町・・・えっと・・・高町なんとか！」
「どうしてここがばれたの！？」

そう。
高町なのはとフェイト・テスタロッサである。

「壊れたことにも気付かずに。」
「無駄なことを。」

違和感を感じるこの２人。
だが、シグナム達が勘違いするには十分だった。

「闇の書のことか。壊れている事なら知っている。だからこそ我らは魔力の収集を続けたのだからな！」
「そうだ！お前たちにとやかく言われる筋合いはねぇっ！」

だが、なのは達の顔は嘲笑を浮かべたまま動かない。
気がつくとなのはの手には闇の書が握られていた。

「あっ！」
「機械が何を知ろうと関係ない。」
「私たちは、壊れた機械を粉々に壊すだけ。」
「やめろ！」

闇の書が怪しく光る。
そして、シグナム達４人のリンカーコアが表に姿を現した。

「闇の書にその身を捧げて消えろ。」
「闇の書、蒐集開始。」

「やめろぉぉぉぉぉぉっ！！！」

シグナムの叫びが、誰かに届くことはなかった。

「綱吉くん、フェイトちゃん！」

3人はいつもの公園の高台にいた。

ここは、毎日なのは達が特訓に使っている場所なのである。

「なのは！今日はちょっと遅かったね。何かあったの？」

「・・・。」

一足先に来ていたフェイトが、心配そうに声をかけた。

ツナは夕方にもかかわらず眠そうにしている。いつものことだ。

それはともかく。

「昨日の夕方、ユーノ君から手紙が届いたの。クロノくんが届けてくれたんだけど、お礼を言おうと思ったらもうミッドチルダに帰っちゃったらしくて・・・。」

「じゃあ私から伝えておくよ。家に通信用の機器を置いて行ってくれてるから。」

「フェイトちゃんありがとう！よろしくね！」

お礼を告げた後なのはが取り出した白い封筒には、丁寧な達筆で『なのは達へ』と書かれていた。
ユーノは字をかくのが得意なようだ。
それで中身はというと。

「あ、あれ？」
「白紙・・・だね。」
「・・・部外者には読めないようになってるのか。」

ということは、結構大事な情報が書かれているのだろう。
ワクワクしながら待ってみるが、一向に文字らしきものは浮かんでこない。
特別な方法がいるようだ。
困っていたその時、ようやく何かが浮かんできた。

「あ、なにか浮かび上がったよ！」
「・・・記号？ミッドチルダの文字か、フェイト。」
「ううん・・・わたし、こんなの知らない。教わってないよ。」

絵なのか記号なのか文字なのかよく分からないモノの羅列が次々と浮かんでくる。

「・・・フェイク、かもしれない。」
「う～ん。じゃあ、どうやったら本当のメッセージが読めるんだろう？」

ユーノは魔導師だ。
だとすれば、何か特別な呪文を唱えれば読めるようになるのではないか？
フェイトがそう提案した。

が、３人ともそんな魔法は知らない。

「ユーノ君が、私たちが知らない魔法でしか解けない暗号を送ってくるかな？」

「でも、だからってゆるくしたらクロノとかに読まれちゃう可能性があるんだよ。」

「そっか・・・。」

「・・・。」

３人が小一時間考えた末出した結論は。

「やってみなきゃ分かんないよ！」

「ああ・・・特定の魔力に反応して浮かび上がるのかもしれないな。」

「そうだよ。何かやれば結果は出るよ。」

そんなわけで３人は、早速一人ずつこの白紙に向かって手をかざし始めた。

目をつぶって集中すると、手にそれぞれの魔力が集まって輝きだす。

そしてついに。

「キタ！」

「そっか、３人の魔力をいっぺんに送らないと読めない様になってたんだね。」

ユーノは３人がきちんと揃って読んでほしかったようだ。

それほど大事なことなのだろうか。

早速、浮かび上がった文字――ご丁寧に日本語で書いてある――をなのはが電灯にかざして読み始めた。

「なのは、フェイト、ツナへ

これが読めたということは、3人ともそこにいるんだね。よかった。じゃあ早速、君たちにはボクが調べたことをこっそり伝えておくね。まず、闇の書は本当の名前じゃない。正式名称は“夜天の魔導書”っていうんだ。今じゃもうすっかり忘れられてしまっているみたいだけど、もともとこの魔導書は色んな偉大な魔導師達の力を記録するために作られた健全なものだったんだ。でも、歴代の主の誰かが魔導書の持つ力に気づいたんだろうね。プログラムに改変を施した。それを繰り返していくうちに、今の狂った闇の書に変わり果てた。次に、あの時の騎士と名乗った4人。あれはクロノの言った通り人間じゃない。プログラムが実体化しただけだから、意思はあるけど絶対に主の言葉には逆らわないんだって。

・・・っと、ここまではクロノからこのまえざっくりと聞いたりしてるからしってるとおもう。それにクロノ達にも話した。

本題はここからなんだ。

まず、闇の書には様々なプログラムがあって、それをメインプログラムと闇の書の管制人格が統括してたんだ。でも、度重なる魔改編で統括されてたはずのプログラムが狂ってる。すべてのプログラムが変なんだけど・・・とくに防御プログラムが群を抜いて異常だ。資料を見る限り、その防衛機能に異常をきたしてるので間違いない。管制人格の意思に背いて暴走してるのはたぶんそこだ。過去の書物を結構読み返したんだけど、この管制人格が暴走したという記録は残ってない。つまり、暴走してるところと管制人格は全く別のプログラムなんだ。どうにかしてこの二つを切り離せば、闇の書を捕獲できるとボクは思ってる。うまくいけば、だけど。

以上だよ。

いずれクロノ達にも伝えるとは思うけど、とりあえず今はなのはたちの『闇の書の主探し』のヒントになればと思う。
遠くからで手伝えなくてごめん。だけど、応援してる。
何かあったらアルフと一緒にすぐ行くからね。

ユーノ・スクライア」

長い長い手紙を読み終え、なのはがふぅとため息をついた。

「つかれたよ～。でも、ユーノ君ありがとう。」
「・・・ヒミツでこんなことしていいのか。」
「見つからなければ大丈夫だよ。それに、なのはは民間協力者でツナは管理局の知らない部外者、でしょ？わたしは大丈夫だから。」

とにもかくにも、ユーノがこっそりくれた情報。
これは、なのはたち・・・とくにツナに大きな可能性を示してくれた。

「あれ、もうこんな時間！他の話は明日か電話がメールでしよっか。」
「そうだね。また明日。お、おやすみ。なのは、ツナ。」
「・・・おやすみ、なのは、フェイト。」

ツナは2人と別れ、約束のビルへと急いだ。

（シグナム達に伝える必要があるな。それにしても、なんだこの悪寒は・・・？）

同じころ、海鳴市のとあるビル。先程シグナムが悲鳴を上げたビル。
そこでは恐ろしいことが起こっていた。

「ここどこなん、ザフィーラ・・・？あっ、ヴィータ！？」

服だけが揺れて姿の見えない3人と、少女の目の前の空中でバインドにつかまったままピクリともしないヴィータ。
そして、ヴィータの両脇にいたのは――

「キミは病気なんだよ。闇の書の呪い、っていうね。」
「もうね、治らないんだ。」
「なのはちゃ、ん？フェイト・・・ちゃん？」

ここにいるハズの無い少女二人。
はやてはもちろん気付かないが、この二人の纏っているバリアジャケットには違和感があった。
微妙に色彩が違うのだ。

「闇の書が完成しても、助からない。」
「キミが救われることは・・・ないんだ。」
「っ！？」

突然転移魔法で病室から連れて来られたはやてには、なにがなんだかわからない。
わかったことは、ザフィーラが倒れていることとヴィータかつかまっていることと・・・友人だと思っていたなのはとフェイトが静か

に牙をむいていること。

「ヴィータを放して・・・ザフィーラに何したん！！」
「この子たちはね。とっくに壊れてるの。私たちがこうする前からずっと、ね。」
「壊れてることに気づかずに、とっくに壊れた闇の書の機能をまだ使えると思いこんで、無駄な努力を続けてた。」
「無駄ってなんやねん！シグナムは、シャマルは！？」

フェイトが静かに顎をしゃくった。
はやてがその方角を見ると、そこにはシグナムとシャマルの服だけが風にぱたぱたとなびいていた。
あの服は、今日2人が着ていた服だ。
はやてはすべてを悟って、絶望した。

「壊れた機械は、役に立たないよね。」
「壊しちゃおう。」
「えっ！？や、やめ・・・やめてぇっ！！」

正面を向くと。
なのはとフェイトの手元には光輝くカード。
はやての制止も意に反さず、拘束したヴィータに近づける。
あのカードがなんなのかはやてにはさっぱり分からない。
でも、2人がしようとしていることは分かった。

「やめてほしかったら・・・」
「力づくで、どうぞ？」
「なんで、なんでやねん！なんでこんな・・・」

カードが光始める。

手を伸ばして止めようとするが、届くはずもなく。

「ねぇ、はやてちゃん。」
「運命って、残酷なんだよ。」

カードの光がさらに増す。
なのはとフェイトに止める気は、一切、ない。

「やめ、やめて・・・やめてぇぇぇぇぇっ！！！」

絶望、悲しみ、怒り。
負の感情に反応した闇の書が、はやての叫びと共に姿を現した。
足が動かないため始めからしゃがんだままのはやての足元に、ベルカの騎士と同じ形の魔法陣が出現。
黒い魔法陣から噴き上がった火柱のようなものにとりこまれてしまった。

「我は闇の書の主なり・・・この手に、力を・・・・・・封印、解放。」

それを満足そうに見届けたなのはとフェイトは、姿を消した。
彼女たちの目的は闇の書の発動だったのだ。
柱の中で、みるみるうちにはやての姿が変わっていく。

「ああ・・・また、全てが終わってしまった・・・。いったい幾度、こんな悲しみを繰り返さなければならないのか・・・。」

はやては、白い長髪に黒い服と翼をもつ女性――闇の書の管制人格と一体化してしまった。
女性がおもむろに右手を上げたかと思うと、雷を纏った真っ黒い魔

法の球体が出現しみるみる巨大化していく。

「我は闇の書・・・この力のすべては、主の願いをそのままに・・・・・ディアボリックエミッション。」

巨大化した球体がはじけた。

「闇に、染まれ。」

第３８話：とっておきの秘策なの！（後書き）

「瑠璃色」

８月５日の誕生色

人間性・穏やか・信頼・尊敬という意味

人に愛される人、信頼される人、尊敬される人といわれる

（『誕生色大辞典』より）

第３９話：闇の覚醒なの（前書き）

ハイパーなツナさんの特技が・・・明らかになるかもしれません。

だってあのドＳ家庭教師様の教え子ですもの。（意味深

第３９話：闇の覚醒なの

鮮やかな紅眼から涙を流しながら、彼女は呟く。

「主は。愛する者達を奪ったこの世界が、夢であってほしいと願った。我はただ、それを叶えるのみ。主には、穏やかな夢のうちで永久の眠りを。そして、愛する騎士たちを奪った者には・・・永久の闇を。」

――すべては、穏やかな眠りのうちに――

「シグ姉？シャマルお姉ちゃん？・・・ヴィータ、フィフィー？」

「・・・なんということだ。」

「ブ、ブイ・・・！」

知らないビルの屋上。

たまたまシグ姉たちが入っていってるのをみて、おもしろそうだな

ーって思ったからこっそりついて来た。
そして、カイダンのある・・・ええと・・・でっぱり？ってぜーったい屋上にあるよね。まったいらな屋上なんてないでしょ？
・・・とにかくっ！その後ろのカベから、ずーっとのぞいてた。スーちゃんとブイちゃんと一緒に。
でていこうかなーって思ってたけど、きっと何もできないんだろうなって思ったから。
止められなかった。お兄ちゃんなら止めてたんだろうな。
わたしのせいでいなくなっちゃったのかな？わたしの、せい・・・で・・・

「うわぁぁぁっ！！」
「やめるのだ、アリシア！」
「ブイイッ！！」
「お前は・・・主が愛しきもののひとりか。主と共に、安らかに眠れ・・・。」

思い切って元はやてお姉ちゃんだったヒトにつっこんでいった。
なんとかなるかも、っておもったけど。
やっぱりダメだったかぁ。
体が、きえてゆく。もう一回しぬのかな。

「まだ駄目ではない。その女――魔導書――に取り込まれたはやてを探すのだ！お前はまだ死なない！！」
「ブイっ！！」

ブイちゃんがわたしのムネにとびこんできて、スーちゃんがそういってくれた。
ずっとスーちゃんととっくんしてたからね。
わかった。信じるよ。

「うん・・・まってて ね、スーちゃん。ブイちゃん、一緒に来てくれるの？」
「ブイ！」

わたしね、知ってたんだ。
お兄ちゃんたちがはやてお姉ちゃんを助けるためになにかしてるんだって。
でも、わたしじゃきっと足手まといになるから。
だからだまって知らないふりしてた。
・・・しらんぷり、しなきゃよかった。
お兄ちゃんたちのお手伝い、したかったな。

「・・・そっか、今からやるのがお手伝いなんだ。」
「ブイブイ。」

はやてお姉ちゃんをさがすんだ。
見つけて、だきついてあげよう。しばらくそんなことしてなかったからいいよね。

「レマノフさんも、お手伝いしてくれる？」

今はわたしのなかにいるレマノフさん。
ずーっととっくんにつきあってくれた、わたしのおともだち。
何でこうなったのかはよく分かんないけど、レマノフさんが入って来てからはちょっとだけまほーが使えるようになったんだよ。ギンイロのひかりのまほーがつかえるの。
お兄ちゃんにもまだいってない、アリシアとスーちゃんとブイちゃんとレマノフさんだけのひみつ。
もっとうまくなってから教えて、びっくりさせるんだ。

『我はただの魔力の源となるロストロギア。もっとも、気にいった者でないと命をいただく。アリシア・テスタロッサ。貴様の内は随分と居心地がいい。』
「ありがとう！」
えへへー。
ほめられちゃった。

『これから我は、主アリシアを八神はやてのもとへ送る。うまくいくかどうかは分からぬ・・・が、確実に近づけるだろう。そのかわり、我の意思は失われる。』
「えっ、おくってくれるの？」
『汝ならば・・・我の力を正しく使いこなしてくれるだろう。・・・さらばだ、主アリシア。短い時だったが、汝と出会えてよかった。』
「え？」

みるみるうちに、レマノフさんが感じられなくなる。
・・・ちがうなぁ。レマノフさんはいるんだけど、キゼツしてるみたい。
いしきがないの。

「レマノフ、さん？どこ？」
『・・・・・さらばだ、主アリシア・・・ありが――』

レマノフさんにはいっぱいまほーおしえてもらった。
まだわたしがお礼、いってないよ。

「こちらこそありがとう、レマノフさん。」

レマノフさんのいしきが感じられなくなったとたんに、わたしは女の人がかまえた本のなかへと、消えた。

「どこに逃げようと・・・逃がしはしない。」

闇の書の意思が、再び高く右手を掲げる。
次に放たれたのは攻撃ではなかった。
魔法封鎖領域――強力な結界が海鳴市全域を包み込む。
流れる涙を拭きとりながら、闇の書は自身の腕を見つめていた。

「また暴走が始まる・・・それまでに、意識があるうちに、主の願いを叶えたい。」

自らの転移魔法で、シグナム達との約束の場所の近くまで来ていたツナ。

（・・・魔法封鎖領域・・・か。かなり強力だが・・・）

今まで感じたことのない。
冷たい、そしてどこか悲しさを含んだ魔力。
それでいて、怒りや憎しみも感じる。

「・・・ナッツ、ローザはまだ持ちこたえられそうか？」
「G、GAU。GAUGAU！」
「・・・わかってるさ。無茶はしない。」

肩の上で心配そうに唸る仔ライオンを優しく撫で、ツナはとあるビルの中へとはいっていった。
闇の書のたたずむビルへと。

「フェイトちゃん！」
「なのは、これは・・・。」

2人の魔法少女もまた、イレギュラーな魔力を感じていた。

「レイジングハート・エクセリオン！」
「バルディッシュ・アサルト。」
「「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ！」」

少しでも早くたどり着くために少女たちは何も知らないまま自らの武器を構えた。
闇の書の狙いを、知らずに。

「フェイトちゃん、ケガ大丈夫？無理ならまだ戦いはやめた方が・・・」
「ううん、大丈夫だよ。ユーノが手当てしてくれたから。」
「・・・そっか。」

ここだけの話？だが、ツナがフェイトの怪我うんぬんについて何もいわなかったのは、怪我をしていることは本来ツナが知っている情報ではないからである。
なのは達にしてみれば知らなくて当たり前。
・・・あれ、話がそれた。
やっぱそこは今更どうでもいいや。

「どうでもよくないよ！？」
「・・・なのは？」
「あっ、ごめん。なんでもないよ！」
「？」

ナレーションに突っ込み入れちゃだめだよ～。
これ小説の常識。

「ちょっと後でお話ししようか。」
「・・・？」

勘弁してください。
それより、フェイトが怪しがってますよ。
こんなことしてる場合でもないでしょうに？

「あああああっ！！急いでいこっか、フェイトちゃん。ごめんね！」
「うん・・・？」

シリアスな雰囲気壊れちゃったなぁ。
まあいいけど。

「だからよくないってば！まじめにやってよー！！」
「なのは？」

私は真面目にやってますとも。
ええ。

「スレイプニール・・・羽ばたいて。」

背中についていた烏の様に真っ黒い４枚の羽根が大きくなり、バサバサと体が宙に浮く。
目指す標的は、高町なのはとフェイト・テスタロッサ――と言いたいところだが、おそらく彼女にとっては主以外すべて敵なのだろう。
ある程度の高さまで来ると、彼女は右手を前に突き出し何かを唱え始めた。

「咎人たちに、滅びの光を。」

出現した魔法陣の色は・・・ピンク色。
しかも彼女が使えるハズの無いミッドチルダ式だ。
みなさん、この魔法陣に見覚えはないだろうか？

「星よ集え。すべてを打ちぬく光となれ。」

そうこうしているうちにも、どんどん魔力が右手の先に集まっていく。

この辺一帯を焼野原にでもする気なのだろうか。

「なにあれ!?」

「えっ・・・あ、あれは・・・!」

そのとき、ちょうどなのは達が闇の書のもとへと到着した。

しかし時すでに遅し。

もはや彼女は止まらない。

「貫け、閃光。」

「マズイ。なのは、しっかりつかまって!回避距離をとるよ!」

「えええ!?なにがどうなってるの?」

あわててなのはをつかみ、もてる限りのすべての魔力を振り絞ってフェイトが飛ぶ。

そんな彼女たちに気づいたのか気付かないのか。

身長の何倍もの大きさの球体となった魔力に向かって、何のためらいもなく彼女は腕を振り下ろした。

「スターライト・ブレイカー。」

吸収されたなのはの魔法。

それは思わぬ形で使用者本人に牙を剥いてきた。

「スイクン・・・どうしてここに？」
「成り行きだ。」

ツナがやっとの思いで屋上まで上りきると、そこには見覚えのある青い犬がいた。
事情を聞こうと口を開いたその瞬間。

「スターライト・ブレイカー。」

巨大な爆発音が背後から聞こえてきた。
もちろん、聞き覚えのある呪文も。

「事情は後だ、絶対に動くな！」
「スイクン！」

押し寄せるピンクの衝撃波。同時にツナの前へ走り寄るスイクン。
衝撃波を遮ったのは、もちろん蒼い結界。特殊なヤツではなくごく普通の結界だ。
ところが思った以上にこの魔法は強力だったらしい。
ピシピシと結界にヒビが入る。

「くっ。やはりロストロギアの攻撃をこんな至近距離で受け止めるのは不可能か。」

だが、時間は稼いだ。

「・・・ローザ、スピラーレ。力を貸してくれるか？」
「Ｙｅｓ．Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ！」
「Ｓｉ．」

一瞬にしてバリアジャケットを身に纏った彼の手には、空色の杖。
そして首には、緋色の二枚貝のネックレス。
ぶっちゃけスピラーレに外見的な変化は見られない。

「砕けるぞ、沢田！」
（・・・防御シールド、全開。）

振り上げた空色の杖の先端から同じ色の魔力が噴き出して、２人を衝撃から庇う。
スイクンの結界が呆気なく砕けたあともしっかりと守りきった。
どこからかカツン、と音がしたかなと思って顔を上げるとツナがその音に反応したように動かなくなった。

「・・・。」
「ふぅ、何とか耐えきったな。・・・沢田？」

ツナは、自らの杖を見つめたまま動かない。
何かあったのだろうかとスイクンが声をかけるも反応なし。
ようやく口を開いたかと思ったら、出てきた言葉はスイクンの想像とは違ったものだった。

「・・・ナッツ、これはパクリというんじゃないのか。」
「ＧＡＵ。」

参考には大分させてもらったがパクっちゃいないと、仔ライオンは

言い切った。

で、なぜツナがこんな質問をしたかというと。

答えはローザを見れば分かる。

「ベルカ式カートリッジシステム？なんで沢田のオンボロデバイスにこんな機能が・・・・・・・・・ああ、なるほど。」

「ＧＡＵ♪」

犯人はこの小さな科学者の仕業だ。

どこの人民共和国？とは言うまい。

たしかによく見るといろいろ異なっている部分があったし。デザインとか装填方法とか。

そこはいいとして、一体全体どこでそんなデータを仕入れてきたのかものすごく気になる。

「・・・。」

「どうしたのだ、沢田？」

仔ライオンがまたガウガウと喋ったようなのだが、生憎ツナ以外にはさっぱりわからんため慌ててスイクンが聞き返した。

そして、帰ってきた言葉はまたもや意外なものだった。

「・・・いつの間に他人のデバイスのデータを収集してたんだ・・・。」

「犯罪じゃないのか。窃盗。」

「ナッツ？まだ使ってないから犯罪じゃない、だって・・・？」

「沢田も大変だな。」

心の中で頭を抱える少年とは対照的に、得意げな仔ライオンがいた

とかそうでないとか。

「・・・それどころじゃなかった。スイクン、これは一体どういうことなんだ？何が起こってる？」

「さっき広域魔法攻撃を仕掛けてきたのが、闇の書の管制人格だ。愚か者が守護騎士４人のリンカーコアをすべて蒐集させて闇の書を完成させ、それだけでは飽き足らず八神はやてを転移魔法で無理やり呼び出し闇の書を解放させたのだ。」

超直感持ちのツナはおそらくこれで理解したのだろうと、そこまでスイクンは口をつぐんだ。

「・・・闇の――いや、夜天の魔導書はなにをしようとしてる？（暴走はまだしていない、か。）」

「主の願いをかなえるとかほざいていたな。」

「はやての願い・・・？」

スイクンから聞いた願いは、とんでもないこと。

それが本心ではないと、少なくともツナの友人なら全員が分かるであろう。

「まるでだだっ子だな。おそらくこちらの話など耳にも貸さんだろう。泣きながら言う言葉になんの説得力もないのだが本人は主の涙だと言い張っていたな、そう言えば。」

「・・・。」

これを聞いたツナの頭にとある方程式が浮かんだ。

【だだっ子（子供）＝教育】

ちなみにこの『教育』。彼の霧の片割れ曰く『アレのどこが教育ですか。調教の間違いでしょう？』とのことだが、おそらく沢田綱吉

本人にその気はないだろう・・・。
『どこぞの暗殺部隊のボスとかあの未来で勝手していた白髪とか煩い鳥頭風紀委員長がおとなしくなる教育なんてあるわけないでしょう。・・・ボクですか。どうでしょうね。クフフフフフ。』
なんか物騒なのは確かだ。

「・・・一つ聞きたいことがある。」
「なんだ？」

ツナが突如いいだした事は、いつになったら本来の年齢相応の姿に戻れるのか、ということ。
なんでもこの姿では魔力とか死ぬ気の炎とかが扱い使いづらいらしい。
闇の書相手に手加減なんぞしてたら死ぬだろうし、質問としては妥当だろう。

「まあ、確かにな・・・・・・いいだろう、好きなだけ暴れるがいい。」
「・・・スイクン、恩にきる。」
「そろそろこの世界にいるのも潮時だった。かまうものか。」

スイクンの蒼い結界がツナの足元に浮かびそして徐々に上へと上がっていく。
結界が通った後のツナの体は年相応の、１８歳の青年の姿になっていた。
バリアジャケットも若干デザインが変わっている。大きな変更点を上げるとすれば、白い手袋が装着されている所だろうか。

「大分大人げない戦いになるが、大丈夫か？」
「・・・いつも中学生に間違えられる。」

「なら大丈夫だな。（サラリ」

どの辺が大丈夫なのかはさておき。
おそらくその原因は母親譲りのその顔と小柄な体形のせいだろうということはさすがのスイクンも黙っておいた。

（・・・再教育の必要性を、少し観察してみるか。）

第３９話：闇の覚醒なの（後書き）

リボーン
「まあ、オレの教え子だしな。あんくれぇ当然だぞ。」

骸
「あんたのせいですか、アルコバレーノ！！」

「リーフグリーン」

１月１９日の誕生色

優しさ・自尊心・精神性という意味

何事も一生懸命な努力家と言われる

（『誕生色大辞典』より）

第４０話：反撃の星砕魔砲（スターライトブレイカー）なの（前書き）

ちょこっとオマケ話をば。

ツナさんさんの得意分野は、遠距離支援です。（遠くから同時にバインドを綺麗に決めてくれるとか）
あと、遠距離戦闘は苦手ですが近距離の格闘戦なら得意中の得意です。
本来の武器がヤキゴテ（笑）ですし。まだ出て来てませんけど。

それと高威力の砲撃魔法も得意です。
本来の武器で、さわやかに火炎放射器（笑）をぶっ放してくださる方ですし。

・・・あれ、なんかツナさんが鬼畜な奴みたいじゃないか。

そんなこと思ってませんからね。
ちょっと遅くなったけどお誕生日おめでとう、ツナさん。
うちのオトンと誕生日おんなじだなんて奇遇だよ。

第４０話：反撃の星砕魔砲（スターライトブレイカー）なの

「・・・最後に、１つ。」
「ん？」
「はやては・・・助かるか？」
「うむ。八神はやて自身はもちろん、貴様らの頑張り次第だな。」

「大丈夫、フェイトちゃん？」
「うん。なんとか・・・。」

広域型スターライトブレイカーを耐えきった2人は、急いで攻撃主に投降と停止を呼びかけた。

「そこの人っ！今ならまだ間に合います。」
「武器を下ろして投降してください！」
「・・・主は、この世界が夢であってほしいと願った。我はそれを叶えるのみ。」

当たり前だが、そんなことを言ってすぐ止めるような相手ではない。
そんな相手ならば始めからやらないだろうし。

「あの本。あの人が持ってるあれは、まさか・・・！」

「闇の、書？」

サァッと2人の顔が青ざめる。
なのは達は、ここで初めて自分達が相手にしている者の厄介さを知った。
でもそれと同時に自分達が何とかしなくてはという使命感を持ったのも確か。

「闇の書さん。何があったのかは分からないけれど・・・お願い、もう止めてください！」
「大人しく武装を解いて！」

必死に呼びかける2人。
ところが、願いも空しく返ってきたのは闇の書の意思の悲しそうな顔だった。

「そうか。お前も・・・その名でわたしを、呼ぶのだな・・・。」
「あ・・・っ！」

しまったと、なのはが気づいてももう遅い。
正しい名で呼んでいればどうなったのかなどは分からないが。
そうこうしているうちに、フェイトが闇の書との距離を詰めていた。

「Ｐｌａｓｍａ　Ｓｍａｓｈｅｒ．」
「ファイヤ！」

フェイトの右手に魔法陣が現れ、そこから高威力のビームのようなものが発射された。
と同時に、闇の書の後ろからはいつの間にか追いついていたなのはからも、はさみうちの要領で砲撃魔法が撃たれる。

「Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔａｒ　Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ.」
「シュートっ！」

完全に闇の書の隙をついた挟み撃ち攻撃。
この場にいた誰もがなのは達の勝利を確信した。
２人を除いて。

「・・・あれでは――」

１人は闇の書自身。
もう一人は、ツナ。あのビルに彼はまだいた。

「盾。」
「――彼女には、通らない。」

闇の書の呟きと同時に、なのはとフェイトの攻撃が片手ずつの魔法陣でいとも容易く止められた。
もちろん彼女たちは手加減などしていないつもりで撃った。
２人に反省する隙も与えず、闇の書はそのままの両手のふさがった状態で攻撃を仕掛けてきた。

「刃以(も)て、血に染めよ。穿(うが)て・・・ブラッディダガー。」
「Ｂｌｕｔｉｇｅｒ　Ｄｏｌｃｈ.」

超高速の鋼の血の色をした短剣が、なのは達にあっという間に命中。
爆裂効果を持つこれが当たればタダでは済まないだろう。
ところが。

「あ、あれ。」

「無傷・・・？」

そう、なのはたちにブラッディダガーは当たらなかった。
防御する暇などなかったのにも関わらず、だ。
一体何が起きたのか。
答えは簡単。ツナが遠距離防御魔法で２人を庇ったのだ。

「大丈夫か。なのは、フェイト。」
「え・・・綱吉、くん？」
「ツナ・・・？」

２人が驚くのも無理はない。
だって、今のツナは元の沢田綱吉。１８歳の青年なのだから。

「話は後だ。今はとにかく、彼女の相手をするしかない。」
「うん！」
「わかった。」

今自分達ができる事。
それは、とにかく彼女を――夜天の魔導書を抑えるコト。彼女を説得するコト。
主が自我を取り戻す、そのときまで。

「ねぇ、あなたの主さんの願いって何？この世界を壊すこと？本当に、そんな願いであなたの主さんは喜ぶの！？あなたに・・・あなたには意思があるでしょ？心があるでしょ！だからお願い。自分はただの道具だなんて悲しいこと、言わないで！」
「我は魔導書。主の願いは、わたしの願いだ。」

心を閉ざした魔導書に、なのはの言葉は響かない。

「本当に心がないんなら・・・泣いたり、悲しんだりなんかしないハズだよ。」
「この涙は主の涙。わたしは道具だ。悲しみなど、ない。」
「・・・そんな言葉をそんな悲しい顔で言ったって、説得力なんてない。」

フェイトの言葉も、ツナの言葉も、彼女に響くことはなかった。

「私はただの、道具だ。」
「このっ・・・分からずや!!」

バリアジャケットをサイレントフォームに変え、格段に身軽になったフェイトが攻撃を仕掛けた。

「ん?ここどこ・・・まっくら。」
「ブイっ。」

気がつくとわたしは、まっ黒いばしょにいた。
レマノフさんがとばしてくれたんだと思う。

「はやてお姉ちゃんをさがさなきゃ!どこにいるのかな?」

どこもかしこもまっくらだったけど、左のほうにかすかな光がみえた。
もしかしたらあそこかな？
よしっ、いってみよう！

「いくよブイちゃん！」
「ブイブイ！」

はしるはしる。
とにかくはしってはしってはしってはしった。
めちゃくちゃはしった。

「し、しんどい・・・！ってゆーかとおっ！！」
「ブイ・・・。」

うぷっ。
なんとかついたけど・・・はきそう。
もうちょっとだけゆっくりすればよかった・・・。

「おねーちゃんは、どこ？」

なんとかおちつきをとりもどしてまわりをグルグルとみまわしてみた。
いない。
どこにも、いない、よ？
こんなにがんばったのに、アリシア。

「・・・ぐすっ。」
「ブイっ！！」

な、なかないもん。
フェイトのお姉ちゃんなんだからないちゃだめなんだもん！

「ブイブイっ！」

とつぜん、ブイちゃんがわたしのふくをひっぱりはじめた。
えっ？むこうからはやてお姉ちゃんのにおいがするの？
ほんと！？

「いこっ、ブイちゃん！」

わたしね、言わなきゃいけないことがあるの。
だからぜーったい！はやてお姉ちゃんをつれてかえるんだ。
かえって会いにいくんだから。わたしのたいせつな妹に。

「プラズマザンバー！はぁっ！」
「・・・。」

剣のようなザンバーモードにバルディッシュを変化させ、持ち前の速さで近づき闇の書に向けて振り下ろす。
近接戦闘ならばスピードの速いフェイトに分があると思われたが、いとも容易く防がれてしまった。

「アクセルシューター、シュートっ！」

かといってなのはの魔力弾も、当たる前に撃ち落されてしまう。

「Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｓｔａｒ．」
「・・・標的、ロックオン。」

ツナの攻撃も彼女のシールドの前には歯が立たない。
ここでなのはが、すうっと息を吸い込んでからこう言った。

「フェイトちゃん、綱吉くん。闇の書さんをバインドか何かで、逃げないように固定して。・・・全力全開のスターライトブレイカーでオトすから。」
「う、うん、んっ・・・？（逃げられない相手に全力でアレを撃つ、の。）」
「・・・（固定した相手に全力全開・・・）わかった。」

内心で遠回しにではあるが鬼畜だと思いつつ、まあそんな手だてしかないことも確かだったので。
２人はなのはの案にのった。

「スタァライトォ――」
「！」

闇の書にフェイトとツナのバインドがからみつく。
なかなか外れない。というか砕けない。
そうこうしているうちになのはが杖を振り下ろした。

「ブレイカァァァーッ！！」

魔砲少女の全力は、我儘っ子？に届くのか。

というか主人公。
お前もっと働け。

第４０話：反撃の星砕魔砲（スターライトブレイカー）なの（後書き）

「セピア」

１０月１４日の誕生色

教養・初々しさ・独創性という意味

豊かな感性を持つ気まぐれな人といわれる

（『誕生色大辞典』より）

番外編：なのはちゃんとつなよしくん（前編）（前書き）

時は遡りまして。
とある小話。

番外編：なのはちゃんとつなよしくん（前編）

あれは、そう。
夏の暑い日の話。
その日オレは一日中なのは達と遊んでいた。
見た目に沿って小学生の夏休みらしく。

とはいえ、暑い。猛暑の真昼間は地獄。
これ絶対誰か倒れてるだろ。

「綱吉くん、どこにいこうか？」

涼しい場所ならどこでもいい。

「すずかちゃんとアリサちゃんは塾があるからって午前中だけで帰っちゃうし。」
「とにかく、どこかのお店に入ってみるか。」
「うん！」

近くを見回すと、都合のいいことにゲームセンターがあった。
はじめて・・・ではまさかないだろうが、大喜びのなのは。

「わぁっ！ねぇ、プリクラ取ろうよ！」

女子高生か。

「どれがいいかな？」
「・・・。」

腕を掴んで引きずるのをやめろ。
――と言えない自分が憎い。むしろ殴りたい、このダメツナ。
なんで高3の終盤にもなって女子に引っ張り回されてるんだ。
・・・いや、今は小学3年生か。

「わー、かわいい！見て、小学生2人がいるよー！」

ふと後ろから声がして、思わず振り向いてしまった。
振り向く前は、なにを言われていたのか分からなかったんだ。
そこには女子高生らしき2人組がいた。

「ホントだどっちもかわいい～。あんたもこれぐらい可愛かったらいいのに。」

なのははともかく、オレは可愛くないし言われても全く嬉しくない。
横のなのははというと少し嬉しそうだ。
照れている姿が年相応で可愛らしい。

「可愛くなくて悪かったわね。私は美人系を目指してるの。」
「えー、可愛い子の方がモテるって！まずは・・・そうだ、思い切って縮んでみたら？」

無理だろ。

「無茶苦茶言わないでよ。いきなりあんなちっちゃくなったらたまんないでしょ。」

ほんとにな。

「それにしても可愛い！キミたち、どこの子？」
「・・・。」

海鳴市、と答えるべきか。
さすがに名前は止めたほうがいいだろう。

「私立聖祥大付属小学校3年生、高町なのはです！」

・・・ｏｒｚ
馬鹿正直に答えるな。

「えっ、頭いいとこじゃん！」
「すっごーい！」

とにかくオレはさっさとプリクラとやらを終わらせたかったので、
軽く頭を下げてその場を去った。
付き合いきれない。

「綱吉くん、どのフレームがいいと思う？」

正直どうでもいいというより分からない。
というか、彼女いない歴＝人生のオレに聞くのが間違ってる。
女子とまともに話せた事も数えるほどしかないのに、小学生女子の
好みなんて分かるわけがない。

「・・・2ば、んとか・・・」
「2番目のだね！じゃあ私はこれとこれにするね。いいかな？」
何枚か写真を撮られた。
・・・。
「らくがきなに書く？」
「・・・。」
ここはなのはに任せた方がいいだろう。
「なのはが好きなように書けばいいんじゃないか。」
「本当？私がんばるね！」
別に頑張ることじゃないとおもうんだが。
「えへへ、これ一生の宝物にするよ！綱吉くんとの思い出その一！」
「ありがとう。」
そんなこんなで、オレ達はプリクラコーナーを出た。
・・・女子ってすごいな。
次にたどり着いたのは、ユーフォーキャッチャーとかが置いてあるコーナー。

きょろきょろと物珍しそうにあたりを見回すなのははは、とても可愛らしい。
と、ひとつの景品の前でなのはが止まった。
それはユーフォーキャッチャーの景品で、大きなクマのぬいぐるみ。
今ならこれをとると、おまけでクマのクッションもくれるらしい。

「・・・ほしいのか？」
「ええっ！？あ、いや、ち、違うよ！ちょっと珍しかったから見てただけだよ！」

ほしいんだな。

「・・・。」

久しぶりにやってみるか。

「綱吉くん？」
「ちょっとそこの椅子で待っててくれるか。ジュースか何か買ってくるから。」
「あっ、うん。ありがとう！」

純粋って、いいな。
なるべく早くとって戻って来ないと。
驚いた顔が楽しみだな。

１５分後。

「とれ、た・・・！」

１５００円つぎ込んでようやくとれた。
ちなみに1回１００円で、３００円入れると5回挑戦できるタイプだった。
いそいで店員さんからおまけのクッションを受け取り、なのはのもとへと走る。

「？」

だがそこになのははいなかった。

「・・・なのは？」

待ちくたびれて怒って帰ってしまったんじゃないだろうかと思った。
が、違った。
近くにヒトの群れができていて、そこからなのはの声がしたのだ。
慌てて近くまで行く。

「この写真の子になんのようなのかな？」
「あ、いや、それは・・・いててててぇっ！！」

そこには、不良っぽい風貌の男をぐりぐりと素敵な笑顔で踏みつける少女がいた。
・・・なのは、お前何してるんだ。

「言ってくれないとわからないよ？」
「やめ、いた、いてぇぇぇっ！！」

痛すぎて喋れてない。
というかもうやめろ。

「・・・なにやってるんだ・・・。」

止めに入ろうとした時、突然今まで踏まれていた男がどこからか拳銃を取り出した。

「！」
「じゅ、銃刀法違反だよ！？」
「知るかよ！ほらほら、撃たれたくなかったら足をどけなお嬢ちゃん。」

怯えたなのはは動けないようだ。
周りのヤジ馬たちも、拳銃を見たとたん悲鳴を上げながら逃げて行く。

「さっさと除けろって言ってんだろ！」

男がなのはに向かって引き金を引いた。

番外編：なのはちゃんとつなよしくん（後編）

「どけぇ、クソガキがぁ！」
「あ・・・あ・・・っ。」

私の目の前で、拳銃の引き金が引かれた。
思わず目をつぶる。
同時に思わず横に転んじゃった。
ビックリして、誰かにぶつかっちゃったみたい。

死んだな、私。

バァンッ！
バンバンバァァンッ！！

「きゃあっ！・・・ん・・・？」

おかしいな。
いつまでたっても痛くない。
４発ぐらい銃声したのに・・・。

「・・・え?」
「ちっ、ガキが邪魔しやがって!」
恐る恐る目を開けてみる。
するとそこには、倒れた綱吉くん。
「つ、綱吉くん!?なんで、どうなってるの?」
「ごほっ!・・・っ。」
綱吉くんの口からは血が。
銃弾が当たったのか、体の方も血だらけだった。
そのうち一発が胸に貫通していて苦しそう。
「も、もしかして・・・?」
私、誰かにぶつかって転んだんじゃなくって綱吉くんに庇われた・・・?
じゃ、じゃあ今綱吉くんが倒れてるのって、私のせいだ。
私が早く逃げなかったから!
「しっかりして、綱吉くん!」
「・・・な、のは・・・けが、は?」
「ないよ。それよりも・・・」
そういったら、綱吉くんの顔がほころんだ。
「よかっ、た・・・」
同時に動かなくなる。

慌ててゆすったり声をかけてみる。けど。

「綱吉、くん？ねぇ綱吉くん！」

反応は帰って来ない。
目も、開く気配がない。
死んじゃってないよね？ねぇ？

「はっはっは、ざまぁねぇぜ。ガキがオレの邪魔しようなんざ１００年早いんだよ、カスが！」

・・・許せない。

コイツだけは何があっても。
例え神様が許したって世界が許したってこの世が滅亡したって。

私は許さない。

「ん？ありゃ、よく見たらコイツ写真のヤツにそっくりじゃねぇか。」

男は倒れたツナの髪を乱暴につかんで持ち上げ、写真の顔と見比べて言った。

確かに男の持っている写真の人物はツナだ。

「んだよオイ。殺しちまったよ～・・・まあいいか。」

おいおい言いながら、男はツナをドカッとこれまた乱暴に床に叩きつけた。

なのはの頬がヒクッと一瞬つり上がった。

が、男は気付いていないようだ。

「さて、後はアンタの後始末だけだ。大人しく死にな、お嬢ちゃん。」

「・・・。」

ツナをやってテンションが上がっているのか、男はなのはに銃を向けた。

何も知らずに。

「・・・ねぇ、そこのお兄さん。」

「んだよ。命乞いならきかねぇぜ?」

男はまだ気づかない。

「それとも遺言か?それなら一応聞いてやるよ。」

「遺言・・・ね。」

自分が何を敵に回したのかを。

「ちょっと・・・おはなし、しようか？」

「は？」

皆さんはもうおわかりだろうが、なのはのお話＝肉体言語である。
死亡フラグ、乙。

「あなたは、その鉄の塊で生物を撃つっていうことがどういうことか・・・分かってないね。」
「ガキが何をほざこうがもうおせぇんだよ！！」
「・・・。」

男は再び引き金を引いた。
なのはの瞳が可哀想なものを見る目に変わる。

「な、なんだ、そりゃ！？」

銃弾は全てなのはの魔法陣に防がれていた。
あせって引き金を引くが、もう弾切れだ。
男が慌てて謝り始める。

「オレが悪かったよ、お嬢ちゃん！だからこの場は見逃してくれって。な？」

当たり前だがそんな言葉を真に受けるバカはもうこの場にはいない。

いたにはいたが、経った今男が自らの手で魔王様に覚醒させてしまったのだから。

「他人の命は散々弄んでおいて、自分の命は大切？それって虫がよすぎるとは思わないのかな。」

「た、たのむ、見逃してくれ！」

バインドでなのはに自由を奪われた男がもがく。

こうなったらもう、なのはは誰にも止められない。

「その大きなお口は助けてとしか言えないのかな。」

「ひぃっ！なんなんだよ、テメェ！」

なのはが一歩ずつ男に近づく。

「来るな！この・・・悪魔め！」

「悪魔でいいよ。でもその前に――」

予想外の返答に、男が呆然としてしまった次の瞬間。

なのはの手からピンクの光が溢れだした。

「――ちょっとあたま、ひやそうか。」

男はケンカを売る相手を完全にミスりましたとさ。

ちゃんちゃん。

あっ、ツナさんは運よく弾丸が急所を外れていて無事でした。
後1センチ下だったらヤバかったんだとか。
すぐ病院行って治療してもらいました。

「綱吉くんごめんね。でも、本当にありがとう。大好きだよっ！これからもよろしくね！」
「？」

以上、なのはちゃんと綱吉くんのとある夏の日のお話でした。

番外編：なのはちゃんとつなよしくん（後編）（後書き）

完全にわたしの自己満足です。
本当にありがとうございました（ｒｙ

次回からちゃんと本編進みます。
すんませんでした。

第４１話：管理局のヒミツの策なの

そのころのニセなのはとニセフェイト。
彼女たちの正体は、謎の男だった。
しかも男は２人いた。
１人ではなかったのだ。

「デュランダルの用意はいいか？」
「ああ。急ごう・・・っ！？」

ところがその男たちの動きは特殊なバインドによって封じられてしまった。

「こんなところで何をしてるんだ？――アリア、ロッテ。」
「やろ・・・クロノォっ！！」
「こんな魔法、教えた覚えなかったんだけどなぁ。」

男の姿は幻術で見せていた偽り。
中身はグレアム提督の使い魔、リーゼロッテとリーゼアリアだったのだ。
仮面がポロリと落ちその顔があらわになる。

「後ちょっとだったのに！」
「勝手な行動をとったことは違反だ。管理局まで来てもらうよ。」

実は、ロッテたちは氷の杖・デュランダルで暴走前の闇の書を主ごと永久凍結させて時空の彼方へ封印するつもりだったのだ。

ところが計画はクロノに気づかれたことで失敗。
2人はクロノに連れられ、時空管理局の本局へと強制帰還することとなった。

ん～・・・。
あっ、どうもこんにちは！アリシアです。
実ははやてお姉ちゃんを探しているうちに、面白いものを見つけたんだ。

「じゃ～ん。蒼い石のついた指輪～！」

えへへ、もっていこーっと。

「ブイブイっ！」
「わかってるよう探すってば。はやてお姉ちゃ～ん、どこにいるのー！」

それから私がお姉ちゃんを見つけたのは、数分後のことでした。

時空管理局・本局
ギル・グレアム提督の部屋

「八神はやての叔父のふりをして彼女の生活費を援助していたのも・・・提督ですね。」

アリアたちを連れ帰ったクロノは、すぐさまグレアムに話を聞きに行った。
なぜ単独でこのようなことをしたのか。

「独自のルートで調べてこの子が闇の書の次の主と分かった時。可哀想だと思ったが、同時に運命だとも思った。両親を早くに亡くし親しい親戚もいないこの子なら、悲しむ人も少なくて済む。・・・生活費の面倒を見ていたのは、せめて最後の短い時間ぐらい幸せに過ごさせてあげたかったのだ。」

グレアム提督がまだ現役の司令官だったころ。
そのころに起きた闇の書事件で、執務管だったクロノの父親を目の前で失ったのだ。
ずっと、それを自分の責任であると考えていたグレアムは、現場を引退した後も独自に闇の書について調べ上げていたのだ。
時間の狭間に永久凍結は、そのグレアムが下した最善の策だった。

「・・・提督。その作戦には問題があります。」

そう言い問題点をつらつらと指摘して行くクロノ。
最後に彼はこう言った。

「それに、たとえ凍らせて封じたっていつかは解かれてしまいます。

人がいて憎しみや辛さがこの世に存在する限り、絶対に誰かが。」
「・・・クロノ。」

そのまま出て行こうとしていたクロノの動きが、その一言で止まる。
呼びかけたのはグレアム。
名前を呼んでこちらを向いたのを確認してから、提督はカード――デュランダルをクロノに投げてよこした。

「これを持っていくといい。計画が破綻した今、もうわしらには使わないものじゃ。」
「・・・ありがとうございます、グレアム提督。」

今度こそクロノは、部屋を出た。

第４１話：管理局のヒミツの策なの（後書き）

み、短いとか言わないで。

いたっ！石！石投げないで、いたいいたい！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4820r/

大空異聞譚～魔法と少女とオレンジと。

2011年11月1日02時26分発行